織斑一夏は逃げられない

ニジョー条

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

織斑一夏になってしまった隠れオタクの男の物語り。姉の親友に教えを乞うた為ＩＳに関わってしまう破目に。知識は十分。周りは癖の強い女性達と厄介事を押し付け合う友人。関わっていくのは忌避していた筈のＩＳ。退学すればモルモットか命を狙われる。卒業しても同様。

一夏「一体どうしろと?!」

作者はＩＳ原作未読です。知識は二次小説とｗｉｋｉ便りで、ノリと勢いと書いたので間違ってる部分があるかもしれません。その際はどしどし指摘して下さっておｋです。あと、筆記スピードは遅いです。

１２／１２　タグ一つ追加

目　次

逃げられた頃の俺 ―― 1
ドラクエ式進路選択。一夏「……せ、選択？」 ―― 9
帰宅。俺の不幸はこれからだッ！ ―― 18
入学。視線って重圧になると知った日 ―― 30
決闘は避けられない ―― 40
真昼の出会い ―― 50
放課後の出会い ―― 60
戦いに向けて ―― 70
戦いに向けて２ ―― 82
亮斗　ｖｓ　セシリア（上） ―― 94
亮斗ｖｓセシリア（下） ―― 103
一夏ｖｓセシリア ―― 115
束の間の男女 ―― 132
一夏ｖｓ亮斗 ―― 144
彼女が選んだ道 ―― 154
クラスの代表 ―― 165
凰来来 ―― 171

逃げられた頃の俺

これは過去にあった兄妹の会話。

――いちか、だいじょうぶ……？

――ふ、ふふふっ、このていどのかぜ、おれにはどうってことないぜ！

不安がる双子の妹に、俺はそう答えた。

この記憶は確か、滅多に帰って来ない父が久しぶりに帰って来て、土日を利用して日帰りの旅行をしよう言い出し、――当日なって俺が風邪を拗らせたのだ。

――でも……

――だいじょうぶだって！あさごはんはくったし、あとはとうさんとかあさんとねえさんと、■■■がかえってくるまでねてるだけだからさ

――う～～

渋る妹。まあ何時も一緒だったのだ。行き成り片割れが居ない日を送れと言われても、戸惑いしかないだろう。

だが俺は、■■■や姉さんよりもとある事情で精神が大人だった。だから、楽しい一日を過して欲しいと思い、後押しをした。

――これ、もってろ

――これ、いちかの

渡したのは〝今〟の両親に貰った、オリオン座が刻まれた青のブレスレットだ。見た目がカッコイイので、俺のお気に入りだったのだ。

――それ、かえってきたらかえせよ？そしたらさ、

――そしたら……？

――いっぱい、■■■がみてきたこと、はなしてくれよな！

――……うん

ようやく納得した■■■は、そのブレスレットを首から下げ、犬の尻尾の様に小さいポニーテ―ルを揺らして部屋の外に出て行く。

（――や、ろ）

引き留めなくちゃ、――そう思っても、声は出ず、体の感覚さえな

い。――――当たり前だ、だってコレは、
――いってきます！
――おう、いってらっしゃい！
そういって、妹は出て行った。
（やめ、ろ……っ）

だが……、
（やめろ……ッ）
帰って来たのは半分に割れたブレスレットだけだった。

――――過去の出来事なのだから

◆

「やめッ――！」
「うおッ?!」
「チッ、あと少しだったのに」
「いや、一夏からしたら、起きてれて良かったんじゃないか？」
声を上げながら体を起こすと、視界に映ったのは部屋を出て行く妹では無く、中学を共に過ごした友人達だった。
（ああ……、明日が入試試験だから、ラストの追いこみ勉強をしてたんだった）
一人だけ驚きの声を上げた奴は『五反田（ごたんだ）　弾（だん）』。お前ありえないだろというレベルの赤い髪が特徴だ。
一人は短髪の黒髪で、十分イケメンと呼ばれる容姿を持っている『御手洗（みたらい）　数馬（かずま）』。普段は女の取り巻きが３人居る。
最後の一人は、舌打ちし、手に水性ペンを持つ男『木場（きば）　亮斗（りょうと）』。コイツはツッコミ所満載で、名前を見れば日本人なのだが、容姿は外側にはね返った金髪のセミショートに青い瞳、白人特有の白い肌。言うだけなら女性と見間違えそうだが、意外にちゃんと男として見られる、と言う。もうお前二次元の住人だろ!?と言わんばかりのあり得な

い奴だ。コイツとは小学校に上がった頃からの付き合いで、一緒に剣道場に通っていた仲だ。ついでに言うとコイツも転生者だ。言動と行動で分かった。

そして、俺の名前が『織斑一夏（おりむらいちか）』。転生者だ。

ある日の大学から帰り道で、ガードレールごと潰され、気付いたら4歳くらいの男の子になっていた。憑依じゃないのかとも思ったが、数日経ってから振り返ってみると、微かにだが、生まれ初めて抱きしめられた事や、父親に高く持ち上げられた事などを思い出すので転生だと判断した。

まあ、ぶっちゃけどっちでも良いんだけどね。だってどっちにしたって生まれたての赤ん坊から人生始めたのは確かだし、『俺』が『織斑一夏』である事は変え様のない事実なんだから。

ただ、何故だか知らないが、3～4歳辺りの記憶が酷く曖昧で、大部分の事を思い出せなかったのだ。

だがそんな事を考えている余裕はなく。織斑一夏として、姉――織斑千冬と二人で四苦八苦しながら生き。姉の人生初の友だちが天才を通り越し、大天才だと言う事が分かり、才ある者同士は惹かれあうのだと察し。この世界には前世に存在した企業や会社（主にゲーム関係）やアニメが無いと悟り愕然とし。件の大天才――篠ノ之束にプログラミングを教えて貰いながら彼女の趣味を手伝ったり、某同人弾幕ゲームを製作してネットで売って生活資金の足しにしながら数年経った時、

――世界が一変した。

その原因は、前述した姉の友人『篠ノ之（しのの）束（たばね）』。別名『天災兎』『対人コミュスキルゼロ兎』『子供以下の対人認識女』『Ｎｏ．１おっぱい』『テロ兎』『年考えろよ兎』と呼ばれる（殆ど俺しか言わないが）女だ。

と言うのも2年ほど前に、彼女はその鬼才な頭脳で宇宙空間でも活動可能なマルチフォームスーツ『インフィニット・ストラトス』、通称『ＩＳ』の基礎理論を構築し、発表したのだ。

しかし世界はＩＳ理論を一蹴した。何故なら、そのＩＳの搭乗資格を持てるのが女性だけだったからだ。凄いのは認めるが、女性だけに

しか動かせないというのは欠陥だ、と。
向こうも正論を述べているが、そんな事で、自分中心で考える篠ノ之束には理解できなかった。
――だから彼女は考えた。
〝なら、世界を自分中心で動く世界にしよう〟、と。
そして僅か2年で実証機を造り、証明した。
やり方は天災の名に相応しく、ド派手で豪快で非常に分かり易かった。
まずＩＳの持つ量子理論を用いて作ったＰＣでもって、世界中の軍事基地をハッキングし掌握。
その後、約２４００発以上のミサイルを日本の首都へ向けて発射。
各国の軍隊が撃ち落としきれず、そのまま首都に向かってしまった半数以上（つまりは１２００発以上）のミサイルを、ＩＳ実証機『白騎士』一機で迎撃。
その後、その性能を証明した『白騎士』を、捕獲または撃墜しようと送り込まれた即席連合艦隊の大半を無力化し、追跡を振り切って雲隠れ。
死者も０と言うその実証に世界は注目した。圧倒的な性能、既存のどの兵器よりも強力で、縦横無尽な飛行性能。
世界は手の平をひっくり返してＩＳに喰いつき、世界は一気にＩＳ一色になり、世論もＩＳを使える女性優遇の社会になった。結構傲慢な女性も居るが、それでも全体の2、3割程度だがまともな人格の女性はいる。その点を考慮してみると、女性の地位が上がった以外、前の世界と特に代わり映えしない世界だということだ。
……いや、こっちの方が技術面では上だな。
なんせ、至る所に空間パネルの看板や商標を見る事があるのだ。近未来である。ドラえもんである。こっちでもやってた。
とまあ色々語ったが、俺たち中学生――特にＩＳ適性のない男子は普通に高校に行くか中卒で就職の二択なので、現在懸命に勉強中と言う訳だ。俺は別に成績低い訳じゃないが、時には復習するのも良い勉強になるで彼等の試験勉強に付き合っている。

「わりぃ寝てた」
「気にすんな。俺達も頭使い過ぎたから、一休みしてたしな」
「うん、それに一夏は結構ハードな日々送ってるからね。疲れるのも仕方ないと思うよ」
弾と数馬がそう言ってくる。
俺の一日を簡単に話すと、
まず朝早く――大体２時半時に起床し、新聞配達のバイト。これは早朝のみで、学校側にも家庭事情として認可して貰っている。キツイが体力を付けられ、尚且つ給料も出ると一石二鳥だ。
７時近くに家に帰り、軽く汗を流し朝飯の準備。米は自炊機だし、おかずは基本大量に作って作り置き＋昨夜の残りで手軽に１品＋味噌汁＋漬物といった具合なので、大した手間じゃない。弁当のおかずにもなるし。姉さんは仕事柄たまにしか家に帰ってこれないので、だいたいこんな感じだ。
俺も姉さん（隠している様だが、ＩＳ学園で教師である事は調べてある）も、別にお金に困ってる訳じゃない。姉さんは職に付いてるし、俺はネットでアプリゲーム『刀砲Ｐｒｏｊｅｃｔ』（ぶっちゃけ東〇Ｐｒｏｊｅｃｔのパクリ）の販売と、早朝の新聞配達でそこそこ儲かっているからだ。ちなみにこの「刀砲」、結構売れている。
ちなみに一作目の内容は、ＩＳ界最強のブリュンヒルデこと〝博麗（はくれい）千（せん）〟が幻想世界という妖怪と人が共存する世界に迷い込み、たまたま暴れまわっていた魔法使い一家と戦う、という設定だ。二作目からは相方がおり、ソイツの名前は〝タバ姉さん〟。〝千〟が接近戦主体で、〝タバ姉さん〟は遠距離主体のプレイヤーキャラだ。ちなみにまだ２Ｄ画面。制作側が俺しかいないので、作るのも一苦労だ。亮斗？アイツはテストプレイヤーだ。
――また話しがズレたので戻そう。
平日なら学校があるし、土日祝日はきちんと休みを取っているので、体を壊す事は無い。そもそも今の肉体自体、潜在能力というかポテンシャルが高いから、しっかりとマッサージや休息を取れば問題ないのだ。

放課後は食材の買い物か、ソレがなかったら夕食の支度の時間まで弾達と駄弁ったり、出された課題をしたり、家に帰り『刀砲』のグラフィック制作やプログラムを組んだりして過している。

そして夜。就寝時間は１０時と決めているので、その間に好きな事をしている。此処最近は受験勉強がメインだが、それでも風呂に入る前に数十分ほど竹刀を振っている。偶に姉さんが相手になってくれる時があるので、対人戦の勘が鈍らないので有難い事だ。

そして風呂に入り、姉さんが居る時は、最後に姉さんの晩酌のお供を軽く作って寝床に入る。

学生としては結構多忙な方だが、それでもまあ結構充実した日々多くっている。そして、出来る事ならこのまま何気ない日々を過ごしたいと思っている。

目下最大の重大ポイントと言えば、

「(――どうか、天災が変な動きをしませんように)」

波乱万丈な人生なんていらない。平穏な人生を歩みたいのだ。

「無駄な気がするがな」

「黙ってろ亮斗」

あと、ナチュラルに心を読むな！

「落ちたらウチで雇ってやるよ」

「うっせぇ！　不吉な事言うな!!　それに、そんなことしたらブラコンの蘭に殺されるだろうが、――俺が!!」

「どっちかって言うと、料理人としてのライバル関係っぽいがな」

そうだとしても、あの子は俺を殺意の目で見て来る。――その理由が、お兄が良く話す話題が俺たち中心の話で、その中で俺が一番料理が上手いからだそうだ。

……俺、ホモじゃねえから!!

「僕としては受かって欲しいな。藍越って遠いから疎遠になるし――主に僕の精神的安穏の為に」

「友達甲斐の無いヤツだなオイ！」

俺はただ、恋する女性に男性視点からのアドバイスをしてやっただけなのに。

「ソレが有難迷惑だよっ！お陰で段々と外堀も埋められて来てるんだからね?!仕返ししようとしても、一夏は女性関係に関しては整理してあるし！」
そりゃあ、俺、小説とかに出てくる鈍感系主人公じゃねえし。
外見から言えばイケメンに分類されるから、告白された事もある――が、その大半が一目惚れして遠目から眺め、イベントがあるごとにラブレターで呼び出され告白、と言う流れだ。ある意味、初対面で告白される様なものだ。付き合える訳が無い。
親しくなってから告られた事もあるが、その８割近くが、『織斑千冬が姉』と言う理由だ。口には出して無かったが、姉さんを見た後で、えらく積極的に迫ってきたから一目瞭然だ。
そんな理由で、女性と付き合った事は〝殆ど〟無い。あっても俺の日常に合わせられなくて別れたり、実はオタク系だったのを知って別れたり等々。
「ハァ……勉強する気分じゃ無くなったな。……帰るか」
帰って明日の準備と、夕食の支度と、……あ、そう言えば姉さんが飲むビールが無くなってきたな。ならついでに数日分の食材を買っとくか。
「だな。要は半分以上点取れれば良い訳だから、満点取る必要ないし」
俺の言葉に亮斗が同意し、道具を片付け始める。
そう言えば、コイツもモテそうなのにそう言った噂とか話しを聞かないな……やっぱり箒の事が気になってるのか……？
「俺も帰るか。そろそろ蘭から『帰って、こないの……？』ってメール来そうだし。……知ってるか？アレ、文面だけなのにヤンデレの口調で言われてる気がすんだぜ？」
そりゃ俺が教えたし。言うと殴って来そうだから言わないけど。
「僕の平穏も終わりか。何故か男同士で遊びに行く時だけ、あの子たち付いて来ないから気を使わなくて済むし」
それも俺の恋愛指導の賜物だ。以前「数馬は男も惚れる程良い男だが、衆道の毛はないから安心しろ」「偶には一人にさせてたり、同姓との時間をあげる事も重要」「年がら年中一緒だと、一緒に居るのが当た

り前になって、意識されなくなる」と指導したのだ。こっちは感謝されそうだけど、男に泣き付かれる趣味は無いので話さない。
「「「ハァ～～」」」
溜息が重なった。
「お互い、苦労するな」
「お前ほどじゃないがな」
「同感。つーかテメェが大半の原因なんだが」
「この元凶めッ！」
「テメェらのシワ寄せを倍返ししただけだよ!!」
「「最悪だ、お前!!」」
失礼な奴らめ、と思ったが、コイツらが居たお陰で楽しい学園生活を送れた事は、凄く感謝している。だからこそ、これからも平穏な生活をしていきたいと、切に願った。

終わりが近い、と、心の片隅で少なからず感じていたとしても。

ドラクエ式進路選択。一夏「……せ、選択？」

――２月某日・受験日

俺が受ける私立藍越学園は、学費が安く高い就職率をキープしている。試験日も２月の中盤なので、第一希望に落ちた者や最後の頼みと言わんばかりに受ける者も居るので、毎年多くの受験生が志望する。質より量で学費の低さを補う為、それなりの定員設定（一クラス４０人前後で８クラス、つまりは３００人以上）なのに、ソレを越える志望が届くのだ。そして、俺と亮斗が受験する学校でもある。

――そんな中、俺は今人生の選択肢を選ばされていた。

場所は、藍越学園の試験会場――の隣で同じ日に開かれている、特殊国立高等学校ＩＳ学園最終試験会場。その一室の広い大ホールだ。

その中心に一つの『兵器』が置いてある。青白い光を放つ台座『シールドエネルギー補給装置』の上に、二メートル近い全高を持った、武士鎧をイメージしたメタリックグレーの兵器。純国産のＩＳ『打鉄』だ。

ソレが、『誰か』を待つかのように鎮座している。

「ハァ……」

思わずため息が漏れる。

そもそもの予兆として、朝からおかしい事の連発だった。

昨日はしっかりと寝たし、朝刊配達は休ませて貰ったし、朝飯はしっかりと食べた。目は覚めてたし、頭もしっかりとしていた。そしていざ出陣、と気合を入れドアを出た瞬間――耳鳴りがしたのだ。

それ以降、此処に来るまで何度も耳鳴りがし、試験会場に着く頃には頭がボーっとし、試験の間も頭痛に悩まされながらもやり遂げたのを覚えている。その後、まるで夢遊病患者の如くフラフラと通路を歩き――ふと我に気付いた時、打鉄に触れそうな瞬間だったので、慌てて手を引っ込め、――――そして今に至る。

◆

打鉄を前に立ち早数分、いや、もしかしたらもう１０分以上は経ったかもしれない。

もうすぐ面接試験が始まろうとしている。今すぐに引き返さなければ、時間的に間に合わないのだが、様々の想いが入り混じりずっと打鉄を見続けていた。
だが漸くある事に思い至り、携帯を取り出し無記名の番号をコール。
『はろはろ～☆たっぱねさんだよ～☆　私に何か用かなー、いっくん？』
ワンコールもせずに相手は出た。
「――お久しぶりです、束さん」
篠ノ之束。ＩＳの生みの親にして、３年ほど前から行方知れずの世界的重要人物。現在に置いても、世界各国――それこそ軍・企業・研究施設に関わらず、裏からも行方を探られている大天才科学者その人だ。
……その割に、偶にウチで呑気にメシ食ってるけどな。
この前来た時は、娘みたいな子！と言われてクロエを紹介された時は、姉さん共々この世界が終わる様な顔をした覚えがある。
まあ今はそんな事関係ないので放置。
「〝コレ〟、束さんの差し金ですか」
『ナンノコトカナ～？　って、もはや疑問形じゃなくて確信で言ってるよね、いっくん』
朝からの耳鳴り。誰一人として来ない大ホール。そしてご都合主義の如く一体だけ置いてある打鉄。――もしかしたら藍越とＩＳが一緒の試験会場という事さえも、篠ノ之束の謀（はかりごと）の気がする。だってＩＳ関係は全て国家レベルのセキュリティなのだ。しかも試験内容は筆記の他に、ＩＳを用いた模擬戦もある。それを私立高校と同じ試験会場など、ハッキリ言って正気の沙汰じゃない。
「そもそも、男の俺にＩＳが起動するんですか？」
昔、束さんの手伝いの関係で触った事があるが、コアを触っても起動しなかった覚えがある。
『問題ナシナシ！　私を誰だと思ってるのさ！　いっくんと後、箒ちゃんが好意を寄せてる憎っくきウザったい子……りょっ

ちゃんだ！　いっくんとりょっちゃんのパーソナルデータをネットワーク内に入れといたから、問題なく動かせるよ！』
「（亮斗……アイツもか）……ん？あれ、と言う事は」
携帯を離し、耳を澄ます。
と、ドアの向こうから慌ただしい声が響き、
――大変よ！い、いま男の子がＩＳを――
――なッ！それは――
――企業関係者は――
――パルパルパル――
大騒ぎだった。と言うか最後の奴、お前絶対に『刀砲』やってるだろ!?
「帰って良いですか？」
『えー！そしたら、昔、いっくんが私の手伝いしてたって情報流しちゃうよ？』
「脅しか?!　――アンタ知ってるだろ？俺がＩＳ嫌いだって」
ＩＳは、――アレは俺の周りの人達の人生を狂わせた。姉は一躍有名になったが、その分普通の人が得られるであろう〝幸せ〟が消えた。幼馴染の剣道少女は今も各地を転々としているらしい。他にも公園でリストラされた中年男性や、女尊男卑の風潮のせいで男から避けられ、泣く泣く婚期を逃した●十代の女性。男が店主と言うだけで値切られた八百屋のおっちゃん等々、多くの人から愚痴を聞いた。つーか子供に愚痴んな、いい歳した大人が。
『女尊男卑』。これが今の世の中だ。ソレを齎したのもＩＳだ。〝女はＩＳが使えるから偉い〟〝どんな理不尽な事を言ってもやっても、女性なら許される〟そんな風潮だ。弾達と遊んでた時も、行き成り〝これ買って？〟と言われた時は、思わず全員で言葉のフルボッコにしたのは良い思い出だ。
『ん～そこを曲げ欲しいな～って、束さん思ってるんだけど』
「無理です」
別に俺が居なくても、亮斗の奴が居るから良いじゃん。
『じゃあ仕方ないか。――くーちゃん！』

「了解です、束さま」
「へ?!――おわっ?!」
後ろから声がしたと思ったら、背後から押され――打鉄に触れてしまった。
キイィインと音がし、脳裏に様々な情報が流れ込み、最後に女性の幻影が見えたと思ったら俺の視界はいつもよりも高く、その身は打鉄を纏っていた。
だがそんな事よりも、先程俺の背中を押した人物を見る為に背後に振り返る。振り返った先、虚空に溶けて行くよう姿が消えゆく銀髪の少女を見つけるが、
「それでは失礼します」
「待――ッ!」
そう言い残し消えた。
俺の思考を読み取ったのか、ＩＳが自動的にハイパーセンサーの解析を掛ける。ドアが開けられた様子も、壁を突き破ったりしていないのでまだこの部屋に居る筈だ。
――だが、その予想に反し、ハイパーセンサーには何も引っ掛からなかった。
……無駄に技術力高けぇよあの兎!
「――はぁぁ、……オイ兎さん」
『何かな、狸の皮を被った狼さん?』
まだ繋がっていた束さんに話しかける。
最早この段階まで来てしまった以上逃げられないだろう。せめて、日常を再びブチ壊してくれやがった事や、これから先来るであろう苦労に対して、この兎に次ぎ会った時はタダじゃすまさない事を忠告しておく。
「今度会ったら、その豊満なお胸様を啼くまで揉みしだく。覚悟しろ」
『何言ってるのさ、いっくん。　束さんは何時でもおっけーだよ?』
「……ふぅ?」
『おっと流石に凡人共でもＩＳが起動した事ぐらいは気付くか～。それじゃあいっくん、またね!』

「え？あ、ちょ――！」
言いたい事を言い、即座に通話が切れた。
……あるぇぇぇぇ？選択肢間違えたか俺？！
そんな俺の内心の混乱を他所に、無情にもホールの扉が開いてく。
「此処からも反応が！――こっちも男の子！？　しかもイケメンキターー！！」
「はぁ……もう、我慢しなくても良いよね、俺？」
今世で一番苦労しているのが、顔が良いからと言う理由で言い寄って来る女性だ。前世では顔が良い男を羨ましいと思っていたが、実際にイケメンになると苦労も多いのだと、心底理解出来た。

2時間後――

「さて一夏、用意は良いか？」
「……積んだな、俺」
アレから2時間が経ち、現在の場所はコロシアムの様な広い場所。観客席には白衣やスーツ姿の女性達。前者は自分の周りに空間モニターを展開し、後者は輝かんばかりの視線を此方に向けて来る――が、その視線の先は俺でなく、俺の目の前に居る打鉄装備の姉さん――いや、《ブリュンヒルデ》織斑千冬だ。一部、俺に侮蔑と憤りと羨望の視線を向けて来る女性も居るが、そんなのはここ数年の生活で慣れたので無視だ。
あの後は結構大変だった。検査に続く検査、更に追加で検査して、ＩＳの基本と動かし方を数分で教えられ、そして今現在、世界最強の名を持つ《ブリュンヒルデ》こと、私生活では駄姉の称号を持つ織斑千冬と、ＩＳ学園入学試験の模擬試験が始まる所だ。
最早ツッコミ所が分からん。ＩＳの知識は、束さんの手伝いをする過程で基本的な事は覚えたが、実際に動かすのは初めてだし。しかも相手が相手だ。
……つーか、何でド素人に最高峰のＩＳ操縦者が相手なんだよ？！
どっかの廃人ゲームだと、旅だった瞬間に勝負を仕掛けてくるトレー

ナーが伝説のチャンピオンみたいなもんだぞ?!しょっぱな難易度ルナティックでプレイする様なものだぞ?!どう考えても無理ゲーだろ!!
「ルールは分かってるな?シールドエネルギーはお互い６００。得物はＩＳ用ブレードのみ。お前に合わせ、私も移動範囲は地上のみで空中機動は禁止にしておこう」
「……そりゃ有難いことで」
　多分、今の難易度はハードくらいだ。せめてセカンド、もしくはノーマルくらいに下げて欲しい。
「ああ、手加減はするし全力機動はしないぞ？　負けても、お前と亮斗はＩＳ学園に入学せざるを得ないだろうからな。だから――」
　そう言って、宣言通り片手一本、それも利き腕じゃない左手だ。その左手にＩＳ用刀型近接ブレードを構え、
「勝つ気で来い」
　一瞬にして３０メートルもの距離を縮めて来た。
「ッ!!!」
　ただの振り下ろしの斬撃に体が反応し、バックステップをしながら片刃剣で受け流す。
　だが、ＰＩＣによって浮遊している状態だった為、予想よりもさらに後方へと下がってしまった。
「く――ッ!!（――やっぱ知識と実際に動かすのとじゃ、全然違うな！）」
　慌ててブレーキを掛け、姿勢を正す。一瞬、ＰＩＣを切るかどうかを迷ったが、
「良く聞け一夏！」
　それよりも速く、姉さんが迫って来た。
「（ちょ、はやッッ!!）何さ姉さんッ！」
　二撃目が来た。　攻撃方法は先程と同じ、正面からの振り下ろしだ。
　動きを止めてしまった瞬間を狙われたので、必然的に受けるしか選択がないが、普通に受け様とは思わない。やる事は一つ、攻撃は諦め、

受け流し中心の防御を選択する。
ギャリッッ!!っと金属が擦れる音を立て、何とか二撃目を防ぐが、シールドエネルギーが２０程削られた。
これがもっと上の実力者――それこそ国家代表クラスであれば、回避と同時に攻撃くらい余裕で出来るだろう。
「私は、ＩＳに関する事は一切しゃべらなかったし、お前がＩＳに関わらない様止めていた」
姉さんの言葉に、声は出さずとも肯定する。姉さんは、疲れて帰って来ても、酒を飲んでいようとも、雑誌やＩＳ関係のドラマやドキュメントは見せなかったし、口にも一切出さなかった。
「だが、お前は自分から関わっていた……ッ！」
「……ああ、姉さんには、黙ってたけど、結構調べてたよ、俺」
しゃべってる間にも斬撃は続く。
姉さんが本気で来ているのなら、俺はしゃべれもせず即負け決定だっただろう。――つまり手加減されている。斬り上げが入ってないし、一撃一撃の間が空いているし、振る時も一秒程停止――つまり、何処から一撃を繰り出して来るのか教えてくれているのだ。
「私の苦労は、無駄だったな一夏!!」
斬撃のパターンが増えた。最初は振り下ろしのみだったのが、次第に袈裟切りと逆袈裟が加わり3パターンに。
「――そう、だな」
削られていくシールドエネルギー。既に４００を切った。
だが此方としてもただ単にやられているばかりでは無い。少しづつ、知識と実際に動かした感覚を繋ぎ、次第にＩＳの機動をモノにして行く。
次第に動きの良くなるが、比例するように一撃が強くなり、剣速も速くなっていく。
「お前の人生は、これから先もＩＳとは無縁の生活では居られなくなる！」
「元から、だよッ！」
多分、姉さんから束さんを紹介された時、束さんに出会った時から、

俺の人生は殆ど決まっていたのかもしれない。
「お前が、ＩＳを嫌ってるのは、知っている。だが――」
その先は言わせなかった。
振り下ろしの一撃に合わせ、一歩を踏み込み姉さんの刀をかち上げる。そしてついでと言わんばかりに、もう一歩踏み込み斬撃を放つ。
――が、流石は世界最強。紙一重で躱された。
そのまま数歩距離を空け、俺と姉さんが向かい合う。
「――姉さん、一撃勝負だ」
構えは顔の左側に、地面と水平に持つ刺突の構えだ。足は肩幅に開き、左足だけ一歩下げる。
シールドバリアーは既に１２０を切った。この一撃に全てを込めるので、恐らくは急所に入れられ、シールドエネルギー切れで俺の負けだろう。
……だが、例え負けると分かっていても、最後まで全力を尽くす!!
「……良いだろう」
俺の構えを見て、言葉少なく頷く姉さん。
構えるのは正眼の構え。基本中の基本の構えだが、姉さんが構える事で、極致に至っている錯覚を覚える。
「……」
一瞬の空白。お互いの視線が絡み合い、――動いた。
仕掛けに行ったのは俺だ。
「篠ノ之流奥義――!」
篠ノ之流とは、篠ノ之家に伝わる剣術だ。俺達織斑姉弟が習った篠ノ之流は、後の後を基本とした守りの剣だ、今で言うとカウンター型と言っても良い。自ら仕掛ける事はせず、降り掛かる火の粉だけを払う撃剣だ。
だが時代の流れと共に、先の先を打てる技も産み出された。それが、今俺が放つ技。
其の名を、
「桜花七式二の太刀《陽炎》!!」
技の種は刺突――と見せかけた、攻めのカウンター。敢えて相手の

懐に飛び込む事で攻撃を誘い、相手の攻撃を受け流し、カウンターで決める技だ。
知識では理解している瞬時加速を、拙いながらも用い一直線に攻める。
だが、
「――良い、一撃だ」
その一撃を見て、姉さんは微かに笑っていた。歓喜と哀愁を混ぜ合わせた様な、育ち飛び立って行く雛を見守る親の様なそんな顔をしていた。
「見せてやる、一夏。篠ノ之流の終点、カウンター型の極致を」
「勝負!!!」
交叉は一瞬で終わり、――――直後、勝敗が決したブザーが鳴り響いた

帰宅。俺の不幸はこれからだッ！

車窓から見える風景が、高速で後ろへと流れて行く。――別に怪しい組織に誘拐された訳じゃないぞ？

時刻は夕方６時。場所は、試験会場から帰る黒塗りの車の中だ。既にあの試験（と言う名の試練）から既に６時間は過ぎている。

「……まだ痛いな」

場所は脇腹だ。

あの試合は、当然と言うべきか俺の負けだ。敗因はシールドエネルギー切れ。対する姉さんの残量は４９８。開始直後はお互い６００だったので、実に１００程しか削れなかった。しかもその内の８割は、移動の際に消費した分だ。それも無駄な動きが多かったから余計に消費して、だ。

――世界の壁は、思っている以上に分厚かった。

最後の一撃、俺の攻撃はカウンター。姉さんの一撃が来ても、ソレを逸らし攻撃を与える技だった。

だがあの瞬間。俺の剣は弾かれたと同時、胴に一撃を喰らった。真正面から見事に叩き切られたのだ。

姉さんが取った方法は分かる。技名は篠ノ之流　終の太刀『現身』、その発生技『現身・胴』。俺の剣が姉さんの剣に接触した瞬間、俺が刺突から胴切りに移す直前、それこそコンマ数秒の差で俺の剣を弾き、そのまま払った勢いを利用した胴薙ぎの一閃だ。

ハッキリ言って、技量が違い過ぎる。

まず、剣閃のスピードがケタ違いに速い。それに加え、自分の剣速と間合い、相手の技、間合い、剣速を全て把握し、絶妙なタイミングで打たないと出来ない技だ。なにせ、一瞬でも遅れれば確実に激突コースだ。――俺では、まだそこまでの領域に達していない。

だが逆に言えば、まだまだ強くなる事が――、

「（ヤメヤメ、強くなってどうしろと）」

首を振って、考えを途中で放棄する。

確かに、今後は自分自身を守れる力が無いと危険だが、なにも頂点

を目指さなくても良いのだ。
「おう坊主。此処で良いのか？」
車がゆっくりと停車し、運転手のおっちゃんに声を掛けられた。
外を見れば、すでに家の前まで来ていたようだった。
「ええ、有難うございます」
「気にするな。これが俺の仕事さ。――ほれ、降りな。こんな遅くまで試験をやってたんだろ？今日ぐらいは豪勢なメシでも食って、風呂に入って疲れを落とすと良いぜ？――だからよ、明日からも頑張れよ、坊主」
……ヤベェ、カッコイイ!!
ニッと笑うおっちゃんに、今日だけでかなりすり減った俺の心が猛スピードで癒された。
「応！明日は良い事があると信じて男は進むだけですよね！」
「ハハッ！良い言葉だ!!」
車から降り、扉越しに向き合う。
「お疲れッしたぁ!!」
「坊主も気ぃつけろよ！」
走り出す車を見送る。
「……帰るか」
あのおっちゃんは〝豪勢なメシ〟と言っていたが、生憎と本日の夕食は簡素なモノになるだろう。　何故かと言うと、本来なら、試験帰りに気分転換も兼ねて買い出しに行こうかと思っていたのだ。まあ残りモノでもそれなりに良い物は作れるのだが――今日は疲れた。
姉さんも、俺と亮斗の件でＩＳ委員会に赴く事になっており、２日間は帰れないと言ってた。
「（明日は買い物だな。食材の他にカップ系でも溜め買いしとくか。あと、寮生活になるから下着類も少し買って……調理器具とかはどうなんだ？食堂はあるみたいだけど、各部屋に備え付けのキッチンはあるのか？）――今度、姉さんに聞いとくか」
そう考えながら玄関を開け――、
「お帰りなさい、アナタ！」

――次の瞬間、速攻で閉めた。
ついでに鍵も掛けたが、よくよく考えれば中から開けられるのだと気付く。改めて家を見れば、先程まで暗かった我が家に明かりがついていた。　一度深呼吸して脳を無理矢理に正気に戻し、先程玄関に立っていた女性の事を考える。
……アレ、どう見たって、
「ウサミミメイド、だよなぁ？　しかもエロ目的のスカートの丈が短いタイプ。……中身がまともならエロくて最高なのに」
再びドアを開ける。
「お帰りなさいませ、旦那様」
ドアを開ければ、先ほどとは違った人物が立っていた。
銀髪のセミロングを三つ編みにした、黒眼と金の瞳が特徴の少女。背は１５０程で、着ている衣装は紺色のロングスカートのワンピースに、白いエプロンを掛け、頭にはカチューシャを付けている……ぶっちゃけメイド服だ。こっちはエロ目的じゃない方だ。
「――ただいま。あと旦那様言うな、クロエ」
少女の名前は『クロエ・クロニクル』。聞いた限りだと、なんと試験管ベビー、つまりは人工子宮育ちの遺伝子操作で生まれたんだとか。一体何処の種Ｇだよ、と最初は思ったね。
今から3年程前に行方を暗ました束さんが、なんか色々あった末に拾って育てている子である。あと、胸は服の上からでも自己主張しているサイズ。
ついでに言うと、俺を打鉄に接触させた張本人である。
「お疲れ様です、旦那様。お食事の用意は出来ております。束さまも心待ちにしております、どうぞ居間へ」
「ああ、分かっ……なん、だと……っ」
更に言うと、暗黒料理（ダークマター）の作り手である。以前、指導した事があるが、それでも暗黒料理（ダークマター）の発生率は未だに9割以上だ。
「がんばりました」
「ああ……、頑張っちゃったのか」
じゃあ今日が俺の命日かな。

「先、着替えて良いかな？」
無論、死に装束に。
「どうぞ。束さまも、現在居間でお召変えをしている最中ですので」
「なにっ!?　い、いや落ちつけ俺っ、コレは諸葛亮ならぬ諸葛束の罠だ！油断と隙とエロを見せたら喰われるぞ！人生と物理的（性）になッ!!」
理性を振り絞り自室に戻る。
まずは制服を脱ぎハンガーに掛け、数秒悩み、衣類棚から少しだけオシャレに気をつかった私服に着替え、机から食前用胃薬を取り一粒飲む。ついでに食後用も何時でも飲めるように準備。部屋から出て、階段を降り、居間の扉の前に立つ。
――さあ、戦いの時間だ。
「お待たせしました、束さん」
「やっと来たね、いっくん」
窓際のテーブルの上には、見た目は普通な料理が並んでいる。内容は親子丼に卵入り味噌汁、納豆、漬物、……それに卵焼き、オムレツ、目玉焼き。ほとんど俺が教えた物が大半だ。
つーか、
「朝食かよっ!?あと卵何個使った!?」
「それよりいっくん、束さんを見てナニか言う事はないのかな～？」
その言葉に食卓の上の事を一旦忘れ、対面の席に座る束さんを見る。
「……綺麗ですよ」
「やった♪」
嬉しそうに顔が綻んだ。言っておくがコレはマジだ――服装だけ見れば。
着ているモノは先ほどのメイド服とは違い、薄いピンク色のフリルの花をあしらった、胸元を大胆にV字カットした白のワンピースドレスだ。それ以外にも普段頭の上に付けているウサミミを取って髪は三つ編みにし、軽く化粧を施したのか元々整った顔立ちは更に美しく、胸元から覗く谷間や、自分の興味のある人にしか見せない笑顔が合わさり――ハッキリ言おう、物凄くときめきました。

束さんの後ろに銀髪メイドが居るのも含めれば、本当に何処かの令嬢と従者の構図だ。――食卓の上に並んでるのと合わせると、異和感がもの凄いが。
一言で例えるなら、『一般家庭の朝食の場にドレス姿の美女とメイドがいる光景』である。めっちゃシュールだ。
「じゃぁ食べよ！今日はくーちゃんが自信のあるモノだからおいしいよ！」
そりゃあ、調理器具全て買い変えする程酷使して特訓した料理だからな。むしろ酷くなってたら泣く。俺が。
「そう言えば、クロエの分はないのか？」
窓際テーブルの上に乗っているのは二人分しかない。元々食卓用のテーブルじゃないから仕様が無いのだが。
「……束さま」
「ん～、まあいっか。くーちゃんも一緒に食べよ」
「わ、わかりましたっ」
何故かひどく緊張した様子で椅子を持って来て座るクロエ。……なんだろ、今すぐ離脱しろと第六感が警戒してる。今すぐ逃げないとなんかヤバいって。けど電話越しだと、はぐらかされるかすぐに切られるから、こんな機会じゃないと束さんと話し合う機会なんて無いし……ええ、男は度胸！いざとなったら姉さん直伝の『対束さん鎮圧用アイアンクロー』だ！握力７４ｋｇは伊達じゃない事を見せてやる！
「じゃあ頂きま～す☆」
「い、頂きます」
でも今は目の前のゴハンに集中しよう。トラップってのは、目に見えない所に潜んでるからな！

～～少年少女＋美女、食事中～～

「「ご馳走様」」
美味かった。ただその一言に尽きた。外れは無かったし、きちんと味付けも出来てた。焦げに異臭、食感が悪かったり、食べた直後に味

が変わるなんて事もなく食べ終わった。
……成長したなぁー。
そう思わずにはいられなかった。弟子の成長を喜ぶ心境とは、こんな感じなのかもしれない。
「――で、本日はどんな用事ですか？ただ純粋に祝いに来たなんて事ないでしょ？束さん。――今回は祝って貰ったって喜べないし、嬉しくない」
「悲しいな～って、はいはい言うからそう怖い顔しないでよ、いっくん。――くーちゃん、片付けお願い出来る？」
「はい」
何時もなら俺も一緒に片づけを手伝っている所だが、今回ばかりはクロエが食器を流しに運ぶのを尻目に、俺はずっと束さんから目を離さなかった。
「さて、まずはおめでとう、って言っておくよ。いっくんも……りょっちゃんも、ＩＳ学園に入学する事は確定してるよ」
この人、また亮斗の名前忘れやがったな。
「もし何らかのちゃちゃが入っても、私が脅すし」
「（怖ぇっつーの）それで？なんで俺……をＩＳに関わらせようとしたんですか？」
亮斗を含めなかったのは、アイツは関わる気があったからだ。
「俺がＩＳを嫌ってる事は知ってるでしょう？それに、姉さんも俺をＩＳには関わらせようとさせなかった」
「ちーちゃんには申し訳ないと思ってるけど……箒ちゃんがＩＳ学園に入る事になったんだよ。だからいっくんと、りょ……りょっちゃんを再会させてあげようと思った、ってのが理由の一つかな」
本名『篠ノ之箒』。篠ノ之家の次女であり、束さんの妹。そして俺と亮斗の同年で幼馴染だ。箒が関わってるなら、シスコンであるこの人がこういう行動を起こしたのも頷ける。
だが……、
「ウチはＩＳ学園から近いでしょうが。休みになれば向こうから会い

に来るでしょう？あと、亮斗の名前を忘れるなら、アイツとかヤツ呼ばわりで良いですよ？」
　姉さんだって、朝早くから出て、忙しくない時は大体７時くらいには帰って来るのだ。幾ら規則とかが厳しくたって、休みの日ならば日中に会って数時間くらい過す時間位取れる筈だ。
「本当に、箒ちゃんが素直に会いに来ると思う？」
　……微妙だなぁ。
　今のアイツがどう成長したか知らないけど、俺の中の〝篠ノ之箒〟は人見知りで意固地で、亮斗の前じゃ素直じゃなかった。……何かと理由付けて避けてそうだなオイ!?
「ほ、他の理由はッ?!」
「他ね～……大まかに分ければ２つかな？――いっくん、自分からＩＳに関わってるよね？いっくんが前にプログラマーの仕事を受けてた時、依頼先がＩＳ関連の企業だったし。後、デュノア社と倉持技研の武装開発部門に幾つか設計図を売ってたよね？」
　やっぱりバレてた、と言うのが正直な感想だった。と言うより、束さんのハッキングレベルだと簡単に調べが付くだろう。
　――だが甘い。
「プログラマーの仕事は中学上がるのを機に手を引いた。設計図を売ったのも、ソレが一番儲かりそうだったからだ。――幾ら学費の安い藍越とは言え、高校は金が掛かるし」
　まだ小学生だったからバイト出来ないし、家事とかもしなくちゃならなかった頃の話しだ。その頃に、束さんから教わったプログラミング能力を活かし、ＩＳ企業からの仕事をネット経由でやり取りし、こっそりと請け負って金を稼いでいたのだ。
　ついでに言うと、杭打ち機って浪漫だよね？
「つーか、同類のアンタが分からない訳じゃないでしょ？」
「まあね、デュノアが先に凸突き系の武装を作ったのは評価して上げても良いね。――じゃあ更に聞くけど」
　まだ何かあるのか？
「――いっくんのＰＣの中に入ってる、幾つモノ設計図はなんなのさ

？」
「っ!!　待て、何で知ってる?!」
「結構自作のハッキング対策はしてあるみたいだけど、――あれ、ＣＰＵにＩＳコアの試作型使ってたでしょ」
　確かに、束さんがＩＳコアを作る過程で生まれた、既存のＣＰＵよりも高性能の試作ＩＳコア（自己学習・自己進化・形状変化・量子変換機能なし）を用いて自作のＰＣを作ったけど。……アレ、何度も調べてバックドアの存在が無い事を確認したし、コアネットワークにも繋がって無かった筈なんだけど？
「ふふん、私を誰だと思ってるのさ？」
　そう言って豊満な胸を張り、
「前にいっくんの性癖調べようと思って、直にコア繋げてハッキングしたのさ！」
「その可能性は考えてなかったッッ!!」
　だが残念だったな！その手の類は、全て脳内保管してあるのだよ!!
「確かにそっち係は調べられなかったけど、面白いデータは一杯見られたね。　例えば、私も考えてる展開装甲を模した武装とか。――中々面白い事考えるよね～いっくんも。『ガトリング砲を仕込んだ大剣型大バサミ』とか『遠距離はレーザー、中距離は実弾、近距離では実体剣』、『スラスターとして使いながらも近距離ではレーザーブレード』なんてモノもあったよね？　完成予想図と概要だけで、中身は全然出来てなかったみたいだけど」
　俺の黒歴史ぃぃぃぃぃぃ!!!
「ちッッ、違うっスよ？ええっと、そう絵、アレはただの絵ですよ！　イラスト書くの上手くなったから、ただ何となく書きたくなっただけの絵です！」
　黒歴史を知られた羞恥心からか、火照った体を冷まそうと水を一気に飲む。
　……うん、少しは頭が冴えた……気がする。
「うんうん、やっぱりいっくんも男の子だね～、自作のロボットとか考

えたくなるよね～」
「アハハハハっ、思春期真っ盛りですからっ！」
「そうだね～……あ、いっくん。自分好みのＩＳとか作ってみたくない？」
「ハイ、ツクリタイデス。ノデ、ＩＳガクエンニイキマス」
「良かった～。束さんもいっくんが考えた武装とか、もっと一杯見てみたいな！」
「あはははっ、何時か見せますよ」
くそぅ、ぜったい泣かす――いつかな！
「で、もう用事は無いですよね？　ならお帰りはあちらです」
指差す方は当然玄関だ。もう三つ目を聞く気力が無いので、とっとと帰って貰う事にした。
……ホンッッッットに風呂入って寝たい。
もしくはアルコール品を呑んで酔い潰れたい。でもアルコール品は姉さんの私物なので、必然的にさっさと寝る事を選択する。
「ねえ、いっくん」
不意に束さんが言葉を発した。
「『織斑一夏』は今の世界に満足してる？」
察するに、コレが三つ目の理由なのだろう。
……満足してる、か。どう満足なのかが良く分からんが、今言えるとしたら――、
「『満足してた』、ですかね。アンタが俺の日常をブチ壊さなきゃ、ずっと満足な日々を過ごせましたよ」
「そっかぁ～」
そう言って、後悔と満足が合わさった表情（かお）を見せる。その顔を見て、ふと考える事があった。
……そもそも、この人は今、『何』を目指しているんだ、と。
ＩＳを作ったのは宇宙を目指したいから、と言う理由だった。
３年前以降、行方不明になってから起こす騒ぎも、ＩＳを本来の『船外活動用のマルチフォーム・スーツ』として見て貰おうとした行動だと思っていた。

だが、クロエを連れて来てからの束さんの行動は何処か違っていた。ウチに来る頻度は減ったし、何処かの国で騒ぎを起こしたと言う話も聞かなくなった。クロエに聞いても、普段は姉さんや俺、それに箒の事を盗撮してたり、何かしらの研究をしているだけなのだと言う。

偶に来ても、愚痴る事も無くなり、姉さんと二人で話す事が多くなった。――何よりも、仮面の笑顔が増えた事だ。束さんが本当に笑った顔を見たのは、先程の夕食前に見たのが、随分と久しぶりな気がする。

「束さん、一つ聞いて良い――」

言っている途中で遮られた――口で。

「（柔らかい――　じゃなくてッ!!）」

「んっ」

「んんっ?!（舌！舌ぁ!!舌がニュルっとーー!?!?）」

その後1分ほどだろうか。たっぷりと俺の口内を舐めまわしたあと唇を離し、

「――はぁ、……ねえいっくん。賭け、しよっか」

唐突にそう言って話しを切り出した。

「え、あ？　か、賭け？」

あの超論理主義の束さんが、不確定要素の多い賭事？

「賭けの内容は『いっくんが今の世界を壊す為に動く』かどうか」

む、無茶苦茶物騒な内容だなオイ！

「今、いっくんは危うい天秤の上に乗ってるの。――解るよね？」

解る。なんせ世界で二人しかいない男性のＩＳ操縦者で、それに姉はＩＳに乗れば世界中でも5本指に入る単体戦力を持ち、その友人で、今俺に抱きついている人は世界最高の頭脳の持ち主だ。　当然、俺を手に入れようと世界各国が動く。

「期限は一年。いっくんが現状維持――つまり自分の人生を他者に預け、鎖で繋がれる事を選択したら私の負け。その場合、私は二度と干渉しない事を誓ってあげる。――当然、私は当然『壊す』に賭けるよ」

「最悪で最上級のプロポーズだな、オイ」

負けても首を鎖で繋がれて、勝っても首輪で繋がれるのか。
「話しは以上だね。――ああ、あと少し早いけど卒業祝いをいっくんにあげるよ！」
「は？どういう――」
急に体に力が入らなくなった。腕にも足にも力が入らず、頭は熱に魘されるかのようにボーっとし、――言いたくないが、俺の一部分が臨戦態勢になっている。
……コレは、まさか……ッ！
「んふふ、よーやく効いてきたね」
「盛り、やがったな……っ」
道理でメシ食った後から異様に体が熱くなる筈だよ！
「い、嫌な予感しかしないが一応聞こう、――プレゼントの内容は!?」
「イヤン♡　女の人に言わせるなんて、いっくんって意外とサド？でも言うよ！プレゼントはワ・タ・シ♡　あとくーちゃん」
「い、いちかさん……っ」
クロエが台所からふらふらと千鳥足で此方にやって来る。その顔は赤く、何かを求める様な物欲しげな表情をしていた。
……そう言えば、クロエも一緒に食ってたっけ。あの時、束さんがやけに強調していった『一緒に食べよ』って俺の事かよ?!
「さあ、いっくん。覚悟は出来たかな？ちなみに私は出来てるよ！……くーちゃんも良いみたいだし」
「お、俺が今後、どんな道を進むかなんて、俺にもわかりませんよ？それでも――」
再び口を塞がれた。今度のは啄ばむ様な軽いヤツだ。
「――いっくんはいっくんの人生を好きに進めばいいと思う。私達を抱いたって、別にいっくんに『責任を取れ！』なんて言わないよ……くーちゃんは貰って欲しいけど。でもいっくんに強制はしない。寧ろ、今やってる事はいっくんに嫌われる様な事だと思ってる」
「なら……」
「でも止めない。今此処で止めたら、私が永遠に後悔する事になるから。だから、いっくんは気にしなくて良いの。――だから」

言いながらも顔近づけ、
「今だけは私を愛して」
俺が何かを言う前に、三度目のキスを落とした。
それに対し、俺が取った行動は――――――

おふぅ

入学。視線って重圧になると知った日

――4月7日

「「「(じーーーっ)」」」

「「……」」

圧倒的戦力差、と言うのはまさにこういう事を指すのだと、実体験して初めて分かった入学式の今日。場所はＩＳ学園1年1組。クラス比は実に2対２８。女が２８で、男が2だ。

その女性陣が見る場所は2ヵ所。

一つは教室の真ん中の座席で伏し、視界から強制的に周りの風景をシャットアウトした〝世界初の男性ＩＳ操縦者〟の称号を手にした木場亮斗。

もう一つは、教壇の正面の席に座る、〝世界で二番目の男性ＩＳ操縦者〟の称号を（不本意ながら）手にした、俺こと織斑一夏だ。

「「「「「(じーーーーーっ)」」」」」

「(さっきより増えたな)」

入学式はとっくに済ませ、現在は一時限目、担任の先生を待つ時間だ。

俺と亮斗は、朝の人の視線が少ない時間帯に学園に登校した。その方が人に絡まらなくて良いと思ったからだ。――が、どうやらヒトの好奇心とは抑えられないモノの様で、好奇心旺盛な女子生徒（中には教師も入ってたが）は俺達のクラスを調べると、教室に入らずとも廊下でひきりなしに――それこそ珍種を一目だけでも見ようとする客の様に――じろじろと見て、挙句の果てには写真を取る者もいた。

それ〝だけ〟ならばまだ良い方だ。中には雑誌社に売ろうとしたり、勝手に写真集とか作ろうとしたり、どっちが受けだ攻めだとか考えるのだ。

――マジ止めて欲しい、特に最後の。

まあ今はもう授業時間内のなので、廊下には誰も居ない。今はクラスの女子の視線だけだ……それでもウザいレベルだが。

ちなみに、教室に入り早1分で亮斗は机に伏した。

「皆さん、ご入学おめでとうございます」
教室のドアが開き、一人の女性が入って来る。
背丈は１５０後半程で、緑色のショートボブヘアーの女性だ。教師と言う事は、少なくとも二十歳は越えている筈なのだが、低い身長に童顔で、私服に眼鏡を掛けた姿は中学生、もしくは高校生と見間違えそうな程だ。　ただある一点だけ、
「(デカイ)」
其処は見事に育ったようである……御胸様が、だ。おっと！身長の事を述べたので隠しようが無かったぜ！
その女性が教壇に立つと、その横に空間ディスプレイを開き名前を表示する。
「私はこれから3年間、皆さんの副担任を務めさせていただきます。山田（やまだ）　真耶（まや）です」
「「「「(じーーーーっ)」」」」」
意気揚々と自己紹介する可愛い系女教師の山田先生だが、聞き手側である生徒達はそんなの知った事かと言わんばかりに、視線は俺と亮斗に向いたままだった。
「(……威厳無いけど教師なんだから、少しは視線を向けてやれよ)」
そんな事を考える俺自身、視線は教壇では無く、一週間ほど前に学園から届けられた、手元の分厚い教科書『ＩＳの基礎理論』を読んでいるが。
昔、束さんの手伝いで知っていたので流し読みしていたが、後半になるにつれて此処十年程で新たに判明した能力なんかも載っているので、非常にタメになる。
「え、ええっと、今日から皆さんは、このＩＳ学園の生徒です。この学園は全寮制で、放課後も一緒に過す事になりますので、仲良く助け合い、楽しい3年間にしましょう！」
「「「「「「「じーーーーっ」」」」」」」
「すぅ……、すぅ……」
「うう……っ」
「(哀れな)」

必死なのは分かるけど、それでもクラスメイト達の関心は俺たちに集中してるようだった。……うん。山田先生は頑張ってるよ？でもまずは、全員の視線を自分に向けさせないと、俺も手元から顔を上げられないんだ、だから泣かないで!?　あと亮斗、テメェ寝てんじゃねえよ!!

「じゃ、じゃあ自己しましょうッ！出席番号順に、まずは「あ」行の相川さんから！」

「え？……あ、はい、えーっと相川清香です。出身は――」

これぱかりは無視する訳にもいかず、呼ばれた生徒は順々に自己紹介してく。これには功を奏したのか、全員の視線が俺達から視線が逸れた。あと山田先生が涙目から戻った。

――が、実は問題の先送りだった事を俺は気付いている。

「はい有難うございます！……じゃ、じゃあ次ぎはお、織斑君。お願いします」

「……はい」

流石にコレばかりは無視する訳にはいかず、教科書を閉じ立つのと同時、先程以上のプレッシャーが圧し掛かった。

「（うおう視線が凄い。マジ穴が空きそう）織斑一夏です。何故かＩＳを動かせる二人目の男性操縦者です」

無難な挨拶と言うのなら此処で終わりにすれば良いのだが、周りからは、無言だが『もっと！』と催促が来ている。

……良いだろう、俺の体を張ったボケを活目するが良い!!

「好きな事は体を動かす事、ボケる事、パソコンの前に陣取る事。嫌いなのは人の話しを聞かないとある女性。趣味はネットサーフィン、読書、料理。男友達は多い方で、彼女は今の所なし。ちなみに童ｔぃたぁッッ?!」

「あがぁーーッ!?!?」

最後まで言う前に、側頭部からの鋭い衝撃が来た。ついでに後ろ側から亮斗の叫びも聴こえた。

「そこまでにしておけ盛年（せいねん）。それと起きろ木場亮斗、授業中だ」

叩いた人物は、この学園の教師にして、俺の姉『織斑千冬』だった。

……そう言えば、さっき山田先生は副担任って言ってたな。と言う事は、もしかして姉さんが担任って事か？
「「「「「「「「「「きゃあ～～～～～!!!」」」」」」」」」」
「うおっ!?!?」
四方八方から音響兵器が発生した。マジ耳が痛てェ!!
「本物のブリュンヒルデ！生千冬様だわ!!」
「生きてて良かった!!」
「私、此処に来るために沖縄から泳ぎと徒歩で来ました！」
最後スゲーな、アスリート目指せんじゃね？
「はぁ～、全く。毎年毎年、私の受け持つ奴等は信者ばかりか」
そりゃあご愁傷様です。けどまあ、『モンドグロッソ』を見てＩＳに憧れた子達ばかりだから仕方ないんじゃね？ある意味生きた伝説だし。女性としてもスタイル良いし、美人だからモテるしな。――家だと、社会に疲れきったＯＬみたいだけど。
「あだぁぁぁッッ?!」
乾いた音が俺の側頭部から出た。
「い、イテェぜ姉さんッ！今にも脳が二つに分かれそうだッ!!」
「馬鹿な事を考えるなよ、愚弟？　あと、脳は元々二つに分かれているし、側頭部だから割れる訳が無い。それと、学園内では『織斑先生』だ」
「流石だね☆ちーちゃンガッッ!!」
今度は木場が束さんの真似をして叩かれた。
……バカめ！今束さんネタは藪蛇所か逆鱗だぞ？言うつもりは無いが。
「そのふざけたしゃべり方は余計イラつく。即刻止めろ――次は〝縦〟だ。分かったな？木場、織斑……？」
マジで殺す気の目だ!!
「Ｙｅｓ，ｍａ，ａｍ！織斑先生!!」
俺と亮斗がハモって答えた。しかも、立ち上がり敬礼もしている。
（――完璧だな俺達！）
（――当然だろ？義兄弟よ！）
アイコンタクトもバッチリだ。

「「「「「「「「「「…………」」」」」」」」」」
クラスメイト達からは、唖然とした表情で見られていた。
……むう、まだ俺達のノリには乗って来れないか。
「……まあ良いだろう。座れ」
「「ハッ！有難うございます!!」」
危ねぇ危ねぇ。縦はマジ危ねぇって。
「すまなかったな山田先生、ＳＨＲを押しつけてしまって」
「い、いえ！私だって教師なんです、これくらい出来ませんと！」
半分以上出来てないがな。現に自己紹介も俺で止まってるし。
「織斑先生こそ、お疲れさまでした！」
「ああ、此処からは私が引き継ごう」
「はい！」
む！山田先生から、何処となく百合臭が漂うぞ？……やっぱアレか？敷居の高い女子高特有の姉妹関係でも目指してんのか？お勧めはしないが、姉さんが幸せなら俺は反対しないけどな。
「さて、入学おめでとう諸君。私がこの一組の担任、織斑千冬だ。私の仕事は、諸君等新人（ルーキー）を1年で使い物にする事だ。私の言う事は良く聞き理解しろ、出来なくとも出来るまでやってもらう。分かったら返事をしろ、分からなくとも私の言葉には返事をしろ。良いな」
「「「「「「「「「「はい!!」」」」」」」」」」
鬼教官の言葉にも、元気良く返事をするクラスメイト達。
その言葉に、満足げに頷く姉――いや、織斑先生。だから殺気を放つのを止めて下さい。
「今日だけは1、2時限をＨＲとして使って学園の規則や行事、その他色々な事を教える。３時限目から普通の授業を行っていくから、全員、進んで自薦しろ」
ああ、そう言う所は普通の学校と変わりないんだな。でもまあ入学初日から授業をするのは、やはりというか特殊な学校なだけある。

◆

――時は進み、１時限目終了
やはり特殊な学校なだけあった、と言っておこう。部活動とかは〝割りと〟普通なのだが、決まり事やら、制約などがかなりあった。
「流石はＩＳ学園、と言えば良いんだろうな」
亮斗が俺の席までやってきて駄弁る。
まあその意見には同意しよう。何だ校則が５５項目もあるって。しかもその中に国連がどうの、各国の政府がどうのって……校則に国の事情が入って来るとかマジパネェ。
「ちょっと宜しくて？」
「「ん？」」
声を掛けられた方向、左側に立っていたのは金髪で、先の部分だけ緩めの内巻きヘアーの女子生徒だった。
ついでに、此方に声を掛けようと席から立ち上がった幼馴染の少女が居たが敢えてスルーだ。
……相変わらずタイミングの合わん娘だ。
「それで、俺？それとも俺達？に何か用か？ええっと――」
「まあっ！私の名を知らないと？このイギリス代表候補のセシリア・オルコットに声を掛けられたのですから、光栄に思いなさいな！」
コイツ、女尊男卑の間違った思想のバカ女か。
即座に亮斗とアイコンタクトスタート。
（――どうする？叩く？ボッコ？この一言だけでツッコミ所が一杯あるんだが）
（――久しぶりにヤルか）
一致団結だったようだ。
「いや、君の名前聞いた事ないし。１時限目の自己紹介、俺の番で終わったじゃん」
「その歳でボケか……大変だな」
先制で俺が入れ、亮斗が続く。
「な――ッ！」
驚き、言葉が詰まるのを尻目に、今度は亮斗から口を開く。
「そもそも元々ＩＳに関わってない男なんだから、代表候補まで把握

してる訳無いじゃん」
「少し考えれば分かりそうだけどな」
「そ、それは――」
　まだまだ俺達のターンだ！
「確かに代表候補の人ってＣＭとか映画出演とかモデルもするらしいけど、アンタの事見た事ないんだけど？出た事あるのか？それも全世界規模のな、国内しか放送してないなら知らないの当たり前だし」
「あ、あの……」
「ついでに国家代表でもないのに、代表候補程度で偉そうにしない方が良いよ？――器の程が知れるから」
「うっ……！」
「あとマナーが成ってないな。知っている前程だとしても、初対面同士なんだから、まずは普通に挨拶だろう。常識だぞ？」
「はい……」
「あと髪の巻きが足りない。もっと巻けよ」
「そ、そうでしょうか……？」
「長手袋も無いな」
「長袖では目立たないと思うのですが？」
「目にしいたけ模様入れろよ」
「そ、それは――って最後のは個人の自由でしょう!!」
　チッ、掛ける言葉を間違えたか。
「それで、……セシーナ・ウォルコットンさん？」
「セシリア・オルコットです！何でのすの、その化粧品会社が出した化粧道具みたいな名前はッ!?」
　おお、コイツ、ツッコミレベルが意外と高い！
「ならセシリーはどうよ？」
「……良いニックネームですけど、その名前、私には荷が重すぎる気がします」
　今度は亮斗が進めるが、やんわりと断られた。まあいい判断だと言わせてもらう。
「じゃあ～セッシーはどぉ～？」

すぐ近くから、一人の女子生徒が間延びした口調で混ざって来た。
制服の袖を長めに改造した、あずき色のセミロングをツーサイドアップヘアーにした少女だ。印象としては〝ゆるい（漢字ではなく平仮名で）〟だ。俺が見ているのに気付いたその子は、にへらぁ、と笑顔を見せた。
……何この子、物凄くマイナスイオンが溢れてるんですけど？
「私、『布仏（のほとけ）本音（ほんね）』ね～。よろしく、おりむー」
「お、おりむー……？　いや、まあ呼び易いようで呼んでくれて良いけどさ……のほほんさんで良いか？」
俺も束さんの事は言えないな。名前よりニックネームの方が長いってどうよ？
「お～！　おりむーは意外とネーミングセンスがあるね～」
「のほほんさんも、解り易いニックネームを付けるの上手いよな」
「じゃあ俺なんかどう？あ、俺は木場亮斗な」
のほほんさんとの話し中に、亮斗の奴が混じって来た。オルコットはガン無視か、スルーして対応するようだ。――まあ気持ちは分かる。
「ん～、じゃあ〝りょっちゃん〟」
「「「ぶッッ!!」」」
二人――いや、箒も含め三人で噴き出した。
りょっちゃん！りょっちゃんだとよ!!束さんと同じネーミングセンスかよッ！
「良かったな、りょっちゃん！」
「良くねえよ！」
亮斗が憤慨する。
「――ふ――」
「「「ん？」」」
声の漏れた方を見ると、肩を震わしたオルコットの姿。
――あ、すっかり忘れてたな。と言うかコレは来るか？耳塞いどくか。
「――ふざけないで頂きたいですわッ!!」

予想通り爆発した。
「何なんですの!? 先程から私を無視しておいて、我慢がなりませんわッ!! あの《ブリュンヒルデ》様の弟であり、朝から教書を読む勤勉で、其処らにいる卑しい男性よりもマシな方だと思っていましたのに!――なんて最低な屑ですの!」
あ〝? コイツ、自分から非常識な声のかけ方をしたのもう忘れてんのか?それに変な理想押しつけんな。あと、『最低の屑』は別の人物だ。俺は催眠携帯なんか持ってねえよ。
「(おい、一夏)」
罵詈雑言を言いまくってるオルコットを他所に、亮斗が小声で話しかけて来る。
「(なんだ亮斗。俺、結構頭にキてんだけど?)」
「(抑えろ一夏。時間見ろ)」
時間?――あ。
「おい、オルコット。戻れ」
「戻れ!?この私に、イギリス代表候補であり、第三世代機である《ブルー・ティアーズ》を持つこのセシリア・オルコットに、男如きと机を並べ勉学に励むのが嫌なら母国へ帰れと言うのですかッ?!」
いや其処まで言ってねえし!――って来たぁ!
その人物が教室に足を踏み入れるのを見たクラスメイトは、一斉に自席へと戻る。――1人の女子生徒を除き。
「おい」
「今度は何ですの?!私はこれか、ら……」
オルコットの声が、段々と萎んで行く。それはそうだろう。なにせ、不機嫌そうに振り返った先に居たのは、出席簿(エモノ)を持って、自らの肩を軽く叩いていたねe――織斑先生なのだから。
「お、織斑先生……えっと、何かご用でしょうか?」
「用か、ああ確かにあるな。――オルコット」
「は、はいッ!」
たった一声掛けられただけで、オルコットが背筋を正し、――顔をほんの少し赤らめて織斑先生を見る。

……いやいや、何で顔赤らめてんだよ!?
「休みの時間をどう過ごすかは個人の自由だ。――だがな、大声を上げて騒ぐとなると話しは別だ」
「うっ……!」
おお、オルコットがへコんだ。
「それと、お前はイギリスの代表候補だったな?お前の態度や生活、他者とのコミュニケーション能力は少なからず自国の風評へと響く。よく覚えておけ」
「で、ですが名を弄られた上に、あまつさえ話しの最中に他の方との話に夢中になられたのですよ!?」
さっさと本題に入らないのが悪いんじゃね? でもまあ、無視したのは悪いとは思ってる。予想以上に、のほほんさんとの会話が弾んじゃったからなぁ。
でもオルコット。ウチの姉さんはちょっと非常識だぞ?
「――だからどうした?」
「なッ!?」
「無視された? 男の視線ぐらい振り向かせろ。名を弄られた? そんなの芸人のコントかパフォーマンスの一種ぐらいに思え、むしろ普通の自己紹介くらいじゃ印象に残らん」
そら来た。 理不尽な発言だとは思うが、姉さんの人生、出会った人達はかなり濃い人格が多いのだ。
だからこそ、こう言う発言も説得力がある。
「あ、う……」
そして大概の人が、今のオルコットの様に口をパクパクさせて唖然とする。
「話しは以上か?――なら、私の手間を取らせた罰だ……初犯だから軽めにしておいてやる。よく覚えておけ」
直後、軽快な音が響き、同時に二時限目のチャイムが鳴った。

決闘は避けられない

――4月7日・二時限目

「――さて諸君。一時限目と並行して、この時間も特別ＨＲだ」

教壇でそう宣言する織斑先生。その言葉を、約一名を除き全員が静かに聞く。その約一名――オルコットは、随分手加減された一撃だけでフラフラと自席に戻って行った。

内心、あの程度でフラつくとは情けない、と思っていたのだが、それ以上の打撃を喰らって『クラクラする』で済んでいる自分の事を思って、軽く鬱になった。

――慣れ、そう慣れだよなっ!!人間慣れる生きモノ！

そう納得し、織斑先生の話しを聞く。

「それではまず最初に、クラス代表を決めて貰う。クラス代表とは、言葉通りクラスの代表、――まあつまりは委員長的な存在の事だ。学生会議や来月行われる『クラス対抗トーナメント』、それ以外にも色々な行事で引っ張りだこになる役職だ。しっかりとこなせば、内申での教師側からの評価は高いぞ？ちなみに定員は一名。――誰か、やりたいヤツはいないか？」

いやいやいや、その説明で自薦するヤツは中々いないと思うぞ？

「はい！織斑君を推薦します！」

やっぱり来たなッ！

「私も織斑君が良いと思います！」

「そうよねー、なんたって織斑先生の弟さんだもの！」

「ええ――きっとトーナメント戦で優勝して、私達にフリー(栄)パス(光)券を持って来てくれるわ！」

「「「「「賛成!!」」」」」

欲望に忠実だなオマエら！　あと姉さんと比べるな！　姉さん、戦闘能力に関しては人外だから!!

「いいえ、此処は木場君を推薦するわ！」

良しッ！誰だか知らんがよく巻きこんでくれた！

「フフフっ、普段は爽やか王子様な美少年が、いざ戦いの場に出ると闘

志を漲らせ、獰猛な笑みを浮かべ敵へと果敢に向かっていく……
コレは売れるッ！」
「合作を希望するわ」
「あっ、クソッ！先に言われたッ」
「ふん……ジャンル違いね。私は『姉×弟』でいこうかしら」
「あら、アナタそっち系？私は今回、無難に『一×木』にするわ……いや『姉×（一＋木）』で行くべきかしら？」
「「「それ下さい！」」」
やっぱ何処にでも居るんだな、作家ってのは。つーか４人か、意外と多いな。常連も居るみたいだし、マジこの教室カオスだな。
「納得いきませんわッ!!」
そんな空気を断つように、机を思いっきり叩いた音と、叫ぶような声が同時に響いた。
場所は教室の後ろ。振り返らなくても誰だか分かる――セシリア・オルコットだ。どうやら立ち直ったようだ。
「クラスの代表を、物珍しいからと言ってやる気も実力も無い男性になど、――唯でさえ先程の件で頭にキているのに、このセシリア・オルコットを抜きにして納得できませんわ！」
じゃあ何で自薦しないんだよ。アイツ、もしかしてさっき自分で代表候補だって言ったら推薦されると思ってたのか？もしそうなら、ハッキリってバカだなアイツ。欲しいモノがあるなら、自分で動かないと手に入らないのに。――束さんとか、最もな例だな。
「大体、此処（IS学園）がこのような外れの島国などになければ、こんな辺境の地になど赴かなかったものを……っ」
「あっ、おいそれ以上は止め――」
「なんですの!?人の名前を間違えるお猿さんっ！」
おおぃ、空気読めイギリス淑女。　お前の発言、女尊男卑以前の問題だから！代表候補生とは言え、国を背負ってるの分かってる?!国際問題だからッ！　つーか姉さんがッ、織斑先生がめっちゃ見てるからッ!!
「大体、せっかく彼のブリュンヒルデ様に教えを乞う事が出来るのに、

貴方達がいるせいで、私のクラスの気品が下がりますわ!!」
ゾクリッ、と俺の背筋が凍った。けど周りを見ても、誰一人としてその圧を感じている様子は見られなかっ――いや、箒のヤツが感じてるな。山田先生も顔が青ざめてるし、後ろをチラリと振り返ってみれば、木場のヤツも冷や汗を掻いてやがる。……意外なのは、のほほんさんも笑顔で固まってた。
その圧の発生場所である織斑先生が、オルコットが続きを言うよりも速く、口を開いた。
「――話しは分かったオルコット。なら織斑、木場、オルコットの3名で試合をして貰う。形式は総当たりとしよう」
一気に捲し立てる織斑先生に、流石のオルコットも口を挟めないでいる。
……たくっ、唯でさえ姉さんはブリュンヒルデとか言われるの嫌いなのに、日本人(自分達)の事を猿だの、辺境の地だの言うから。……今夜は姉さんの好きなモノでも作るか。
「試合日は来週の月曜だ。異論は無いな?あっても呑み込め。――では少し早いが、授業を始めよう。山田先生」
「え?あっ、は、はい!ええっとそれでは皆さん、『ＩＳの基礎理論』の教科書を出して下さい!」
織斑先生のプレッシャーが治まり、山田先生が慌てて授業の準備をする。そのアワアワした姿を見た生徒達は、漸くと言った感じに息を吐いていた。
……うーん。これもある種の才能か?
姉さんが絞めて、山田先生が癒す。実に飴と鞭な関係だ。どっちがどっちだかハッキリ分かる。
「――織斑。今、変な事考えたな?」
「イエー・ワタクシメハ、ナニモカンガエテオリマセン!」
何で分かるのさ。
「――ふん、まあいい。丁度良いから織斑、現在ＩＳコアが全部で幾つあるか答えてみろ」
セーフっ!なんとかセーフ!!……で、ＩＳコアだっけ?

「５００です」
　言った瞬間。教室の時が止まり、次に笑い声が教室中から湧きあがった。
　……俺、なんか変な事言ったか？
「えっと、織斑君？その――」
「織斑。何故その答えを言ったか、全員に分かる様に説明しろ」
　山田先生が何かを言う前に、再び織斑先生が言葉を発してきた。
「何故、て。そもそも束さんが造ったコアの数は５００じゃん。織斑先生だって知ってるでしょう？」
「今回だけタメ語は見逃してやる。次からはちゃんと丁寧語で話せ。――なら、何故世界中にバラ撒かれているＩＳコアは４６７個なのか分かるか？」
「その数が、他国が争わず、文句も言われない最低数を満たしているからです」
　詳しく説明すると、ＩＳはＩＳコアと腕部やＰＩＣシステムが詰まった脚部、それに加え非固定浮遊部位（アンロックユニット）から成っている。その為、ある程度の技術力が無ければＩＳは完成まで成り立たないのだ。
　それ故に束さんは、アメリカ・ロシア・中国といった大国や、ある一定の水準の技術レベルを満たした国の各企業、研究施設、国家に配った必要最低数のコアが、
「――４６７個と言う訳です。ちなみに、残りの３３個は全部束さんが持ってます。以前ソレ踏んづけて尻餅ついたり、肩凝った時にツボを刺激するのに丁度良いって言ってました」
　説明し終わったんだが……なんか教室内が微妙な空気だ。
「ああ、説明御苦労。――あと織斑」
「はい？」
「私はコアが５００個あるとは誰にも言ってない。親しくなった友人やＩＳ委員会にもな。教科書にも４６７としか記載されていないし、各国が束を狙うのも、コア目当てではなく、アイツの知識目当てだ」
「マジ?!あれっ？と言う事は俺、墓穴掘った?!」
「ああ、見事な自爆っぷりだった」

最初の方も流し読みすんじゃなかったぁぁ!!
「――そんな訳で諸君。そこのバカには期待しておくと良い。ＩＳの知識に関しては国家代表どころか、専門の技術師と同レベルだ。当然、来週の試合でも代表候補生に引けを取らない試合を見せてくれるだろう」
しかも嵌められたぁぁぁぁぁーーーー!!
と内心で叫ぶがもう遅い。周りからは先ほどとは違った期待の視線と、約一名の憎しみの籠った視線が俺に集中していた。
……うわぁ、もうヤダ。貝の様に引き籠りてぇ。

◆

――二時限目終了
結局。二時限中はずっと視線が集中していた。それに加え、再び他クラスや上の先輩方の見世物状態の休憩時間。
ちなみにオルコットは、授業終了後、足早に教室を出て行った。
「ちょっと良いか」
そんな中、勇気ある少女が声を掛けて来た。
黒のロングストレートをポニーテールにし、無改造の女子生徒用制服を着た、凛とした佇まいの少女。６年振りに会う幼馴染だった。
「箒か、久しぶり」
「箒?――おお!箒じゃん!!……随分、印象が変わったなぁ～」
俺が言った名前に、亮斗が反応した。つーかお前、何処見て言った?いや分かるけどな?!
「ああ久しぶりだな。一夏、それにりょ、亮斗っ。そ、それで少し良いだろうか?」
ザ・アイコンタクトスタート!
(――どうするよ?亮斗)
(この視線の群れは精神的にクルから賛成)
(同意。――すまん、ホントは二人っきりが良かったんだろ?)
(ばっ、俺と箒はそんなんじゃねえよッ!)

（はいはい、〝まだ〟ね。りょーかい）
（おい！まだ話しは――）
強制カット。
「俺は良いぜ。廊下……は駄目だな。体育倉庫裏……もダメだろうな。屋上行こうぜ。――な？亮斗」
「くっ、後で覚えてろ一夏。――ああ、行こうぜ、箒」
「そ、そうか！では行くとしよう！」

◆

――ＩＳ学園・校舎屋上
「いやぁ、空気がうまい！」
外に出た瞬間、口から出た言葉がソレだった。
「そんなにキツかったか？」
「オイオイ箒さんよォ、『キツイか？』だと？キツイに決まってるだろ!!」
亮斗がそう言うが、お前、最初寝てたの覚えてるか？その意見には同意してやるが。なにせ全方面から女性特有の匂いがするし、何処を向いても目が合って、顔を赤くされながら手を振られたり、笑みを返されたりするのだ。
「お前は何も分かってないな箒！あの視線は相当にクル！見られてるだけで物理的な重圧が産まれるなんて初めての体験だぞ!?」
不本意だが束さんとの〝経験〟が無かったら、立つことも出来なかっただろう。……〝息子〟が起っちまうから。
「そ、そうか……」
俺達の気迫に押され、たじろいだ箒。救いの女神さまにこれ以上当たっても仕方ないので、一度深呼吸して気持ちを落ち着かせる。
「ふう。改めて、久しぶりだな箒」
「だな。大体６年振りか」
「ああ、そうなる。……それにしても、行き成り代表候補生と決闘とは、――大丈夫なのか？」

「「さぁ……？」」
だが対策はある。取り敢えず第三世代の専用機と、量産前提の第二世代では性能的に差があるから、オルコットの貴族意識を煽って学園にある第二世代である『打鉄』か『ラファール・リヴァイ』に変更させて、後はまあ、自主錬でどれだけＩＳの機動に慣れられるかといった所だな。
といった事を説明すると、二人から恐ろしいモノを見る目を向けられた。
……失敬な。
「し、しかし驚いたぞっ。ニュースを見てたら、行き成りお前達二人がＩＳを動かしたと報道された時は」
色々揉めた末に、埒が明かないから二人ともＩＳ学園に入れて、取り敢えず問題の先送りにしよう、って言うのが真実なんだけど、ソレを聞いたら二人の反応が面倒なので言わない。
「――特に一夏は、な」
「あー……」
そう言えば、箒も知ってたな。俺がＩＳを嫌ってるって。
正確に言うなら、ＩＳ自体は嫌ってないのだ。ただＩＳに夢中になってる政府と世界と、理不尽にＩＳ（チカラ）を振り回す人が嫌なのだ。ＩＳに罪は無いのは分かっている。けど不確定な〝世界〟やら〝政府〟などを恨んでも切りが無い、だから結局はＩＳを八つ当たりのように恨んでしまう。……ダメだな。自分でもよく分からん結論になりそうだ。
「そ、そう言えば亮斗！」
そんな俺の纏う、何とも言えない空気を何とかしようと再び箒が声を出す。
「この去年の夏の剣道大会で優勝したのだろ？毎月発行される全国中高生スポーツ新聞で読んだぞ！」
「ん？ああ、そう言えば箒も優勝したんだっけ？決勝戦は男女で別の日だったから、俺も後になって知ったぜ」
普通なら男女纏めてやれば良いのだが、こんな所でも女尊男卑の影

響が出ており、〝子供とは言え、男と一緒にウチの娘の晴れ舞台を穢されたくない〟と言ったどっかの金持ちの女性が教育委員会とスポーツ連盟に言った為、男女の決勝戦の日は別々なのだ。……全く以てアホだとしか言えない。

とは言え、俺もコレ以上気を使われたくないので、気持ちを切り替える。

「大会の記録映像見たけど、最後の面打ち、結構良い感じで決まったんじゃないか？見てるこっちも、気持ち良いくらいの良い一閃だったぞ」

「み、見てくれたのかっ？私も、あの時ほど剣と一体になれた瞬間は無いと思ったな（ほ、本当は、亮斗が今も剣道を続けていてくれた事が嬉しかったからなのだが、――い、言える訳無いッ……！）」

何やら途中でブツブツと小さな声でしゃべりだした箒。だが生憎と、この距離なら耳の良い俺達には何とか聞こえるのだ。そう言えば、確かに男子の決勝戦は、女子の前に行われたんだっけか。

「（愛されてるなーオイ）」

「（う、うっせぇ!!）」

亮斗をからかっていたら、急に箒が遠くを見て、

「父上達は、見てくれてただろうか……？」

ポツリと声に出した。

箒の親父さん、篠ノ之柳韻（りゅういん）さんと、妻であり、箒と束さんの母・珠樹（たまき）さん。俺と姉さんもかなり世話になった人達だ。

「柳韻おじさんか、……良い人だったな」

「「死んでないから！」」

亮斗の定番なボケに、俺と箒が突っ込む。

「冗談だ。けど、やっぱり柳韻おじさんとは全然会えないのか？」

「ああ。手紙のやり取りはしてるから元気だと言うのは分かっているのだが、ここ数年は会ってない。……最後に会ったのは、中学に上がる時だったか」

確か『重要人物保護プログラム』だったか？本気で狂ってるとしか言いようがないな。保護じゃ無くて束縛だろうに。しかも、本当の重

要人物である束さんには逃げられてるし。
「そう言えば一夏。その……姉さんとはよく会ってたのか？先程の話しの様子だと、よく会っていた感じがするのだが？」
まあ、あの話し方だったら誰だって気付くか。
「ああ、不定期にふらりとウチに来ては、メシ食って愚痴っていくぞ？」
この前なんかエロい事――じゃ無かった。エライ事しでかしてくれたしな。
あの後、朝早くに『嫌な予感がした』と言って急遽帰って来た姉さんに、バッチリ事後を目撃された。その後、修羅神と化した姉さんに、俺とクロエはリビングで正座させられ、姉さんと束さんはガチ喧嘩。それはもう――――凄かった。
箸は砕け、フォークとナイフは飛び交い、スプーンは床に突き刺さり、お玉とフライパンで音響兵器が鳴り響き、ソファはひっくり返るわ、窓は何時の間にかマジックミラーの強化ガラスになってるわ、お互いの関節を極めようとするわ、俺のシャツで血を拭うわと――アレはもう人類の頂上決戦だった。
最後は姉さんも束さんも笑いながら殴り合ってたから、問題は無いと判断して後片付けを頑張った。クロエ？一緒に風呂に入ったら、出てきた時にはグッタリしてた……フシギダナー（遠い目）。
まあ、流石にそんなことまでは話せないので、心の中に留めておく。
「俺、束さんとは全然会ってないんだが……？」
「そりゃあお前、束さんに嫌われてるじゃん」
主に箒が原因で。お前が箒を貰う際は、『御宅の娘さんを下さい』じゃなく、『お義姉様の妹様を下さい』になるだろうな。
「私も全然会っていないな」
「え？マジ？……ああ、そう言えば遠目で見たとしか聞いた事なかったな」
盗撮もしているみたいだけど、ソレは言わないでおく。姉――と言うより人としての尊厳も失くさせるのはどうかと思うのと、今この瞬間だって盗み見ているかもしれないからだ。

――と言うか、何故俺があのあの人のフォローをしなくちゃならないんだよ。
「あの人、箒の事気に掛けてたぞ？お前の生活を滅茶苦茶にしちまった事、結構、気にしてたみたいだったしな」
「姉さんが……取り敢えず竹刀にしておくか」
「何する気だっ?!」
いやその獲物でナニするか分かるけどよ、竹刀の前は何だ?!木刀か?それとも真剣か?!
「おっとそろそろ教室に戻るか」
「待てぇぇぇい!!」
露骨に逸らしやがったよコイツ！　…けど、6年前の俺達もこんな感じで笑いあっていたのだと言う事を思い出し、
「ははっ」
「ふふっ」
思わず笑いが込み上げ、三人同時に噴き出した。
……まあなんだ、かなり変則的で特殊すぎる学校だけど、
「これから3年間、宜しくな、箒」
「まあなんだ、……再会できたことは嬉しいぜ」
「ふふ、――ああ、宜しくな一夏、亮斗」
こうして気の置ける友人と再会できた事だけは感謝してやっても良いな。

でも授業に遅れるのはヤバいので、他二人を妨害しながら教室へと、競歩（※校則：廊下は走らない（緊急時を除く））で急いだ。

真昼の出会い

――同日、正午――

時間は少し進んで、昼休み。

３・４時限目は特に何の問題も無く終わった……のだが、４時限目が始まる前の休憩時間に、オルコットと三度目の口喧嘩になり、何故か負けたら一生小間使い――所謂奴隷宣言された。英国、つーか貴族って連中、好きだよな奴隷――させるのも、なるのも……あ、なるのはゲームの中だけか。

「よし、一狩り行こうぜ一夏！箒！」

授業終了のチャイムが鳴り、逸早く亮斗が昼食の誘い（？）をしてきた。ので、

「そこは昼食にしとけ」

「サバイバルでもするつもりか？バカ者め」

当然、ボケには全自動でツッコム俺達は反応する。

「ずっるーい篠ノ之さん！」

「織斑君！一緒に昼食でもどう?!」

「あっ！私も私も！」

「お弁当持参だけど一緒にどうですか?!」

「い、今から作るんですが、一緒に食べませんか?!」

そして、良いタイミングと言わんばかりに、クラスメイト達が乗って来た。ってまたしても最後の方凄い奴が居るんだが…？

――って、コラコラ箒。そんな嫌そうな顔すんじゃないの……気持ちは察してやれるがな、……仕方ない、フォローするか。

「悪い皆。今日の所は、俺達幼馴染組だけにしてくれないか？」

これから先も遠慮したいが。

「あっ、幼馴染なんだ」

「ああ、６年振りに会えたんだ。近況報告を兼ねてるから、居ても気まずいだけだと思うぞ？」

亮斗が俺に合わせて言葉を重ねて来る。

「ちぇっ、じゃあ仕方ないか」

「うーん、織斑君達の昔ってのも気になるけど、流石に、ねぇ……？」
「「「「うんうん」」」」
　話の解る娘達で有難い限りだ。……一部の女子の頭の一部が腐ってるのを除けばな。
「じゃあ行こうぜ、箒。　――此処の学食って、一夏の作る物より美味いらしいぜ」
「いや、一夏の作る料理の味自体、もう記憶の彼方なのだが……」
「――ほう？　流石ＩＳの名の付く学校。　やはり俺に喧嘩を売って来るか」
「お前はお前で、目つきが鋭くなってるぞ？」
「一夏のより美味かったら、……クククッ、お前の持ちネタが一つ無くなるな」
「俺のより味が格下だった場合、――まずは食堂から制圧すべきだよな？」
「お前達、別れる前と全然変わってないなっ」
（（（（（（（（（（（小学生の時からあの性格？！））））））））））））
　おや？何やら周囲が驚愕しているが、……まあ良い。取り敢えずは昼食だ。
「味せてもらおうか、ＩＳ学園の実力とやらを……！」
「此処、料理学校じゃないから！」
　そのまま三人で移動し、――その後ろからぞろぞろと女子の群れが付いて来て、食堂へ向かった。

◆

――学生食堂
「箒。お前、何食うよ？」
　食券券売機の前で亮斗が箒に聞いてきた。ちなみに、券売機はタッチパネル式の最新機だ。
「私は、今日は蕎麦系だな。　稲荷セット（３個＋お新香付き）の方で」
「やっぱり米か」

「わ、悪いかッ?!」
　いいえ悪くありませんとも。
「つーか凄いよな。和洋中の他にエスニックとかあるし。　……は？精進料理？あんのかよっ」
　言いつつ、肉野菜炒め定食を購入。ちなみに金額は５００円。恐らくは食材を大量購入する事で、値段を安くしてるのだと推測する。
「検索方法も国別の他に、今日のオススメ、定食系から主食別、名前検索……種類自体は少ないけど単品で頼めるし、組み合わせは自由だからバラエティは豊富だな」
　亮斗はカツ丼定食（味噌汁、お新香、日替わり惣菜（小鉢））の大盛を注文した。
　そして、後ろからのほほんさんが券売機の前に立つ。
「カロリーも普通より低くしてあるから、深く考えなくて良いよね～」
　そう言って白玉あんみつにチョコパフェ、野菜ミックスジュースを注文。
「「速攻デザート?!」」
「？」
　俺達３人のツッコミに、のほほんさんは首を傾げるだけだった。
　……ゆ、勇者だなオイ！
　その後、食堂のおばちゃん達からそれぞれメシを受け取り、
「あ、お姉ちゃんはっけ～ん！　じゃあまたね、おりむーにもっぴーにりょっちゃん！」
「もっぴーは止めろ！」「りょっちゃんは……」
　爆弾を落としてのほほんさんは別れ、俺達は窓際のＣの字型のテーブル席に着く。
「「頂きます」」
　手を合わせて三人同時に言う。そして肉野菜炒めを一口、
「っ！　負け――い、いやまだ負けてないっ」
「アウトだ一夏」
「素直に負けを認めておけ、一夏」
　――悔しいっ！でも（舌は）感じちゃう……っ！つーかマジうめぇ

！下拵えからして念入りにしてあるぞ、コレ?!
「ふむ。　コレは……まさか手打ちか？」
「ダシ汁が米に染みてて美味いなコレ」
その後黙々と食べて、定食の３分の２程食べ終えた所で箒が口を開いた。
「――それで？　何か対策はあるのか？　亮斗、一夏」
対策？……ああ、クラス代表決定戦の事ね。……うん、
「無いな」
亮斗と同時に、同じ言葉で返した。
「ってダメだろ！」「それダメでしょ!?」
「ん？」
声が、重なって返ってきた。
声を発した人物は二人。一人は対面に座る箒だ。そしてもう一人は、俺達が座るテーブルのすぐ近くに立っている人物。
亜麻色のショートヘアーで、此方をみる瞳の色は黒色の少女。手に持つトレーには、サンドウィッチセットと少量のサラダが載っている。
「遠見?!」
その声の持ち主は、実に約２年振りに見る友人の姿があった。
「やっほー、久しぶり、二人とも。……隣、良いかな？」
そう言いながら、件の少女――『遠見真矢（とおみまや）』は、空いていた箒の隣に腰を下ろした。
「誰だ？」
箒が怪訝そうに、そして不機嫌そうに俺たちに問いかけてくる。
「っと、そう言えばそっちの人とは初対面だったね。　木場君とかからは良く聞くけど。――私は遠見真矢、宜しくね」
「篠ノ之箒だ。　……そ、それと、二人とは随分と親しいようだが？」
「えっと、……中学校の同級生？」
まあ間違っては無いが、一応捕捉してくか。
「１年の時、ＩＳの適性が高かったから政府からスカウトされて、実質名前だけの幽霊生徒だ」

「ひっどーい！　ちゃんとテストとかは受けてたよ!?　――別室で一人だったけど。それに終わったらすぐにＩＳの訓練だったから、皆と会う時間とか取れなかったけど…！」
「とまあ、寂しい青春時代を送ってた友人だ」
　ん？遠見が項垂れてやがるな。箒も同情的な目を向けてやがるし。
「ドＳめ」
「うん。　織斑君、なんかいじめっ子になった？」
「最近、Ｓっ気が出てきたよな一夏」
　失礼な。俺はドＳじゃない。ちょっと前に、銀髪少女の所為で責めの快感に目覚めただけだ。
「あ、あと日本の狙撃部門の代表候補生で、――３組のクラス代表でもあるよ」
　その一言で、聞き耳は立てていた周りの生徒達の視線が、一斉に此方を向いた。
　……遠見のヤツ、随分とまあ逞しくなりやがって。
「聞いたよ？　イギリスの代表候補生と自薦で被って、クラス代表の座を賭けて勝負を挑んだんだってね」
「「捏造されてるっ!?」」
「えっ!?」
　驚く遠見。
　……いやいや、こっちが「えっ!?」だよ！誰だ、そんな風に改竄したヤツ！
「ん～、ああそっか、確かに私が知ってる二人とは性格がちょっと違う気がしたけど、……でも、クラス代表を争ってるのは事実なんだよね？」
「ああ、そっちは本当だ。　……不本意ながらな」
「推薦より、自薦の方が絶対ヤル気あるよな？」
「決まってしまったのは仕方が無かろう。　それに、千冬さん――織斑先生の言葉は絶対だ。　逆らえん」
「ああ、千冬さんはねぇ……」
　その場の全員が沈黙した。

「そっ、そう言えば！」
　不意に、遠見が声を上げて口を開く。
「さっきの話に戻るけどっ、……本当に無いの？　幾らなんでも、いきなり代表候補生と戦うなんて無謀すぎると思うんだけど…？」
「つってもなー。　姉さん命令だし、今更止めるとは言えない状況だからなぁ」
「同意。　それにＩＳを動かしちまった以上、戦う事からは逃げられないしな」
　亮斗がえらくマジに言っているが、確かに洒落にならない事態だ。何時までも姉さんの威光で防ぎきれるほど政府もＩＳ委員会も、それに女尊男卑を掲げるヤツ等も黙っちゃいないだろう。――前者はモルモットとして、後者は自分達の権威を脅かす存在として。
　場の空気が重くなるから言わないけど。
「へえ、結構考えてるんだね――木場君」
「俺だけか?!」
「当然だ。　亮斗はやれば出来るのだ」
「止めろ箒！　それだと普段は全然出来ないヤツみたいだと思われる！」
「ごちそうさま」
「「食べるの早っ！」」
　普通だよ。１５分もあれば食えるだろ？
「まあ話しを戻すけど、やれる事だけはやっとかないとな」
「何かあるのか？」
「ああ。まずはオルコットの機体データだな……コレは俺が調べてみるとして、あとは戦いの感を養う事だな――箒」
「うむ、任せろ。　今日は色々と忙しいから、明日からで良いか？」
「ああ」
「まあ学校始まって初日だしなぁ……」
　初日からイギリスの代表候補と喧嘩になるなんてありえねーから。
何処の主人公だよ！
　……いや、そう言えば小説が元の世界だったっけ……？　昔、亮斗

が原作だヒロインだ俺の嫁だとか言ってウザかったから聞き流したが……アイツは、この後の歴史の流れも知ってるのだろうか？
少し、聞いてみたくもある――が、
「くだらないな」
「？　何か言ったか一夏？」
つい口から出てしまった所を亮斗に聞かれてしまったが、なんでもないと答えた。
……今更、〝正史〟を聞かされたってどうしようも無い。
自分を変えられる訳無いし、今から自分の性格を主人公と同じなんかに出来ない。何よりも、
「（そんな事、考えた事もなかったな……）」
俺が今生きているのは〝この世界〟なのだ。一々原作とか考えるのは、思考の破棄と同じだ。いくら俺の人生を流れに任せているとは言え、思考の破棄は自分を殺す事だ。
……それだけは、したくない。
「（そうだろ？　――円夏（まどか））」
腰に付けた、スマホ用のホルダーケースとは別のケース。その内の一つにそっと触る。……その中身の、欠けたブレスレットに語りかけるように。
「一夏……？」
「織斑君？」
他人の変化に敏感な三人が、黙した俺に声を掛けて来る。
……駄目だな。コイツらに心配かけさせるようじゃ
「何でもないさ」
そう、何でも無いただの独り言だ。
「――――さてと、まだ午後の授業までは２０分くらいあるし……ちょっと花摘みに行って来る」
「女子かっ！」
「サイテーだよ、織斑君」
「箒達のツッコミが正しいから、遠見の負けだな」
「何で?!」

遠見が疑問の声を上げるが、箒と亮斗の二人は首を縦にして頷き肯定していた。
「亮斗」
「任せろ一夏。　――良いか？　遠見。　そもそもボケとツッコミの関係とは――――」
亮斗がボケとツッコミの重要性について語り始めたのを無視し、俺は席を立ち食器返却棚に置き、そのまま食堂を出る。
そのまま８分ほど早歩きして遠くにあって、かつ女子の視線がない男子専用トイレに入り、
「……いい加減、出てきません？」
口を開く。　その言葉に、
「ふふっ、やっぱり気付かれたてたんだ。　おねーさん、素直に感心するわ」
声が返って来る。
何時入ってきたのか判らないが、トイレの入り口付近――外側からは見られない所に、一人の女子生徒が『驚』と書かれた扇子を口元に広げて立っていた。
無改造の制服に、上着ではなくベストを着、深紅のストッキングを穿いた空色のショートヘアーの女子生徒だ。ネクタイの色は黄色――２年の先輩だ。そのオッ輩……じゃなかった先輩の紅目が、尚も鋭く俺を見つめる。
……そう、この視線だ。朝、教室に入った時からずっと視られていたモノだ。
「良く分かったわね？　隠行には結構自身があったんだけど」
「居場所までは分かりませんでしたよ。　ただ、育ちが特殊過ぎるんで」
気付いたのは日頃の経験。〝世界最強のＩＳ操縦者の弟〟として見られて、此処最近では〝超イケメンの男子〟と言う視線で視られていたから気付いたのだ。
……随分と久しぶりだな、〝俺〟と言う存在を見る視線は。
一挙手一投足所じゃない、人と話す時の目線・口・表情といった顔

の動きから、俺の性格まで視切ろうとする観察眼だからこそ気付けたのだ。
「それで、何の御用でしょうか？　先輩」
「ん～特に話す用事がある訳でも無いんだけど、……ちょっと確認したかった事があってね」
「確かめたい事、ね」
……つーかホント何者？立ってるだけに見えるのに隙が無いし、穏行が出来るとか言うし、……確かな事は研究職の人じゃないって事だな。
「まあもう大体分かったし、　特に問題無さそうだから織斑先生からの案件は受諾かな……？」
「……話が全然見えないんですが」
　つーか自己紹介くらいしろよ。――いや、もしかしてアレか？関わったら面倒な人か？初日からストレス溜まったり、面倒な性格の人ばっかと会ってもう一杯一杯なんだが。
「ああ、そう言えばまだ自己紹介して無かったわね、――――でも今は言わないわっ！」
「言わねぇのかよっ！」
　何だそのフェイント！つーか、やっぱこの人色々と面倒な人だ！
「ふふっ、別に言ったって構わないんだけどね、……この後の事を考えると、言わない方が良いと判断したのよ」
「めっちゃ思わせぶりな発言ですね。――はぁ、もう良いですよ。言わないなら言わないで」
「聞きわけが良い子はおねーさん好きよ」
「納得したんじゃ無くて、色々面倒になっただけです」
「あらあら随分と投げやりね？　そんなんじゃ人生大損しちゃうわよ？」
「余計なお世話です先輩」
　つーか既に手遅れだ。ＩＳに関わった所為で、もう普通の人生踏み外したわ!!
「余計なお世話、ねぇ。　……じゃあ余計なお世話ついでに、ＩＳの実

機訓練でもつけてあげようかしら？」
「考えておきます。　……そろそろ休み時間終わりますね」
　時計を見れば、あと１０分程で昼休みが終わる時間だった。１０分前ならまだ十分あると思うが、如何せん今居る場所は教室とは距離があるだ。
「あら、もうそんな時間？　楽しい時間ってあっという間に過ぎちゃうものなのね……時が止まれば良いと思わない？」
「――無いですね。止まっても、過ぎてしまったモノは還りませんから。　あと、先輩が意外とエロゲ脳だって事が良く分かりました」
「エロこそ至高よ！特に妹モノなんか最高に萌るわ！」
　……言い切りやがったよ、このエロゲ先輩。
　その一方、言い切った女は、背を向けて男子トイレから出て行こうとし、
「あ、そうそう」
　足を止め、顔だけを此方に向ける――所謂シャフ度的なポーズを取り。
「予知してあげる。君、意外と早く私と再会する事になるわ」
　そう不吉な事を言い残し、今度こそ男子トイレから出て行った。
　……やっぱＩＳに関わると碌な事にならないな。こんなのが３年間も続くのか……ストレスで禿げないか？俺の頭？
「――こんな時は、一旦思考を放棄する事べきだな」
　取り敢えず、さっさと用を足して教室に向かうか。

　そして――、

「織斑に木場。お前達に急遽専用機が拝領される事になった」
　五時間目の開始前に姉――織斑先生が入ってきて、ドヤ顔で爆弾発言をブチかました。
「もうヤダ……」
　どうやら今日はまだ災難が続くらしい。

放課後の出会い

――同日・放課後

時刻は１６時を回った所。

すでに殆どの生徒は寮に帰ったり、校内を探索する為に居ない。今居残っている生徒は、俺達を鬼気迫る勢いで写生しているヤツ等ぐらいだ。

……と言うか貴様ら、程々にしないとアイアンクローで沈めるぞ？

「疲れた」

「だな。入学初日から６時限授業とか、マジ常識外な場所だと思う」

ポロっと零れた愚痴に、亮斗が同意した。

六時限なのもそうだが、３時限目以降昼休みも含め、全部の授業・休憩時間において平穏な時間など無かった。

その中で、一番有難くない事と言えば専用機持ちになった事だ。

『専用機』

言葉通り、その人専用に調整・開発されたＩＳの事だ。

貴重なＩＳコア４６７個（もう間違えないぞ）の内、『研究用』＋『ＩＳ学園に配備されている数６０個』を除けば、その分だけ国や企業が保有する分が少ないのだ。その少ない中で、俺と亮斗の専用機用のコアを用意したとなれば、――俺達がＩＳを動かせる事を知っていたとしか思えない。

……其処ら辺も、少し調べてみる必要がありそうだ。ただまあ、

「面倒だよなぁ」

「ああ」

今は物凄くタイミングが悪い。なんせオルコットとクラス代表の座を賭けた勝負が行われるからだ。

オルコットがポロリと言ったが、彼女も専用機を持っているので性能面では互角になったが――普通に考えれば、まだ初心者の域を出ない俺達と、年単位でＩＳ操縦の訓練を受けたオルコットでは錬度の差がある。

その為、三時限目前の休憩時に箒に言った、『使用機を学園の訓練機

である《打鉄》と《ラファール・リヴァイヴ》に限定する』と言う策は物の見事に失敗した。
だが、決まってしまったモノは仕方ないとして頭を切り替え、取り敢えずは、姉さんにスペックと武装関係のデータを貰える事にしたが、
「肝心のＩＳを使った訓練が出来ないとは……」
と言うか姉さん、対応早すぎ。
「まだ入学したばっかだから、ＩＳを使った訓練は許可が下りないんだってさ。出来たとしても、教員同伴だってよ」
「知ってる教員二人は忙しいから無理だな。……せめて一度くらいは実機で訓練したかったな」
なんつーか、更に難易度が上がった？……俺の受験内容よりは簡単だろうけど。
「あっ！　居た！　良かった。　まだ教室に居たんですね二人とも！」
二人して黄昏ていると、不意に教室の入り口から、今日知ったばかりの人物――山田先生が、此方に駆けて来た。
……オイ教師、廊下は走っちゃいけないんじゃなかったのか？……いや、急ぎの用件だったなら可なのか？つーか山田先生、ノーブラ？走る度にかなり激しく揺れてんだが？あ、三要さん?!泣きながら廊下を走っちゃ駄目だぞ!?怪我すんぞ!!
「――あーっと、俺達に何か用ですか？」
「あ、はい。　お二人の部屋の鍵を持って来るのを忘れてしまって」
「ん？　あれ？　寮暮らしになるのは知ってますけど、確か、部屋の準備に一ヶ月くらい掛かるんじゃ……？」
しかも一人部屋。ぜってー政府の目論見が丸解りな采配だ。
いやでも、そう言えば、亮斗の奴が１週間分の下宿の準備はしとけって言ってたな。気になったから土日までの下着の替えと、スマホ用の充電器にその他必需品に小物、それと自作ＰＣも纏めて荷物の傍に用意しといたが。
「え、あ、あれ？　連絡がいってませんでした？実はですね――」

「事情が変わったんだ」
　山田先生がしゃべろうとした矢先、今度は姉さんが入って来た。肩にボストンバッグを掛け、片手にＰＣケースとスーパーの袋、もう片手はＭサイズのキャリーケースを引いていた。
　……つーかアレ、俺のバックとＰＣケースじゃん。ならキャリーケースは亮斗のか？つーかスーパーの袋に、家にあった野菜類と賞味期限が近い食品とか入ってるし。
「知り合いの専門家に、朝から私と木場の家を監視させていたんだがな。　予想以上に各国家や企業、研究施設の人間、挙句の果てに裏関係のヤツも居たらしくてな。　一ヶ月も自宅登校だと〝何かしら〟の問題が出ないとも限らん。　だから学園理事やＩＳ委員会に進言して、強制的ではあるがお前達二人を寮に入れる事にした。　――全く、日本政府は詰めが甘い」
　どうしよう。姉さんの発言が突っ込み所が多くて突っ込み難い……うん無視しよう。
「えーっと、では織斑先生。　それでは１カ月先まで女子生徒と半同棲という事でしょうか？」
「……不本意だが、そうならざる負えない状況になった。　――くっ……！　あのバカの所業を繰り返させないと誓ったばかりだと言うのに……ッ！」
　引いてる。周りの人が引いてるから、姉さん！つーか姉さん、まだ束さんのした事を引き摺ってんのかよ。
　あ、俺？俺はまあ男だし？初めてがどうとか考えてなかったし……寧ろラッキー？――次があったら仕留めるがな。
　そもそも束さんの行動を止められるとしたら、その場に姉さんクラスの武力を持った人が居ないと阻止出来んぞ？
「そんな訳で、こっちも色々苦労した。　篠ノ之が居るから一人は確定してたし、もう片方の方も……まあ色々調査して、取り敢えず国や企業系の思惑が介入して来ない生徒を選んどいた」
　もしかして、昼に会った先輩の事か？　――いや、あの時の会話の内容だとなんか違う気がするな。

「ちなみに木場、お前のルームメイトが篠ノ之だ。　織斑の方は……まあ、部屋に付いたら自己紹介でもしろ。　どちらも襲ってくる心配は無い。寧ろ心配なのは木場の方だがな」
　ソレには同意するが、俺の予想だと、ナチュラルエロの箒が極自然にエロ方面に場の空気に持って行って、それに耐え切れなくなった亮斗が箒を襲うってパターンな気がする。
「ひでぇ。　つーか其処は普通、弟の方を心配するんじゃないんですか？」
　その言葉に姉さんは、ふんっ、と鼻で笑い。
「コイツの事なら心配いらん。　普通に迫られたくらいじゃ手なんか出さんし、自分の立場くらい理解している」
　最初が『普通』じゃなかったしな。
「それに、コイツの同室の相手にも此処の生徒会長から直接伝達が云ってる筈だ。　……アレ渡したから、寧ろ別の意味で興味を持たれるだろうがな」
　ナニ渡した?!山田先生も乾いた笑みを浮かべてるって事は、アンタも一枚噛んだな!?
「そんな訳で、いい加減受け取れ。　持ってるのも疲れた」
「あ、はい」」
　いやに疲れた声を出した姉さんに逆らわず、素直に荷物を受け取る。
　……むう、野菜類が大半に肉もあるな。あとはバターとか、タッパーに入れた惣菜類か……今度の休みは一度家に帰って在庫の整理だな。弾とか数馬の家に送るか？後は一騎の所だろ。あとは、ってそう言えば小鷹は地方に引っ越したんだっけ？まあ3か所あれば十分だな。
「話しは以上だ。　学園内を見て回るのも良いが門限までには寮に戻れよ？　今の私は寮長も兼任しているからな」
　どうやら、姉さんは予想以上に役職が多いようである。そりゃ偶にしか帰って来ない筈だ。
　そして姉さんは言うだけ言って、足早に教室を出て行った。その後

を引き継ぐように山田先生が説明に入った。
「えっと、それと申し訳ないんですが、今現在、お二人の大浴場の使用は禁止させて貰います」
まあそれは仕方ないよな。環境からして家とは全く違うし。
「では此方をどうぞ」
山田先生が差し出して来たのは、二つの鍵と寮の案内図だった。
……１０６０号室か。２階の一番奥だから、意外と覚えやすいな。
案内図を見ると、各学年ごとに寮が別れているようで、一棟全てが今年入った新入生の学生寮らしい。大きさそれなりで、一階は食堂と大浴場とランドリー設備があり。２、３階が生徒用の寮室である百二十室がある。
一見して金の無駄遣いな気もするが、見様によっては納得できる部分もある。
と言うのも、ＩＳ学園の入学者数は８クラスの２４０人前後と決まっている。それも世界各国から集まって来る――それこそ、オルコットの様な生粋のお嬢様から、宗教信のある子や腐女子まで、だ。
そんな我の強い子たちが部屋内の改装をしないと思うだろうか？
恐らくＮＯだ。
だから入学してから卒業までの３年間。入学してから入った部屋を使って貰い、その子達が卒業したら、一気に内装を整え、次に入学して来る新入生たちが使う、と言うサイクルを行っているのだそうだ。学年ごとに寮が別れているので、非常に整備がし易い環境になっている。
と言うのが、山田先生の話である。
「それでは、私も職員室に戻りますね」
「ええ、わざわざ有難うございます。　――やまちゃん」
「い、いえ！　私だって先生なんですからってやまちゃん?!」
「それでも有難い事には変わりないですよ、ヤーマ」
「そ、そんなッ！　お二人のこれからの苦労に比べたらってヤーマ?!」
「マヤちゃんやっさしーっ」
「そ、そんな事ないです、ってマヤちゃん?!」

「おっぱい☆おっぱい☆」
「か、体ネタは禁止ですっ！」
からかい甲斐あるなぁ。それにクラスメイト達もノリが良いし。でも、あんまりからかい過ぎると駄目なので、今日の所は此処までにしておこう。
「所で山田先生。　職員室に戻らなくて良いんですか？」
「あぁっ！　そ、それじゃあ皆さんっ、近くですけど気を付けて帰って下さいね?!」
そう言って足早に教室を出て行った。
……やっぱり良い先生だなぁ、やまちゃん。
「さて、俺達も寮に行くか？　取り敢えず、荷物を置きたいしな」
食材も冷蔵庫に入れないといけないし。

〜〜少年達、移動中〜〜

――――ＩＳ学園・第一学年寮
あの後、学園内の更衣室やアリーナの位置などを確認の意味も込め軽く回り、寮近くにある購買店（当たり前だが、女性用化粧品なんかが多かった）で飲み物や足りなさそうな食材を買った後寮に着き、
「……２５、と。　俺の部屋は此処か」
１０２５号室の前で亮斗が立ち止った。
「そっちは１０２５か。　結構中盤にあるから通り過ぎに注意だな」
「一夏は６０だっけ？　端っこだから分かり易いよな。　……そう言えば夕食はどうすんだ？」
「同居の娘と話し合って決める。　なるべく早く食材を使い切りたい所だがな」
ルームメイトが居るとなると、流石に自分勝手にキッチンを使う訳にはいかない。向こうも料理をしたかったり、朝夕と食堂で摂るかも知れないのだ。それに冷蔵庫とかの取り決めもしないといけないし。
……コレが箒だったら、ある程度はお互いの事が分かるから話もスムーズなんだがなぁ。

ちなみに、食堂自体は何時でも開いており利用可能だが、食時間帯は朝夕共に6時からやっており、朝は8時、夜は9時までだそうだ。
「決まったら連絡する」
「おう。　……まあ、どんな娘とルームメイトになるかは知らんが頑張れよ」
「お前も……腰痛めるなよ？」
「やらんわ!!」
別れ際に一言煽って再び歩き出し数分掛かって目的地に着く。
……さてどうするか。
鈴とかなら、ある程度知り合った後に家に遊びに行った事があるが今回は違う。なにせこれから一ヶ月ほど同居するのだ――それも異性と。
「いや、気負い過ぎだな。　普通にしてれば良いんだ――多少は気を遣うがな」
そう思いながらチャイムを鳴らし、ドアをノックしてその場で待つ。
鍵があり、事前通達があったからといってすぐには入らない。なにせ同居相手は女性なのだ。　着替え中だったり、風呂――いや備え付いてるのはシャワールームだったか？――とにかく、そう言ったエロハプニングはしたくないし、しちゃダメだ。
……エロ不注意は一歩間違えれば死ぬしな。
と言うか、エロハプニングが許されるのは二次元の中だけだ。
そんな訳で1分ほどその場で立っていると、ドアの前からモノが退かされる音と、鍵が開く音と、チェーンが外れる音が聞こえた――が、ドアが開く気配は無い。
「（……コレは、確かに問題は起きないだろうなぁ）」
冷や汗が出る。まず間違いなく、同居人は不機嫌だ。不快指数ＭＡＸと言い変えても良い。
そう考えていると、遠くの方で怒声が聞こえた。
「ま、待て箒！　今のは俺が悪かったからッ！　だから竹刀は止めろッッ!!」

「うううるさいッ！　二回死ねえええ!!」
「お前狼少女じゃないだーるとんッッ!!!!」
……あっちは問題なさそうだな。
そう思うのも束の間で、亮斗の叫びを聞いた女子達が次々と部屋から出て来ては辺りを見渡し、
「あっ！　織斑君発見！」
「え？　――あ、本当だ」
「ふむふむ、織斑君の部屋はソコか……あの部屋の人、誰だか分かる？」
「さ、さあ……？」
「良いな～、ワタシも彼と一緒の部屋が良かったなぁ～。　……毎日がカーニバルね!!」
「――ブハァッッ!!」
「「「「「「キャァァァァ!!」」」」」」
「しっかりしなさい！　まだ夏は先なのよ!?　あ、誰かティッシュ持って来て！　１０秒ね!?」
「「「「お前が行けよ！」」」」
……こっちはこっちでカオスか。あ、あと鼻血出た娘。鼻元抑えて上向いて、首の頸動脈辺り冷やすと止まるの早いぞ？
「おぉ？おりむーの部屋って、お隣さん～？」
「ん？この声」
隣のドアが開き、聞き覚えのある（と言うか独特過ぎて記憶に残る）声が聞こえ、ひょっこりと顔を出してきたのは、のほほんさん事、布仏本音だった。着ているのは、制服と同じ感じ様な感じのダボダボのジャージだった。
「お隣はのほほんさんか」
「だね～……それにしても、おりむーがかんちゃんと同じ部屋か～」
「ん？　知り合い？」
コクコクと頷き、
「幼馴染みたいなものかな～……？」
そう言いながら此方に歩いて来て、ペタンペタンとドアを叩く。

……って叩いた音がしてねえぞ?!
「かーんちゃーん、あーけーてー……寝てるのかな?」
「いや、さっきドアの鍵を内から開けてたから起きてる筈だ」
「じゃあ、なんで入んないの~?」
「気配から察して入り難い雰囲気だったからな」
「……おりむーってヘタレ……?」
この娘、意外とハッキリ物を言う性格してたんだな。
そんな内心の評価など一切気にしないのほほんさんは、笑い顔でドアを開け、体を左右に揺らしながら入っていく。
その行動に唖然としつつ、嫌な予感がするのでドアを閉め、耳を澄ます。
『かんちゃーん、遊びに来たよ~』
『ッ! ほ、本音?!』
『わ~お、かんちゃん凄いカッコウしてるね~!』
『こ、コレは、シャワー浴びてたからって本音?! 引っ張らないでっ!』
言い争う声が聞こえ、その後に此方に向かって来る足跡が聞こえ。
……あ、ヤバい。
そう思うのと同時ドアが開き、その中からのほほんさんに腕を引かれ、水色のセミロング少女が連れ出された。
ちなみに着ているモノはバスタオル一枚だった。
「(……違うな)」
水色の髪色を見て、昼に会った先輩を連想したが、ドア越しに聞いたのほほんさんとの会話の様相と、実際に見て、髪の長さと眼鏡の有無――それとオパーイの差から別の人物だと判断した。残念では無いのだが、その子の腕を挟んでいるのほほんさんのモノと比べると、どうしても差がハッキリしてしまうのだ。
……て言うか、連れて来ちゃダメだろのほほんさん。あと、強制エロ不注意は死亡フラグに入るのか?
「じゃじゃーん! 私の幼馴染のかんちゃんで~す!」
「ほ、本音っ! だ、だから引っ張らないで……!」

だが、顔の輪郭なんかは似ているので、ちょっと聞いてみようと思った……目線は少女の首から上に固定して。
「なあ」
「な、なにっ」
「行き成りで何だが、二年生に姉とか居――」
其処まで言い掛け、その先を言うのを止めた。
……地雷踏んだな、俺。
さっきまで顔を真っ赤にしてアワアワしてたのに、『姉』の一言を言った辺りから、一気に顔から血の気が失せ、どう表現して良いのか分からない表情をし、
「――!!」
右手が動いた。
……ああ、今日はやっぱ厄日だな。
そう思いつつ、変に防御態勢や回避の姿勢を取らず、体から力を抜き衝撃に備え、

――直後、乾いた音が廊下に響いた。

戦いに向けて

――木曜日・放課後

入学式以降のゴタゴタが終わり、ようやく通常運転となった教職員室の一角。其処にある机に向かって、織斑千冬は腕を組み、睨みつけるようにして目の間のディズプレイを見ていた。

「まだ悩んでいるんですか？　先輩」

隣の席で、授業用のプリントを作成していた山田君が声を掛けてきた。

「……先輩は止してくれ、山田先生」

「す、すみませんっ、なんて言うかつい癖で！」

擬音にすると、『ギンッ！』と音がしそうなほど、鋭い目つきで山田真耶を見る織斑千冬。その眼力にビクついた山田真耶。

そんな二人の様子に、呆れながら山田のフォローをする為に、千冬の前の席に座る女性――遠見弓子が口を挟む。

「真耶ちゃん、千冬と初めて出会った時、テンパって〝お姉様〟発言してたしね～」

「いい言わないで下さいっ、遠見先生!!」

「ゴメンゴメン。　でもちふ――っと織斑先生。　……ソレ、一夏君達の専用機をどちらにするか、って倉研からの連絡でしょ？」

「ああ……」

遠見先生――いや、弓子の言葉に、声少なく返事を返した。

バカ二人がオルコットと決闘する事が決まった際、私は一つの決定をした。それが、二人に専用機を持たせる事だ。

表向きの理由は二人の安全上と発信機の意味合いを込めたモノだが、裏の理由は私的なモノ――すなわち、一夏を負かす事だ。

何を馬鹿な事を、と言うかもしれない。実際、世論アンケートで『ついこの間まで一般人だった男性と、イギリス代表候補まで上り詰めた女性とＩＳで勝負したら』と言う題で聞き込みをしたら、確実に『女性が勝つ』に軍杯が上がるだろう。だが、その男性が一夏だった場合、勝率は一気に５割になる。この一週間の過し方によっては７割にな

るかもしれない具合だ。
本音で言うと、一夏には勝って欲しいと思ってはいる。だが、勝てば更にバカ兎(束)が己の願望の為に一夏を引き摺り込むだろう。
……そんな事になるくらいなら、いっそ監視付きの生活にしてやった方がまだマシだ。
『別名・モルモット生活』とも言うが、日本に居れば解剖される心配は無い。この国は良くも悪くも法を順守するからだ。まあ、精々血を抜かれたり、遺伝子ヌかれたり、子供が男子だった場合その子も観察と研究対象になるくらいだ。
……もしそうならなかったら、地下の『アレ』を束に頼んで起動してでも私がそうさせる。
「何か怖い事考えてない？・千冬？」
「……お前の考え過ぎだ、弓子」
「（否定しないんだ）」「（否定しないんですね）」
……危ない危ない、かなり危険な思考をしていた。
話を戻すが、そんな私の思考などあのバカ兎は予想済みだったらしく、アイツお手製のＩＳが二機も表に出て来たのだ。それも、二人が入学する数日前、倉持技研の敷地内にポイ捨てされている様に。
当然、篠ノ之束製の最新機に日本政府とＩＳ委員会は喰いついたが、ＩＳコア部分に細工がしてあったらしく、倉持技研の研究者曰く『機体性能は把握できたが、武装関係は名称以外全てプロテクトされており解読不可能』と言う事だった。そのプロテクトを解除する方法が、製作者からの音声付で届いていたらしく、
『ノロマな凡夫供に判り易く説明してあげるけど、このＩＳ、いっくんか……ええっと、りょったん？……そう！りょっちゃんだ！・りょっちゃんか、もう一度言うけどいっくんが乗ればプロテクト解けるからね！・じゃあ、Ａｂａｙｏ　Ｆｌｙ　Ｂｙｅ！・』
と言う事らしい。担当した技術者が「Ｊ９、って知ってるかい？・」と聞いてきた時、思わず「知っている」と答えそうなったのは封印したい思い出だ。
そんな訳で、ＩＳ委員会でも揉めたのだが、廻り廻って私に『二人

をどちらに乗せるのか？』と言う判断が委ねられたのだ。
「で？どっちを乗せるの？」
「どっちとはどっちの事を聞いてるんだ？」
「どっちってそっちのでしょう？」
「そっちとはどちらの事だ？」
「どちらってそっちの事じゃないの？」
「そっちとはだからどっちの事を――」
「ま、真面目にして下さいっ！　っていうかもう言ってる意味が分かりませんよ?!」
……遊び過ぎたか。
山田君からツッコミが来たので、真面目に話を進める事にする。
「それで、《白式》だっけ？　千冬の〝アレ〟積んでるＩＳ」
「ああ……」
〝アレ〟だけでじゃなく、コアのシリアルナンバーも００１――つまり最初期に製作されたコアを積んでいると言うのは、関係者だけしか知らない事だ。
……言えば、余計に騒がれるだけだからな。
「性能（スペック）見ましたけど、現存するどのＩＳよりも最高速度がトップでしたね。　その変わり武装が一つだけでしたけど……」
「『雪片弐型』、か。　名前からして、千冬が世界最強の称号を得る事になった時に持ってた武装の後継兵装よね……？　束博士が手を加えたなら何かしらのギミックが組み込んでありそうね。――取り敢えず、〝重い〟でしょうね」
弓子の意見には最大に同意する。
……全く、束にはずっと悩まされる。
だが、アイツには分かってたのだろう。私ならどういった選択を取るのかを。
「（――そっちの方が一夏のプレッシャーになるしな）――よし、これでいく」
「やっぱり」
……うるさい。アイツの思い通りになるのはかなりムカつくが、や

はりこの選択しか思いつかないんだ。

◆

――――金曜・放課後

時は一日経ち、週末の放課後。

ＩＳ学園の一画にある剣道場では、二つの影が向かい合っていた。どちらも剣道着に防具を着けており、荒い息を吐きながら、お互いに正眼の構えで対立していた。

「はぁはぁ……ッ、ど、どうしたよ、箒？　ず、随分と息が、上がってる、ぜ……っ？」

「お、お前こそ、なッ、た、たかが、三十分程の運動で、い、息が切れる、ようではッ、代表候補に勝てる、気で、居るのかっ……？」

「いやいや、三十分も全力で動いてたら、流石に代表候補でも息が切れると思うよ？ってゆーか、私は確実に切れる」

そんな意地なのか見栄なのか分からない激を飛ばし合う二人に、傍で見学してた少女、遠見真矢がツッコム。

何故此処にクラスの違う真矢が居るのかと言うと、ただ単純に暇だったからだ。と言うのも、彼女の所属している部活は陸上部（本人はクライミング部を設立しようとしたのだが、人が集まらなかったため申請が却下された）なのだが、本日は自主錬の為、今日送られてくると言う二人の専用機の情報が気になって仕方なかったので、こうして剣道場まで来たのだ。

それにしても、と真矢は思う。

「織斑君、遅いね……」

「うむ。　千冬さんから資料貰って、亮斗に渡す為に此処に来るのなら、既に着て居てもおかしくない筈なのだが……」

自分の疑問に、休憩の為に防具を脱ぎ、此方にやって来た箒さんが同様の思いを述べた。

「多分、腹括る為に一人になってんだろうな」

そして、更にそう言いながら、同じ様に防具を脱いだ木場君がやっ

て来る。
……む……。
思わず眉を顰めてしまった。なにせ二人の飲み物は自分の近くにあるのだ。だから二人が来るのは当然の事と言えるが、つい先ほどまで二人はかなり本気で打ち合っていたのだ。となれば、当然汗を掻く――それも大量に。
……も、もうちょっと離れてた方が良かったかも――って違うよ、私!?
思考がズレたので、急いで軌道修正する。
「えっと。　木場君は、織斑君がまだ来てない理由が分かるの？」
「んーあー……まあ、な。　なにせ〝あの〟千冬さんだぞ？　一夏が大変な目に遭うのは決まりきってる」
「あー……」
何か引っかかる様な言い方だったが、最後の方の言葉に箒さん共々納得してしまった。
仲が悪いと言う訳じゃないが、何時も織斑君の思考を先読みしたかのように先に釘を刺されてたっけ。
「さてと、オルコット戦はどうなるか知らんが、一夏だけには負けたくないし……箒、もう一本行けるか？」
「む、言ってくれる。　一本どころか、学食の利用時間ギリギリまで付き合ってやるぞ？」
「ククク、言うなぁオイ。　なら、もう少し付き合って貰うとするか」
そう言って、今度は木刀を持ち、ゆっくりとした動きで型取りをし始めた二人を見て、
「（……良いなぁ）」
思わずそう思ってしまう。二人の関係がちょっと羨ましかった。何と言うか、通じ合ってる、って感じで。
その後、私と箒さんでＩＳの動きなどを解説したり、ＩＳ無しでだがシミュレートしたりして時間を潰していたが、結局、織斑君は剣道場に来なかった。

◆

――同日・夜

既に日が変わろうとしている時間。翌日が休みと言う事もあって、まだ多くの部屋に明かりが点いている。だが、春先とは言え海に近いＩＳ学園は肌寒い為に誰も外に出ていない。そんな中、ベランダにただ一人、一夏は出ていた。

「ハァ……」

溜息が零れた。

今日、本当は資料を貰ったら剣道場に行き、その後、オルコットのＩＳの事を調べるつもりでいたのだ。だが、職員室でＩＳの資料を貰った時に自身の乗るＩＳの資料を見て、――その後、気付いたら寮室に戻って夕食を大量に作っていたのだ。

そして、作った夕食も食べず、ずっと空を眺めていたのだ。

余談だが、ＩＳ学園は空気が澄んでいるのか肉眼でも星空が良く見える。

「空、広いなぁ……」

星は好きだ。中でもオリオン座は分かり易いし、その近くにはふたご座を見つけられるから尚の事好きだ。

……切欠が、あの束さんってのはアレだがな。

何処が気に入られたのか知らないが、束さんには色々な事を教えて貰った。何に使えるか知らない雑学から、箒の可愛さ、歴史上の小説家の話し、箒の好物、プログラミング、箒の癖、機械工学全般、箒の愛らしさ等、

……箒絡みはホンッとウザかったなぁ。あのウザさが身内になるのが嫌だったから、箒を亮斗に押し付けたんだっけ……？

まあそれはともかく、星座や宇宙に関してはかなり熱が入って教えられた。

「ま、まだ寝ない、の……？」

「ん？」

何時の間にか窓が開けられ、ヒーロキャラ絵の半纏を羽織った更識さんに声を掛けられた。
……珍しい事もあるもんだ。
初日の夜の件は、その当日に、俺のお詫びの夕食とのほほんさんの三時間正座（強制）、そして更識さんが俺に謝って片が付いたが、それ以降はお互い不可侵で、最低限の会話くらいしかしていなかったのだ。
……その最低限の会話の中にアニメ議談があるのは、お互いオタク側に属しているからだろう。
「っと、そう言えば悪かったな。夕飯、作り過ぎちまった」
確か、それなりの量の食材をすべて使い切った記憶がある。
……と言うか、作っときながら自分自身が食べないなんて、ホント、何やってんだ俺。
この数日で分かった更識さんとのほほんさん（初日以降、朝と夜は毎日来ている）の食事量から判断して、明日の朝は持つが買い出しにいかないといけない。
「あ、えっと、し、仕舞うのは大変だったけど、洗いモノは私と本音のしか無いから大丈夫」
日頃の行い言うやつだろう。何時も多めに作って後日食べたり、弁当のおかずにするからだ。
……後でちゃんと把握しておこう。
「――今日はもう寝るのか？」
「う、ううん。　まだ寝ない、けど……貴方は…？」
……この子、また寝落ちるまでプログラミングする気か？あんまり根を詰めたりしても良いモノが出来る訳じゃないんだがなっと、今考えるのはこの子の事じゃなかった。
ズレた思考を戻し、視線を空に向け、
「俺も、まだ起きてるかな」
「そう。　……ねえ、聞いても良い……？」
今日は本当、珍しい事だ、と思った。視線を夜の空から少女に向け、次に口から出る言葉を待つ。

そして、少し言い淀んだ後、少女が口を開く。
「お姉さんの影を背負うって、辛くない……？」
「……は？」
考えてもいなかった事を言われ、数秒だけ気の抜けた表情を表に出してしまった。まず初めに思った事は、どうして知っているのかと考えたが、
……そう言えば、彼女の専用機も倉持技研のだっけ……？
資料を貰う時に聞いたっつーか聞かされた事だが、彼女のＩＳ《打鉄弐式》は倉持技研が開発に従事していたのだが、俺と亮斗のＩＳを解析する為に人員が割かれ、その為に彼女のＩＳは未完成のまま放置されたのだと言う。そして更識さんは、そのＩＳを自分の手で完成させる為に引き取ったそうだ――　一人でＩＳを作り上げたお姉さんに対抗して。
……全部のほほんさんに聞いたことだがな。て言うか、一人で作ったなんて絶対プロパガンダだろう。
随分、お節介な幼馴染を持ってるな、と思うのと同時に、似ている、と内心で思う。性格と性別は姉弟・姉妹と違うが、その境遇が似通ってるのだ。
……それにしても、姉の影、か。
正確には、姉さんでは無く『織斑千冬』の影。知ってるだけでも『ＩＳ界の女傑』『世界最強のＩＳ操縦者』『ブリュンヒルデ』『超人』『剣神』『現代版抜刀斎』『女武者』『取り敢えず剣、持たしとけ』『更木剣八（♀）』『銃弾斬った人』『もうあの人一人で良いんじゃない？』と様々だ……後半は２ｃｈスレのだが、確かに背負うとなると重い。重いが――、
「俺は、別に背負ってる気は無いんだが……」
「じゃあ、何でお姉さんの決めた事に素直に従うの……？　なんか、自分の人生をお姉さんに委ねているみたい。　――――ううん、違う。なんか、自分の意思を持たない様にしているみたい」
思わず眼の前の少女を見つめてしまった。
観察眼が優れてるってレベルじゃない。そういう方面の素質と特

殊な訓練が必要な筈だ。そして、一つの事実に気付く。
……建前は意味無いな。
本音だ。のほほんさんの事じゃなく、本心での言葉じゃなきゃ目の前の少女は納得しないだろう。そう思うと、何だか諦めにも似た感情が湧いてくる。
背を手すりに預け、一息吐き、
「――なんていうかさ、怖いんだ」
こうして、己の内を吐きだすのは何時以来だろう。
……思い返さなきゃ分かんないくらいって事か。
そう思いながら、前世の事とかはボカして口を開く。
「子供の頃からさ、俺、精神的に結構成熟してたんだ。　あまり泣かなかったし、我が儘言わなかったし、姉さん達が母さんたちに甘えてた時も、母さん達の負担になるかもしれないって思っててさ、寧ろ、よく家事の手伝いとかしてたな」
「〝達〟……？」
「……妹が、居たんだ。　正確には双子の妹。　アイツは姉さんにベッタリで、俺に対しては、お姉さんぶりたかったみたいだったけどな」
「居たって事は……」
「――ああ、今はもう、居ない。　――居なく、なっちまったんだ」
言葉にして吐露する事で、何故、束さんがあんな賭けを持ちかけたのか、漸く分った。
「妹が居なくなった後、俺、精神的に不安定になってさ」
何で二度目の人生を歩んでる俺が生きて、未来が広がってる円夏が死ななきゃならないんだ、と。そう思いながら部屋に引き籠り。その内、
「自分が死ねばよかった、自分なんか壊れてしまえって考え始めて、自分を苛め続けたんだ」
食事の量は普通だが、体を動かす量を多くした。なにせ、親も一緒に居なくなったのだ。姉さんは家事スキルが殆ど無かったから、必然、家事は俺が中心になった。炊事、洗濯、掃除、買い出し……は姉

さんも手伝ってくれたな。他に家計簿、裁縫、役所への提出書類等々。それと並行して学校にもちゃんと通っていた。

まあ、そんな事を、まだ体が出来て無い幼少の肉体で行ったのだ。当然、ガタはすぐにきた。

「2週間だったな。　夕食の支度をしてる時に、突然体に力が入らなくなってブッ倒れたんだ……それでも、コンロの火を消したのは流石としか言いようがないが」

……あの家は姉さんの帰る場所だし。流石に、姉さんの帰って来る家を消し炭にはしたくなかったんだな、俺。

「それで……？」

「姉さんに叩かれて、泣かれた」

同時、初めて姉さんは〝弱い〟のだと理解した。年上だとしても、二度目の人生の俺と違って人生経験は少なく、心が成熟してない子供なのだと。なにせ一度に両親と妹を失ったのだ。さらに其処へ来て、俺が無茶をしてブッ倒れるという事態だ。

泣かれ、叩かれ、また泣かれた。それ以降、俺は〝自分〟を心の奥に閉じ込めた。

その後、束さんと出会い、箒、亮斗と出逢って……どう言う心境の変化かしらんが、外道要素が入った気がするが、それでも、

「自分なんか持たないって決めたんだ」

「貴方は、それで良いの……？」

その視線は、俺に何かを問いかけている様で、その実、俺にナニかを重ねているように見え――、

……ああ、そうか。　この子、俺と同じ様な事を考えてたのか。

自分と俺の境遇が似ている事を、彼女も気にしていたのだろう。俺がどういう行動を取るかを見たかったのだ。そして、多分俺の取ろうとする行動が彼女の琴線に触れたのだ。

……恐らくは、自分の意思で動かない事かな……？

自分の選択。自分らしく。長らくしていなかった事かも知れない。今までは姉さんに迷惑が掛からない様、姉さんの手を煩わせないよう心掛けていた。前世の記憶があるからこそ、まだ中学上がったくらい

の年齢で、子供一人を養うと言う事がかなりの無茶だと言う事が分かる。そして、俺自身、
……姉さんの世話をする事で、円夏が居ない事を紛らわせようとしていた。
バカな選択だ、と内心苦笑する。円夏と姉さんを重ねようとしてるなんて、その人自身を見ていない事だ。
『〝自分〟なんか持たない』って決めたのになぁ」
今までの自分を否定する。それもまた壊す事と同意だ。そして、それは同時に、後戻り出来ない道に進む事になる。
……例えて言うと『男の人生の墓場』みたいなッ！
「あ、あのっ……！」
「ん？　何だ？」
呼ばれたので、強制的に意識を戻す。
「だったら、私に見せて。お姉さんの意思に従わない貴方のやり方を」
今日、何度目かの呆けた顔を更識さんに見せた。そして、言われた事を理解し、
「――ははっ」
思わず苦笑が漏れた。
「な、なにっ……？」
「ああ、悪い。　ちょっと色々考えてたのが可笑しくてな」
こうお願いされちゃ断れない。覚悟はまだ中途半端だが、取り敢えず腹は括れた。
……姉さんは大丈夫。もう立場もあるし、俺と言う重荷が取れればもっと好きな事をやっていける。なら自分の選択を、自分自身の選択をしよう。
……負けるのは、やっぱヤダよな。
オルコットにも、亮斗にもだ。ならどうすれば勝ちに行けるかを考え、
「なぁ、更識さん」
「な、なに……？」
黙っていた俺が急に話しだしたからか、何時もの様にビクつきなが

らも答えが返って来る。
「ＩＳ学園の生徒会長って、代々一番強い人が務めるんだったよな？」
姉さんが第１期生だからか、何時の間にかそんなルールが出来たらしい。
「そ、そうだけど、――貴方、まさか……！」
少女の驚愕の視線を受けながらも、俺は続きを言う。
「強くなりたいなら、強いヤツに教わるのが一番のコツだろ？」
実践式なら尚の事良い。何故ならＩＳでの訓練も出来るかもしれないのだ。
「っと、更識さんにはちょっと世話になったな。　手伝いが欲しかったら何時でも貸すぞ……しばらく世話になるしな」
「へ？　わ、私にも……？」
「おう」
……この子、確か未完成とはいえ専用機を持ってるんだよなぁ。
思いついたプログラムとか、やっぱり試してみないとどう動作するのか分からないし。
……ＩＳを組み立てるってのも面白そうだよな。
ちょっとだけ、この学園に来れて良かったと思った。

後に聞いた事だが、この時の俺はイイ物見つけたような表情をしていたそうだ。

戦いに向けて2

――翌日、早朝

朝食を摂り、何時もの様に整備室へと向かう更識さんと、それに付いて行くのほほんさんと別れ、俺は目的の場所へと歩く。

「っと、此処か」

目の前にはちょっと豪華な扉――生徒会室の扉だ。場所は更識さんに聞いたのだが、教えてくれなかったので、のほほんさんに聞いた。

……まさか、のほほんさんが生徒会役員だったとは……。

失礼と言っちゃなんだが、役に立ってるのか心配になった。だって、今日も会長は仕事しているのに、あの子だけのんびりと朝食食った後、更識さんに付いてったし。

「まあ、いっか」

今は他人を気にしていられる余裕は無いのだ。

ドアをノックし、向こう側から女性の声(まあ当たり前なのだが)で入室許可が下りる。

入ってまず目に入ったのが、二人の女子生徒だった。どちらも無改造の制服を着ており。一人は正面の一番大き目の机に座った、水色の外はねしたショートの女性――と言うか、入学初日に出会った更識さん似の妹ジャンル系エロゲ先輩。もう一人は黒髪の三つ編みで、メガネを掛けた女子生徒。リボンの色から3年生だと察する。

後者の人物は、見た目から仕事が出来る印象の通り淡々と書類仕事をしているのに対し、もう一人の女子生徒は、結構書類が溜まっており――なんつーか、真っ白に燃え尽きていた。

……取り敢えず、話が通じそうな人。

「初めまして生徒会長。　織斑一夏です」

そう言って、黒髪の方に話しかける。

「はい。はじめまして、織斑一夏さん。　貴方の事は妹から良く聞きます」

「妹、と言うと……？」

「本音の事です。　私は布仏(のほとけ)虚(うつろ)、生徒会会計をしております。　―

―それと、会長はあちらです。……先日お会いになられたかと」
「ですよねー」
一類の望みを賭けたが、どうやら座り間違えじゃないらしい。
……と言うか、俺の周りの姉系は全員優秀だな。
姉さんに始まり、束さんも性格はアレだが天才だし、のほほんさんのお姉さんに、遠見の姉さんの弓子さんもＩＳ学園に勤めてたっけ。
弓子さんだけなんかショボイが、努めている場所がＩＳ学園だ。普通の高校教員とはレベルが違う。
「（まあそれはさて置き）――布仏先輩」
「下の名前で構いませんよ。それで、何でしょう？」
堅苦しいかと思ったら、意外と柔軟な思考の持ち主だった。今度から敬意を込めて虚先輩と呼ぼう。
「会長、なんで腐ってるんですか？」
さっきから椅子に座って、虚空を見つめて呆けている。入学初日の時とはえらい違いだ。生気も、エロ気も、胡散臭ささえ全く感じない。
「――――アレは、５日前の出来事でした」
「行き成り回想?!　しかも入学初日かッ?!」
急に昔語り口調になった虚先輩に即座に突っ込んだが、語りは止まらなかった。

◆

――――５日前・生徒会室
「だ、大丈夫かしら虚ちゃんっ!?　服と髪は乱れてない?!　あっ！あと部屋も綺麗!?　簪ちゃんに、『お姉ちゃんなのに整理整頓も出来ないなんて……』って呆れた視線で見られたりしないかしら!?　そ、それにかかかか簪ちゃんが埃とか吸って咳込んだりしないかしら?!」
「大丈夫ですよ、お嬢様。　何処も乱れてませんし、生徒会室も午前から授業サボタージュして、隅から隅まで綺麗にしたではありませんか――ＩＳ使って。　埃取りから、水拭き、空拭き、更にはワックス掛けまで。　……正直言って、幾らなんでも職権乱用だと思います」
今、私の前で生徒会長席に座っているお嬢様は、今までに見た事が

無い程緊張していた。まあそれはその筈で、数年も絶縁状態だった妹様と、生徒会長と生徒としてではあるが話しをするのだ。
と、その時、部屋のドアがノックされた。
……来ましたか。
「お嬢様」
「何⁉　ＩＳの事なら大丈夫よ！　簪ちゃんの事なら私にとっては最重要事項、私＝生徒会長、だから問題ないわ！　――あっ、そろそろ簪ちゃんが来るから、茶を淹れといて！」
どうやらノックに気付いていないらしい。取り敢えず、お嬢様の状態を落ち着かせた方がいいと判断し問い掛けに応じる。
「分かりました。　それとお嬢――いえ、会長」
「何⁉　今最終確認の最中なんだけどっ!!」
「更識さんが、既にお目見えになっています」
「へっ……？」
会話のドッチボールが早すぎて声を掛けるタイミングを逃し、ドアを開けたまま止まっていた妹様とお嬢様の視線がぶつかり、
「～～～～っ、や、やり直し！　もう一回入室から!!」
「え？　あ、うん……」
言われ、一度退出しドアを閉めた。それと同時、溜息が出た、私から。
……本当に、昔から妹様が絡むとダメダメになりますね。
そう思っていると、再びドアがノックされた。
「――どうぞ。開いてるわよ」
「失礼します」
お嬢様――否、会長の入室許可がおり、再び妹様が入って来る。その目は、先ほどよりも冷めていた。
……ああ、また溝が広く、深く……！
「――1年4組所属、更識簪です。　行き成りの呼び出しですが、私に何か用でしょうか？」
妹様が他人行儀で話したら、今度はお嬢様が笑みを浮かべながら固まった。

そのまま数秒だろうか、それとも数分だろうか？ただ沈黙だけが部屋を支配していた。その状況を破る為、私が一度、二人の意識をこちらに向けさせる。
「んんっ、――会長」
「っ！　……ええ、ごめんなさいね？　入学初日から呼び出してしまって」
「いえ。　……それで、何の御用でしょうか？」
漸くといった感じで会話が進む。
「かんざ――更識さんを呼んだのは他でもないわ。　貴方のルームメイトに関してよ」
「ルームメイト？　それがどうし――」
ました、と妹様が言い掛け、止まった。今年は例外が二名入学している事を思い出したのだろう。
私的意見としては異性の方をルームメイトにする事には反対なのだが、〝更識〟として考えると、登校時と下校時に人員を裂かなくてはいけなくなる為、他の場所のカバーが効かなくなる恐れがあるのだ。
……幾ら〝更識〟でも、限界はあります。
だからこそ、すぐにでも寮に入って貰う必要があるのだが、彼等の分の部屋がまだ出来て無いのだ。
……見通しが悪いのか、動くのが早いのか、――その両方ですね多分。
「――私のルームメイトは、どちらですか？」
やはり妹様は賢い。即座に、この場で納得できないと言っても無意味だと理解したのだろう。
……それが、悲しい事でもあります。
別の言い方をすれば、諦めが早いとも言える事だ。
「理解が早くて結構。　貴女のルームメイトとなるのは、織斑一夏君よ」
「っ……話しは、以上ですか？　私はこれからＩＳの整備がありますので失礼したのですが」

嘘だ、と内心で声にする。
まだ妹様のＩＳは完成していない。それに、自分のＩＳが未完成のままの原因である人物と一緒に暮らす事になるなど、ハッキリ言って酷い話しだ。
……それもこれも、〝更識〟に産まれた故、でしょうか……。
「いえ、もう一つ話があるわ」
「え？」
……え？
妹様と同じタイミングで、私も驚いた。お嬢様の事だから、言いたい事を結局言えず終わるのかと思っていたのだ。
私と妹様が見つめる中、お嬢様は口元に扇子を広げた。其処には『傾聴』と表示されていた。この扇子、ただの扇子では無く、第三世代のイメージ・インターフェイス技術を使ったマクロサイズディスプレイの扇子だ。無駄に凄い技術を使った作品である。
……と言いますか、それが妹様の感情を逆撫でする事に気付いているのでしょうか……？
お嬢様は気付いてないのか、目の前の妹様の表情がかなり蒼褪めている事に気付かず、机の上に置かれたノートＰＣを操作し、
「勿論、簪ちゃんの損にはならないわ。――コレ、見なさい」
そう言って、目の前のノートパソコンを妹様の方に向けた。私も気になったので、机を回り妹様の後ろに立ち、ディスプレイを覗く。
どうやら一つのアプリが起動中の様で、其の画面だけが表示されており、ソコに映っていたタイトルは、
「『刀砲紅魔館Ｒｅｖｏｌｕｔｉｏｎ』？」
刀砲。確か、お嬢様が此処最近、エロゲそっちのけでプレイしているゲームだった気がする。
だが、これがどうしたのかと思う前に、妹様が飛び付くようにノートＰＣを覗きこむ。
「こ、コレッ！『刀砲Ｐｒｏｊｅｃｔ』の完成未定の作品……！」
「ついでに、調べた限りでの情報を纏めたヤツが、コレね」
一冊の薄い冊子が差し出され、妹様が奪い取る様に受け取り中身を

確認する。私も後ろに居るので、自然と見る事になり、
……なんですかコレ。全ステージ３Ｄに、《後付装備》の換装システム？それにこの主人公の『博麗千』とサブ主人公の『ター姉さん』って名前、どう考えても織斑教員と篠ノ之博士ですよね？と言いますかこのゲーム、明らかに最新の容量が大きい奴じゃないとまともにプレイ出来ないじゃないですか。
「マルチ・ロックオンシステム……！」
小声で、妹様が驚愕の声が聞こえた。
……そう言えば、妹様が設計した《打鉄弐式》には、誘導ミサイルが搭載される予定でしたね。
そして、ゲームとは言え３Ｄ――つまり三次元だ。このプログラムを元にすれば、弐式の武装開発が進展するだろう。
「ど、どうしてお姉ちゃんが――」
言って、妹様が止まった。
……まさか、お姉と言ってしまった事に気付いて……？
どんだけ頑固なのだ、この姉妹。
もう一度咳払いでもして話しを進めようと動いた時、妹様が首を横に振り、少し思案し、
『刀砲Ｐｒｏｊｅｃｔ』ＺＵＮ主代理人「ＩＫＡ」……」
一つの名前を口にだす。
……このアプリの製作者でしょうか……？
何ともツッコミ所がある名前だ。ＺＵＮ主代理、つまりはＺＵＮ主と言うのが本当の製作者か企画者なのだろう。そして今この場に出した事と、『損にはならない』と言った事から、ＩＫＡとは織斑一夏さんの事を差していると判断出来る。
その予想は間違っていなかったらしく、お嬢様が再び扇子を開いた時に、その表面には『正☆解♪』と書かれていた。
「織斑先生からは、『扱き使って良いぞ。寧ろ余計な事など考える暇など与えさせるな！』って、完全パシリ宣言も貰ってるわよん♪」
……声真似、上手いですねお嬢様。
いや、お嬢様の声真似が上手いとかはどうでも良いが、織斑先生の

発言は本当に仲が良いのか分からない。厳しい事は知っていたが、まさか身内にまで厳しいとは思っていなかった。
……ただ、手伝いを妹様が望むとは思えません。
なにせ、お嬢様が一人でＩＳを制作したと情報信じ、お嬢様に追い付こうと自らも一人でＩＳを作ろうとしている方なのだ。
――だが、そんな彼女の想いを、
「簪ちゃん」
……ダメですお嬢様……っ！
いけない、と思った。長年の付き合いから、この先何を言うかが予想出来てしまった。
「他人を頼るのは、悪い事じゃないわよ？」
お嬢様は呆気なく崩した。
……最悪ですよ、お嬢様。その発言は最悪すぎます。
「――なん、で……」
声が漏れる。
声を上げたのは目の前に居る妹様だ。普段はたどたどしい感じで話すのとは違い、明らかな怒気と苛立ち、それと哀しみを含んだ声だ。
「なんで、そんな事言うの……っ?!」
声を上げて、目の前に居る人を――姉を糾弾する。
「誰にも頼らず、一人でＩＳを組んだお姉ちゃんにそんな事言える資格、ない!! 私の、――私がやろうとしてる事に、口を出さないで……ッ！」
妹様の頬を伝っているモノがある事に気付く。涙だ。だがソレを拭おうとせず、最後の一言を、
「――私の事なんか、放って置いてッ！」
言った。言いきり、静まりかえった生徒会室の中で、妹様の荒い息だけが聞える。
そんな中、私は妹様の前に居る人物を見た。
「あ、っと、その、か――」
お嬢様は、悲愴な顔を妹様に向けていた。
「ッ、……失礼しますっ」

妹様が踵を返し、一目散にドアに向かって足早に去っていく。
……あ。
「妹様……！」
「ごめ、んなさい、虚さん。……ルームメイトの件は了解しましたと、お――生徒会長に伝えて下さい」
呼び止めるものの、それだけ告げると、素早くドアを開け足早に部屋を出て行った。
「……いえ、そうではなくて、お嬢様のノートＰＣを持って行かないで下さい、と言おうとしたのですが……」
私の声は、虚しく室内に響いただけだった。
溜息を一つ吐く。
お嬢様は天才だ。だが、その天才であるが故に、物事の判断基準が高く。逆に常人の考えが、思考が、気持ちが分からない。
……全くお嬢様は。人心把握は優秀な筈なのですが……。
また一つ溜息を吐き、何時までもこうしていられないと気を取り直し、会計用の机に向かい、腰掛ける。
「――これで宜しかったのですか、お嬢様」
「……」
お嬢様から答えは返って来なかったが、沈黙を了承と受け止め話を続けた。
「確かにこれから先、妹様が社会に出て行けば、お嬢様に頼ることなど出来なくなるのは必然です。ですから、敢えて反骨心を煽って成長させるやり方は理解できます。――ですが、もう少し本音――あっ、妹の事じゃない方です――で語る事もまた、視野を広げる切っ掛けにもなります」
「……」
「会長の《ミステリアス・レイディ》も、元のＩＳとネット内で有名だったプログラマー、それと開発スタッフのご協力があって完成まで漕ぎ着けたと言う事実。お嬢様が御一人でＩＳを作り上げたと言うのは、ロシア政府のプロパガンダだと言う事ぐらい話しても宜しかったのでは……？」

そう、幾ら頭が良かったと言って、一から何かを創り出すのは数年の歳月が必要だ。《ミステリアス・レイディ》を造り上げるのだって半年は掛かったのだ。それも、元の機体にはそれほど手を加えず、《ミステリアス・レイディ》の特殊武器『アクア・クリスタル』の製作だけで、だ。

「……」

「……会長？」

反応が無いので気になったので、正面に周り、

「お嬢様……！」

悟った。

「気を失ってやがる……ッ」

私の説教時間を返せと言いたくなった。

◆

――時は戻り現在

「と、こんな事があった訳です」

「自業自得じゃねーか、アホらしい」

率直な感想を言ったら、すぐ近くで胸を抑えのけ反る仕草をした〝物体〟があったが、軽く無視した。

……すっっっっげぇぇくだらねぇ……っ！

本当にこんなのに教えを請うて良いのか本気で悩む。だが、実力で言えば本物だろう。

……時間もあまり無い事だし、さっさと交渉に入るか。

決断したら後は行動だ。幾つか手段は考えたが、まず、現在無気力な人間にヤル気を出させる方法を考え、――携帯を即座に取り出す。

……殺る気を起こさせる方法が先に浮かんだ俺、もうある意味ダメかもしれないなぁ。

『――は、はいっ、さ、更識、ですっ』

「――あ、更識さん？今良い……？」

数度のコールで電話の先、更識さんに繋がる。声が聞こえた瞬間、

妹ジャンル系エロゲ生徒会長先輩の肩がピクリと震え、此方に意識が向いたのを感じられた。
『う、うん……えっと、お――生徒会長さんとの、交渉？は上手くいったの？』
生徒会長と言われた瞬間、件の人物は石の様に固まった。
……どんだけシスコンなんだ、この人。
「交渉はこれからだけど、初っ端最終プランで行くから協力してくれ」
『え……でも、そのプランって危険だからやらないんじゃ……』
やっぱりこの子、良い子だ。出来れば周りに染まらないで欲しいくらいに。
「色々面倒になったから手っ取り早くいく、――やってくれ」
『……分かった』
「頼んだ」
妹ジャンル系エロゲ生徒会長先輩の前に立ち、スピーカーをＯＮにする。そして、俺の携帯から、更識さんに事前に頼んだセリフが聞こえてくる。
『い、一度しか言わないよお姉ちゃんっ、わ、わわ私、お、い、一夏君と付き合う事にしたから!!』
「っ――！」
言い終わった所で通話を切り、すぐさまバックステップ。――先ほどまであった俺の後頭部の場所に、意識どころか生も刈り取らんとする断刀から逃れた。
「――へぇ、意外と出来るのね織斑君」
「……ども」
踵だけを伸ばした状態でしゃがみ込んでいる妹ジャンル系エロゲ生徒会長先輩――否、強者からの、淡々とした評価に言葉少なく答える。
目の前の人がやったのは単純で、机の端を持ち上げる様に握り、椅子から勢いよく立ち、後ろに下がる椅子を蹴り、そのまま後転しながら踵落としだ。それを一瞬の内に行った。見切れたのは、俺に向かって振り下ろされる踵だけだ。それ以外の行動は全く見えなかった。

……本気だったら、最後の踵落としも見きれなかったな。
様は〝試し〟だ。
「嘘とは言え、簪ちゃんと付き合っているなんてほざいた事は見逃してあげる。避けられたのは事実だしね。――それじゃあ対価と希望を聴こうかしら」
「言ったのは更識さんなんだが」
「簪ちゃんがそんな事言う筈ないじゃない！あれは強要されてたのよ!!」
……うわ、マジうぜえ。
こういう時、変に反論しない方が良いと判断。さっさと本題に入る事にした。
「対価は生徒会の雑用係になる事、俺の希望は――取り敢えずアンタとサシで戦えるくらいだ」
要するに、生徒会には入らないが雑用係として手伝う代わりに、ちょっくら強くしてくれ、と言う事だ。
それを聴いた妹ジャンル系エロゲ生徒会長先輩は、面白いと言わんばかりの笑み見せ、
「随分、思い切った事言うじゃない。５日前に会った時と比べてかなりの変化。寧ろ変態と言っても言い精神的変化」
「アンタの妹さんのお陰でね――ああ、気に入った事は認めるが、付き合いたいとかそんな事はないから安心しろ」
眩しいのだ。決定的に住む世界が違う。妹系だから頼られたら答えるけど、求められたら断る――そんな関係だろう。
「良いわ。その契約、受けましょう。――但し、半端は許さないわ。三日後の戦い勝ちなさい。例え勝ち目が無くても勝ちに行きなさい。それなら私は全力を持って答えるわ」
「上等。元々負けるのは嫌いなんだ。――で、まず何をするよ？」
「そうねぇ……」
宙を見つめ、数秒して考えを纏めると、妹ジャンル系エロゲ生徒会長先輩師は笑顔で、
「取り敢えず、戦いの勘を養いましょうか。具体的な訓練法を言うと、

五時間位私と戦いましょう――肉体言語で」
死刑宣告を言い放った。
「ええ、コレは決して簪ちゃんと電話越しでも話し合ってるの事の嫉妬でも簪ちゃんと同室だって事でも一瞬でも簪ちゃんとキャッキャウフフな関係を想像した憎悪でもないわ！戦闘訓練、戦闘訓練よ……！」
……早まったな、俺。

亮斗　ｖｓ　セシリア（上）

――月曜

時は既に放課後。本日はオルコットとクラス代表を決める為、６時限目の終業チャイムが鳴るのと同時、真っ直ぐに第三アリーナに入り、更衣室でＩＳスーツに着替え、

「遅い！」「遅いな」「遅過ぎる」

ピットで待ち惚けを喰らっていた。どれくらいかと言うと、箒が呟いた一言に便して三段変化するくらいに。

理由は極単純、ＩＳの搬入が遅れているのだ。

まあ、その間、俺はＩＳ《白式》にインストールするプログラムの最終確認をし、亮斗は週刊ジャムプを読み、箒は仁王立ちで腕を組んで静かに苛立っていた。

……試合しない箒が苛立ってるってのもなぁ。普通、立場が逆の状況だろうに。つか眠い。

この二日の総計睡眠時間が５時間しかなかったからだ。まあ、それでも眠る気が起きないのは、内心、この後のイベントを楽しみにしてたからだろう。

……眠いのに眠気が無いとはこれ如何に。

『お、お待たせしました二人とも！』

「っと、よーやくか」

「――後は実戦で、だな」

山田先生の声がピット内に響き、目の前のシャッターが開き始め、其処から似た様な形の、しかし非固定浮遊武装の位置が、それぞれ両肩と背部の二機が姿を現す。

『コレが御二人の専用機、木場君の専用機《黒式》と織斑君の《白式》です！』

「やっぱ似た名前だよなぁ？」

「お前の機体の名前考えるのが面倒だったんだろ、束さんが」

俺の言葉に二人が、あり得る、と呟きながら頭を押さえる。

と、今度は姉さんの声がスピーカーから聞こえて来た。

『何、頭を抱えている。　さっさと纏え。――全く、こんな余興にアリーナを貸し切ったんだ。くだらんやり取りで時間を潰すなバカども。まずは木場からだ』
「ういース！」
　そう言って亮斗が《黒式》の前に立ち、その身にＩＳを纏う。
「ど、どうだ？亮斗？」
「んー、なんつーか、《打鉄》と比べると感覚の広がりがえらい違いだな」
　そうだろうな、と《白式》の前に立ちながら俺はそう心の中で言う。
　不特定多数の人間使い、誰もが平均的に扱えるのが《打鉄》や《ラファール・リヴァイヴ》と言った量産前提の機体なのに対し、専用機とは、文字通りその人専用に調整された機体なのだ。一応前者の機体も、乗る人に合わせてのバランサーや出力系の調整は出来るが、専用機と比べたら雲泥の差だ。
　……と言うのが、エロゲ好き会長から教えられた事だったな。
　この二日の事を振り返っている間に俺もＩＳを纏っていた。無数のパネルが表示される中、視線は武装覧に向けられ――ズキリ、と胸の中心が痛んだ。
　……雪片弐型。雪片、か。
『二人とも装着したな』
　管制室からの姉さんの声で、意識を自身の内から外へと向ける。
「ウッス！」「はい」
　今は姉さんの影を気にする時じゃない。今は、目の前の戦いに集中するべきだ。
『事前に伝えてあった通り、まずは木場からだ。その後、１０分の休憩を取り織斑がオルコットと戦う。そして最後に織斑と木場の計三戦を予定している。　何か質問は？　あっても時間が無いから受け付けんがな』
「「（じゃあなんで聞いた?!）」」
『では準備に掛かれ。　篠ノ之は……今回だけサービスだ。　そのまま管制室まで来い。　織斑は公平を期す為、更衣室で待機だ』

姉さんの言葉を合図に、俺達はそれぞれの場所へと移動し始めた。

◆

「負ける事など許さんぞ、亮斗！」

箒の遠回しな声援が聞こえる。

「へいへい、この一週間の訓練を無駄にするような試合は見せねぇよ」

「むっ、とと当然だ！」

「はは、……じゃあ先、行かせてもらうぜ、一夏」

「おう、ボロ負けして来い」

「言ってろ！」

そう言い、射出用カタパルトに足を運ぶ事に、俺（木場亮斗）は感慨深い気持ちになる。

……始まる。

約十六年。この世界で自分という存在を思い出してから約十三年。漸くと言った感じだ。

自分は転生者だ。それも、俗に言う『神様転生』と言うヤツ。死んだ事に色々悩んだが、その事も『インフィニット（こ）・ストラトス（世界）』へ転生させてくれると言う事と、転生特典をくれると言う事で割りきる事にした。

俺が願った『特典』は２つ。

一つは『原作に関わって行ける事』。これなら、あの天災（篠ノ之束）にも怪しまずにＩＳに乗れると思ったからだ。それに、原作の女性キャラは美女・美少女ばかりだし、多少性格に難が有っても、それさえ何とか出来れば良い女になるからだ。

もう一つは『戦いに関する才能』。コレは文字通り、戦いに関する事の才能だ。

初めは『身体能力強化』とか『オリジナルＩＳ』とか考えたのだが、もともと完璧主人公とか嫌いな性質だし、幾ら女好きだとしても、篠ノ之束あの性格は遠慮したかったので、変に目を付けられないこの二つにした。

それに、一から子供をやり直すなら、努力して体を鍛え、強くなる方が自分の好みだったからだ。だから二つ目の特典は、言わば〝手に入らないモノ〟を補う感じで頼んだのだ。

そして転生。

初めは色々苦労した。大人と子供では思考の違いもあるし、体も出来てないので、つい大人の考えで動かし体の節々を痛めまくった。後になって成長期に入ると、筋肉痛が無い日など無かったのも良い思い出だ。

……まあ一番苦労したのが、子供のフリだがな。

そんな事はさて置き、5歳の頃、俺は初めて原作キャラに出会った。その人物が箒と千冬さんだった。

出会った場所は、箒の実家が経営している剣道場。当然、狙ってやった事だ。嬉しい事に、箒とは『織斑一夏』と出逢う前だった。当然話しかけた。その後、周囲にトラップが仕掛けられる様になった。でも諦めなかった。

初めは余所余所しかった箒に何度も声を掛け、トラップが悪質化し、次第に一緒に打ち合うようになり、トラップが減り、道場が無い日も一緒に遊ぶようになった時、千冬さんと束さんに、某エイリアンの様に連れられて来た一夏と出逢った。――確か、小学校に上がった直辺りだった気がする。

アイツとの出会いの印象は、『イケメンの将来を約束されたショタ』『良く笑ってる奴』と言う印象だった。通ってた生徒の女性陣が構うようになり、ソレに嫉妬した幼稚な男の子陣にイジメられ、ハブかれ、更にソレを見た女性陣が一夏を構うと言った悪循環の中、アイツはニコニコと笑いながら、

……ただ黙々と、自分の体を苛めるように基礎だけを続けていたんだっけ。

明らかに異常だった。しかもソレを数名――箒と束さんのお父さんの柳韻さんに、千冬さん、束さん以外に知られない様にしていたのだ。俺が気付いたのは、単に一回戦ったからだ。

……戦った理由は、まあ、ただの嫉妬だ。

後から来たのにあっという間に仲良くなって、俺でも2ヶ月ちょっと掛かった箒の笑顔を向けられるようになって、――前世でも出した事が無かった、殺意と言うモノを向けたのだ。

だから、行動は早かった。

まず男子陣と結託し、教師陣にバレないように小学校の体育館の周囲を見張らせ、一夏が何時も持っていた小物を入れているケースを盗みおびき出し、稽古と称してアイツをボコる。という段取りだった。

初めの男子陣との結託は上手くいき、対戦する相手決めも俺に決まった。その次の小学校の体育館を利用するのも、戸締りが甘い教師の日を選択して何とかクリア。一夏を千冬さんにバレないようにおびき出すのも成功した。

体力の差は無し、使う木刀も言い訳の為同じ物。剣道の経験で言えば、俺の方が僅かに早かったぐらい。だが俺には、転生特典で『戦いに関する才能』と言う力があった。だから上手くいったと思った――最後の最後、俺との一戦以外は。

互角だった

試合内容は、終始俺が攻めでアイツが防御一辺倒だった。なのに、仕留めきれなかった。何度打ち込もうとも防がれ、防ぎきれなくて体に打ち込まれ、痣ができ、斬れて血が出てこようとも、アイツはずっと俺を見続けていた、

――嗤った顔で。

その時悟った。コイツはずっと笑っていたんじゃない、この顔（嗤った顔）しか出来ないだと。それ程の出来事がコイツに遭ったのだと。そして、俺の持つ〝ちっぽけな力（転生特典）〟に追い付ける程、――血が滲む所じゃない、それこそ体を壊す程の鍛錬を自分に課していたのだと。

それに気付いた瞬間、なんだかあまりにも自分がしている事が馬鹿らしくなった。

……コイツは〝主人公〟じゃない、って理解しちまったんだよなぁ。

だから、この茶番は終わりにしようって思って構えを取り直し、アイツも構えを取り直し、いざ――、

……って時に、しびれを切らした低レベル精神組が木刀持って乱入してきて、俺と一夏が即席コンビ組んでそのまま大乱闘。一夏の帰りが遅い事に気付いた――って言うか、お腹が空き過ぎて苛立った千冬さんに制圧されたっけ。

懐かしいが、改めて思い返してみると奇妙な縁だ。戦いから生まれた友情なんて、なんてジャンプ臭漂う関係だ、と亮斗は思う。だが、

……アイツとつるんでると、飽きねぇし。

だからこそ、これからもバカやって、面倒事押し付け合って、頼って頼られて、――これからはＩＳも絡んだぶつかり合いも増えて来るのだ。

……そう言えば、あの時の決着、結局勝負付かずのままだったんだな……。

そいつはいけない。だからまあ、取り敢えず、

「――まずは目の前のケリを付けてからにするかね。なあ？　セシリア……！」

ピットから飛び立ち、不慣れな飛行でセシリアの前まで飛ぶ。

「……この一週間、ずっと思っていたのですが。――貴方方の話しの展開が理解出来ませんわ！」

まあそうかもな、と亮斗は思う。

……寧ろ、一週間で会話に混ざって来れるのほほんさんの方が異常……！まさに『女子高生は異常』!!

そもそも学園が異常だった、と思い出し。思考を冷静にする。

「さてと。……悪かったな、女性との逢引なのに遅れて来ちまって」

「……そうですわね。　時間も押している事ですし、早速ダンスを始めましょうか？　――もっとも、私の一方的な輪舞曲（ロンド）で終わるかもしれませんが」

「ククククッ、言うなぁ。　なら、俺の演武とで舞闘祭とでも行くかい……？」

『両者共に良いようだな？』

俺達の口上にケリが付くのを見計らった様に、耳元に管制室から通信が届く。

「私の方は何時でも」
「俺も良いぜ」
『よし！　――ではこれより、一回戦、オルコット対木場を始める！』
「その真新しいＩＳ、蜂の巣にして差し上げますわ！」
「やってみろよ、英国淑女!!」
『――始め!!』
試合開始の合図と共に、両者が動いた。
二人が最初に取った行動は、攻撃と移動に別れた。
セシリアは己の領域内から、得意武器であり、《ブルー・ティアーズ》の主力武装の大型レーザーライフル『スターライトｍｋ―Ⅱ』をコール。同時、亮斗へ向けて構える。
一方、亮斗は武器を呼び出さず、猛スピードで、ただ真っ直ぐにセシリアに突っ込んだ。
「速い!?」
「うお、危ね!?」
それに気付いたセシリアがすぐさまトリガーを引き、銃口からレーザーが放たれる――が、照準が定まっていない攻撃だったのと、亮斗も回避の動きを取った為に、あっけなく避わされる。
「っく、今度こそ……！」
外した。
ただそれだけの事なのだが、自尊心の塊であるセシリアにとっては、『ド素人』『男性』『入学初日から散々コケにしてくれた男』である人物に初撃をかわされたのは、プライドをいたく傷付けられたも同然なのだ。
その屈辱を晴らさんと、さらにトリガーを連続で引くが、
「ははっ！　どう、したよッ！　当てる気あんのかっ!?」
全て避けられた。――いや、シールドエネルギーは削れているので、当たってはいる。ただクリーンヒットは無いだけだ。
「っく！何故当たりませんの?!」
「自分で、考えろよッ、代表候補生!!」
苛立つセシリア。対する亮斗も煽って入るが、心臓の鼓動は速く、

内心では物凄く冷や汗を掻きまくっていた。
そもそも、なぜＩＳに関する素人の亮斗がセシリアの狙撃を避けられるのかと言うと、亮斗の持つ『戦いに関する才能』だ。その〝才能〟が、最初の行動でセシリアの感情を揺さぶり、狙撃の狙いが付き易く、かと言って近づき過ぎない微妙な距離での行動を心掛け、更に常にセシリアの正面に立ち、
……見える見える、流石〝ハイパー〟の一文字が付くセンサーって事か……！
ハイパーセンサーを最大望遠にし、セシリアの指の動きを常に視ているからだ。
◆
――管制室
「――と言う事だ」
先程までの説明を、千冬が語った。もちろん転生だとか、転生特典だとかは知らないので先天的なモノと言う説明だったが、あながち外れても居ない説明だ。
対して、それを聞いた二人の反応はと言うと、
「はぁ～凄いですねぇ、木場君」
「ふん、亮斗ならまあ確かに出来ない事も無いと思ったがな」
一人は素直な関心。もう一人は微妙におかしい日本語だった。
……心配なら、素直に態度に出せばいいだろうに、箒。
千冬にはバレバレだった。
「でも、何で木場君は武装を展開しないんでしょうか……？まさか、武装の展開の仕方が分からない？」
「なっ！ちふ――織斑先生！亮斗にアドバイスを」
箒の言葉を、睨む事で止める。山田君の懸念も無い訳でも無いだろう。事実、搭乗回数二回では、幾らサポートシステムが起動していても武装展開に時間が掛かる事ぐらい分かっている。
だが、違う、と千冬は判断している。
……アイツの機体は、まだ一次移行（ファースト・シフト）すらしてない。
最適化処理を終えた状態と、終えていない状態ではかなりの差があ

る。もし、今の段階で武器を振り回していたら、一次移行をした後に感覚のズレが起きる。そのズレは戦いにおいて決定的な隙となる。
それ以外にも、ＩＳの動きに慣れる事と、戦闘勘を養う事も含まれてる事だろう。
……まあ、一番初めに考えられるのが、束が一次移行しないと武装展開出来ないようにしたか、だな。
身内が敵と言う状況も中々無いだろう。だが、と千冬は心の中で付けたし、
……出し惜しみは止めておけ、オルコット。貴様の目の前に居るのはまぎれもなく戦士だ。
そう思っていた時、画面の向こうの戦場は動きを変えた。オルコットが、機体の非固定浮遊武装の下側に付いている武装を分離したのだ。
「イギリスの第三世代ＩＳ《ブルー・ティアーズ》。最大の特徴は、名の由来にも成っている特殊兵装『ＢＴ兵器』です」
「素直にファンネ」
「ソレ以上、言っちゃダメですー！」
山田君にダメ出しされたので言い留まったが、実を言うと、ＩＳ委員会の議員達間で水面下の話題になっているのだ。
……イギリスはこれから先、ＳＥＥＤ系に行くのかＯＯ系に行くのか、とな。
割とどうでも良い事で盛り上がってるＩＳ委員会は、本気で大丈夫なのか不安になる。
「???」
そして、隣で疑問顔の箒に少し癒された。
……ま、すぐに染まるんだろうな。
正面モニターに映る光景を目にしつつ、その実、試合時間を見る。試合開始から１５分は経過している。
……そろそろか。
そう思ったと同時、モニターに映る木場が勢いよく啖呵を切り、ＩＳがその想いを反映するように姿形が変化した。

亮斗ｖｓセシリア（下）

――第３アリーナ

試合は、最初の展開と全く変わらず、セシリアが攻めで亮斗が守りと回避という様相だ。

だが、観客は開始時と違って固唾を呑んで見ていた。なにせ十分過ぎた今でも、代表候補生が素人を未だに落とせて居ないのだ。それどころか、次第に亮斗の動きが良くなっていく事に気付いている者も居る。

……また当たりませんわ……！

その事実を一番実感しているのは、他ならぬセシリアだ。

最初は小手調べで狙撃だけだった。ソレがあまり当たらなかったので、今度はブルーティアーズによる全方向からの攻撃に切り替えた。だが、

「ちょこまかとっ!!」

今度は自分を中心に円周軌道を描き、常に自分の死角に入ろうとしている。

ハイパーセンサーがあるので死角は無いが、それでも数コンマでも見失う事は、ＩＳの速度を考えれば絶対的な隙になる。

……今、この場でそんな隙を見せれば、私が負ける……！

そう、負けるのだ。まだ総合操縦時間が一日以下の男に、２年以上も訓練に費やしてきた自分が、だ。

……そんなの、認められませんわ……ッ！

認めるわけにいかない。もはや相手が男とかいう問題じゃない、――負けられないのだ。国を背負う代表候補の一人として。

「戻りなさいッ！」

命を下し、攻撃中の全てのビットを一度機体に戻す。その行動を訝しんだのか、相手も――木場亮斗も動きを止めた。

……こういう所は、随分とまあ紳士です事。

攻撃してこなかった事に感謝しつつも、甘い事だ、と矛盾している感情を抱きながら、一度深く息を吸い、静かに吐く。

「――認めましょう、木場亮斗。幾分か私に驕りがあったとは言え、全くの初心者でありながら、１０分も持った事は褒めてあげますわ」
コレは本心だ。
「そりゃどうも。まだケリついてねぇのに、かなりの高評価で感動しそうだ、――漢泣きして良い？」
……お、漢泣き？一体、どういう泣き方ですの……?!
いや違う、と意識を切り替える。今はそんな事を考えてる場面では無い。――後で見せて貰うが。
ですが、と前置きして。
「この後、もう一方のお相手も差してあげなくてなくてはいけないので、――申し訳ありませんが、此処らで幕引きとさせて頂きますわ！」
対し、まだ一度も攻撃どころか武器すら展開していない男は、はっ、と息を吐き捨て、
「――見縊ってんじゃねぇよセシリア・オルコット！まだ勝ってもいねぇのに次を考えてんのか……！」
此処に来て、初めて闘志を剥き出した。
ビクリ、とセシリアの肩が揺れる。
……この男……。
セシリアが今まで出会った男とは、全くもって知らない性格だ。
そもそもにおいて、セシリアの周りに居た男と言うのは、母にいつも頭を低くして接していた父。両親の死後、オルコット家の財産目当てで寄ってきた俗物。そして、自分の後継人になろうと言ってくる、――体（おんな）目当ての色魔ぐらいだ。だが、目の前に居る人物は違った。
「本気出せよ、何時までも高い所から見下ろしてないで、全力で俺を潰しに来い！お前が今まで磨き上げてきた実力も、それ以外の全ても俺にぶつけて来い！――その上で、俺はお前を倒すッ!!」
……真っ直ぐに私を見ている。
口が悪く、態度も悪く、正直言って良い印象は持っていない――が、身体でも莫大な遺産でもなく、一人の戦う者として自分にぶつかって来ている。ならば、
……英国の淑女たる者、無粋な姿は見せられませんわ！

「そう言うのなら、私に勝って見せなさいな！」
エネルギーをチャージし終わったビットを展開する。
自分はまだ、ＢＴ兵器の性能を１００％引き出せていないし、ビットとスターライトの同時操作さえまだ習得できていない。が、
……それが、どうしたというのです！
向うは自分を越え、勝ちに来ているのだ。ならば、やるべきことは一つ。
「勝ちに行きますわ！」
「やってみろよ!!」
瞬間、木場亮斗のＩＳが光を放つ。
……これは、まさかッ！
「一次移行（ファースト・シフト）?!貴方、まだ初期設定すら終えてない機体で戦っていたのですか!?」
言ってる内に光が治まり、機体の各所がより滑らかになり、背部の非固定浮遊武装は折り畳まれた翼をイメージしたスラスターに。機体色も灰色から黒を基調とし、所々に銀のラインが入った配色へと変化する。
……これが、本当の《黒式》ですか！
そんなセシリアの驚愕を余所に、木場は始めて武装を抜いた。刃渡りは2メートル程、柄を含めれば2．5メートルになる両刃の馬上槍だ。すぐさまコアネットワークを通じ、データが転送されて来る。
「ルガーランスⅢ、ですか。……ⅠとⅡを見た事が無いのですが」
「俺も知らん。束さんにでも聞いてくれ」
数少ない情報から、ソレがどういった武器かを悟る。
……篠ノ之博士謹製、と言う事ですか。
此処近年は活動しているといった事例は――表向きは聞いた事が無い。が、どうやら二人が舞台に上がった事を期に再び動き出しているらしい。
だが、今はそんな事よりも眼前の〝敵〟を見る。一次移行をした機体。戦意のある操縦者。展開した武装。お互い、まだシールドエネルギーはある。試合はまだ続いてる。

……なら、戦うまでですわ！
セシリアが再びライフルを構え、亮斗は両手でルガーランスⅢを持ち、右脇の構えを取った瞬間、両者は再び動いた。
◆
「おぉぉぉッ！」
亮斗は突き進む。試合開始直後と同じ様に、今度はセシリアへと一直線に。違いがあるとすれば、今度は本気で斬る為に。対するセシリアは静かに、冷静に、そして的確に此方に照準を定め――、
「――っ！」
脳からの危険信号に従い、前につんのめるようにして姿勢を移動。直後、上空の正面。斜め上の視界外から、体の中心があった場所に細い光が一本走った。狙撃すると見せかけて、視界外からの攻撃。そんな事が出来るのはＢＴ兵器以外この場にはない。
立て続けに１本、２本。
「くっ……！」
更に２本、３本、４本と上下左右から狙撃が来る。ソレを時に急制動で、横ロールで、上下の急下降・急上昇で避け、掠り、時に左腕を楯にしながら進む。
「ははっ」
……やる……！
そう評価する。それしかない。何故なら、ハイパーセンサーで捉えたセシリアの表情は、真っ直ぐに俺を見、スターライトの銃口が一時も外れないのだ。
……止めは自身のある狙撃、ってか！
ビットで牽制と削りと誘導。最後は自分が信頼できる武器で決める。セオリー通りであり、実にシンプルだ。シンプルだからこそ、深く考えず、〝ただやれば良い〟。
……リアルは手ごわいなあ、オイ。
原作やアニメ、二次小説なんかとは全然違う。違うからこそ、
「燃えるなッ！」
顔面狙いの一撃を、反時計まわりのロールで回避。回避先を狙って

撃たれた一撃を、ルガーランスを振り、遠心力で更に回って回避。回転の最中に、ルガーランスを左脇で刺突に構え。

……此処!!

更に加速。

「愚直ですわね!!」

そりゃそうだ、と心の中で答える。何せどんなに動き、速さで撹乱していても、真正面から突っ込んでいるのだから。

極限の集中の中、意識が加速し、相手の銃口に光が発生するのを認識する。あとコンマ何秒で撃たれるだろう。自身の加速力を考えれば、相手との距離は4～5メートルは足りない。

「黒式を舐めるなッ!!」

亮斗の意思に反応し、黒式がルガーランスに命令を送る。その命令を受け取り、ランスの切っ先から、鍔の手前辺りまで線が入り、――開く。

その姿はまさしく、

「砲塔?!」

セシリアが驚愕し、その形状の意味する事を悟る。

「しまっ――」

「遅ぇ!!」

上下に開いた刃の間にプラズマが奔り、レーザー砲が撃ち出される。

それと同時、セシリアのスターライトからもレーザーが放たれる。

両者が撃ったレーザーはすぐに衝突し、数コンマの拮抗の後、出力の違いから亮斗のがセシリアのを呑みこみ、そのままセシリアに向かって伸びる。

「っ――!」

寸での所で、セシリアは下方に落ちる事で回避に成功する。

その隙を逃さず亮斗が吶喊。狙える場所が顔しかなかったので、操縦者狙いは諦め、

「貰ったッ!!」

右の非固定浮遊武装を突き刺し、抉り、速度任せに切り裂いた。

通り過ぎ、右手でランスを振り払う勢いを利用して振り返り、――
接近警報が表示。直感的にルガーランスを眼前で構え、楯の様にし、
「ハッ!!」
「く――ッ!!」
衝撃が走る。セシリアが接近戦を仕掛けてきたのだ。そのまま鍔迫り合いの状態で止まり。
「ティアーズッッ!!!」
「グガッッ……!」
背後から非固定浮遊武装を撃たれた。
痛みと衝撃でランスを落としそうになるが、意識を繋ぎとめ、力押しでセシリアを押し返す。
……容赦ねェなッ!
まだ霞む視界の中、後ろに押し返したセシリアを見れば、既にナイフからスターライトへ武装を変換しており、此方に狙いを定めようとしていた。
だが、
……勝つのは俺だッ!!
すでにランスへのエネルギー充填は終え、砲塔の展開も終わってる。あとは、銃口をセシリアに向け、射撃命令を下すだけ。
そして、その通りに実行した。光が走り、セシリアを呑みこむ。
……これで……!
砲撃体勢のまましばらく待ち、相手の状況を確認する。終了のブザーは鳴っていない。と言う事は、まだ相手にシールドエネルギーが残っているという事だ。
数秒して、煙が晴れる。その向こうにセシリアは居た。
左右の非固定浮遊武装は無く、楯のように構えている狙撃銃はオシャカになり、脚部は所々装甲が剥がれ内部が見える。セシリアには大きな怪我な無いようだが、白い肌に、所々紅くなっている場所がある。恐らく内出血だ。それでも、その目の中の戦意は衰えていない。
素早く視界を走らせ、黒式の状態をチェック。
……チッ!――こっちはもう、エネルギがー少ねぇか!

だが、まだ戦える。まだ使っていないモノもあるし、もうちょっと確かめたい事があるのだ。
「なら、最後のぶしッ?!」
衝撃が走った。場所は左右。そう認識した瞬間、衝撃地点を中心に爆発が起きた。
『試合終了!勝者、セシリア・オルコット!』
管制室からの勝敗決定の報を聞きながら、亮斗は何が起きたのかを考え、一つの武装を思い出す。
……ミサイル型、忘れてたあ……。

◆

なんとも情けない終わり方をし、気落ちしながら、ＩＳの自動設定による浮遊落下の中、不意に近づいてきた存在に気付く。と言うか今、この場で飛べる存在など経った一人、セシリア以外に居ないのだが。
「意識はありますか?亮斗さん?」
「あるよ。……最後の狙撃はフェイクか?」
「いえ、両方本命でしたわ」
「クックック、中々に肝が座ってやがるな、オルコット。――完敗だ」
「いえ、結構ギリギリでしたわ、亮斗さん」
そう言って目の前に一枚の表示枠が映し出された。
……ああくそ、残り１３って、マジ僅差じゃねーか!
「て言うか、なんか行き成りフレンドリーだなオイ」
「え?!ええっと、わ、私を此処まで追い詰めた事の評価ゆえ、なの、ですが……だ、ダメでしたか……?」
最後の方、段々と尻窄みになって、不安げに聞いてきた。
……これがちょろインの本領か
でも実際には全然ちょろくなかった。どっちかってーとジャンプ系のノリだ。
……まあ金髪巨乳は嫌いじゃないが、『金持ち・お嬢様』系が入ると

面倒になるから遠慮したいなぁ。一夏にマジ惚れしてくんねぇーかなー。
　無理だなー、とすぐに答えが出た。原作の〝織斑一夏（主人公）〟なら、この後の戦いで奪う様に惚れさせるかもしれないが、この世界の〝織斑一夏（あいつ）〟だとフラグが立つかも怪しい。
　……っと、そうだ。一夏のヤツと言えば。
「この後、一夏と戦うんだろ？オルコット」
「セシリアで構いませんわよ？ええ、10……いえ、15分の休憩の後ですわね」
「んじゃあオルコット。一つ、アイツと戦う際の注意がある」
「何でしょう。――ああ、手加減はしませんわ。それと、セシリアとお呼び下さい」
　拘るなオイ。だが断る。
「――遠慮はするな。全力だ、全力で叩き潰しにいけ」
　俗に言う『全力全開』だ。『全力全壊』でも可。いや、寧ろ全壊にすればフラグが立つ気がする。
「やはり、貴方方の仲が良く分かりませんわね。……ですが、言われなくとも全力で向かい討ちますわ。ですので、私の戦いを活目して見届けて下さいまし」
　……公平を保つために、ロッカー行きだっつーの。
　けど一々構ってるのも面倒なので、適当に返しながらオルコットと別れ、俺は出撃したピットに入って行く。
「亮斗!!」
　入った瞬間。扉が開き、箒が入ってきた。
「おう箒。悪ぃ、負けた」
「バカ者！何と言う無茶な戦い方をする!!」
「ヒデぇ言い草だなオイ」
　一定の高さまで来ると、黒式が自動で解除され、左手首にガントレット状になった。
　……やっぱ一夏と同じヤツなんだな。
「分かってるのか?!この試合で負けたら、あの高飛車女のあ、ああ愛奴

にされるのだぞ?!」
「お前の頭が心配になるセリフだぞ、ソレ。まあ、この後一夏が勝てば1勝1敗になるから、その後、俺が勝てば全員引き分けのドローだ」
「む、い、いやしかし……一夏、か。あやつは大丈夫なのか?その……知識はあっても、ＩＳに関しては素人なのだぞ……?」
何の事かと思い、すぐに箒と俺の意見の擦れ違いに気付く。
……箒のヤツ、一夏の本性と言うか破滅症候群と言うか自虐癖と言うか厨二的二重人格要素と言うか、『アレ』の事知らなかったんだっけ。
「まっ、大丈夫だよ」
だからそう言っておく。それに、戦いに関する俺の直感から言えば、アイツは勝つ。
長年の付き合いだから分かるが、今までのアイツは『抜き身の刀身を握って持ってる人』だったが、今のアイツを例えるなら『刀』だ。まだ名刀も無く、真打ちですらない刀だが、それでもきちんと鞘に収まって、斬る時は斬る存在になっている。
……この二日の間に、何があったんだか……。
気になるが、気にしても居られない。あと一時間もしない内に、今度は一夏と戦うのだ。その為に、今できる事と言えば、
……黒式の状態を把握する事。
そう判断し、黒式のステータスを表示させる。
……シールドエネルギー残量が０、ダメージレベルがＢ（中破）、一番酷いのは背部の非固定浮遊武装だが、
「エネルギーの補給があれば自動修復可能範囲、か。あんだけヤってＢ判定って、結構頑丈だなコイツ」
「それでも、一夏と戦うまでには完全に修復は終わらないぞ?」
「ん、勿論その状態で戦うまでだ」
「ば」
「失礼するよ」
箒が何かを言う前に、扉が開き入室の挨拶をしながら一人の人物が入ってきたので、箒は言うタイミングを逃した。

焦げ茶色の髪の首筋辺りまで伸びたポニーテール。白のシャツにデニムのGパン、その上から白の白衣を羽織り、生地が厚いのか、それとも体型なのか分からないが、随分スレンダーな人だが、恐らく女性。

驚きと訝しむ箒を余所に、

……ちょっ、なんッ、えー!?この人、何でこの世界に居るの?!

俺はその人物を見て、よくもまあ奇声を上げなかった、と自分自身を褒めたかった。

対する女性（？）は、俺達の視線など一切気にせず、ズカズカと大股で俺に向かってくる。

「いやぁ悪いね、プロテクトが解けたって聞いて居ても立ってもいられなくてねぇ、――で、キミが木場亮斗くんで良いのかな？早速で悪いけどキミのＩＳ《黒式》を見せて貰っても良いかな？いや寧ろ触らせてくれないだろうかいいややはり此処は直接中身を見せ欲しいっと言うか見せてくれぇ！私の黒式をぉぶしッ!!!」

「落ち着け奇行者」

しゃべっている途中で段々と興奮し出し、最後には黒式を自分の物宣言した不審者は、何時の間にか部屋に入って来ていた千冬さんに頭を殴られ、頭を抱え蹲った。

ソレを見て俺は、

……ああ、世界変わっても中身は変わんなかったのか。

ある種の真理に辿りついていた。

「あの、織斑先生。そちらの方はどなたなのでしょう、と言いますか、ええと、目上の方なので言葉を選びますと、――頭大丈夫ですか？」

「「言葉を選び過ぎだ、箒」」

俺と千冬さんのツッコミが同時に入った。

ん、と一度喉を鳴らし、千冬さんが説明に入る。

「本当なら呼びたくは無かったのだがな、今回、二回も戦闘を行うという事で、一戦目で機体が破損した場合の修理の為に、急遽倉持技研の方から出向して貰った」

「坂地（はんじ）添（ぞえ）だ。よろしくね、亮斗君」

なんか違うー?!
「ちなみに正式な肩書きは、倉持技研第一研究所所属、試作第４世代ＩＳ研究班主任だよ」
「ついでに言うと、私や束とは同期だ」
「は、はぁ、……って第４世代?!」
箒が微妙な納得をした後で、第４世代と言いう名に反応する。確かに、世間じゃあ、まだ第３世代で、しかも試作機の段階だ。〝まだ〟普通の感性しかない箒にしてみれば、驚きの一言だろう。
だが、俺としては千冬さんの『同級生宣言』の方が数倍気になったが。
「別に驚く事じゃないよ、何せタバネが関わってるんだ。キミだって、彼女が常人とは違う発想力、行動力を持ってる事は知ってるだろう？」
「むッ……、いや、確かに、そうですが……」
「まあ無理に納得しなくたっていいさ、けど、今此処に試作型第４世代機である《黒式》と《白式》が此処にある、と言う事実は認める事だ」
箒が言い包められた。
……まあ、俺も原作と言う〝知識〟が無きゃ、箒と同じ感じだったろうなあ。
さて、と会話を区切って、ハンジ分隊長――いや、此処じゃ坂地主任――が俺に向き直った。……ちょっと肩がビクン、となったのは見ないでいてくれると嬉しい。
「早速だけど整備室に行こうか。さっきの試合を見たけど、多分背部の非固定浮遊武装が結構ダメージ入ってるでしょ？」
「正解です。でも《黒式》の交換品はまだ出来てんじゃ……？」
「うん、出来てないよ」
あっさり言われた。
でも、と続き、
「《白式》もそうなんだけど、《黒式》もウチの《打鉄》がベースになってるみたいだからね、相互性はある」
だから、と更に続いて、

「じゃあ早速往こうかッ！時間は待ってくれないしねッ!!ほらほら早く行こう!!」
「え？あ、っちょ?!いだだだだだ?!腕が捻じれるッ!!」
「Ｈａｌｌｅｙ！Ｈａｌｌｅｙ!!待っててよぉ《黒式》ちゃぁん！今すぐ私が隅々まで解析してあげるからあぁ!!」
腕が捻じれられ引っ張られながら、俺はハンジさんに拉致られて、そのままピットから連れ出される。
……つーかマジ痛いッッ!!
「りょ、亮斗ー?!」
「まあ、死にはしないだろうから……頑張れ」
そんな二人の言葉を聞きながら、ピットのドアが閉じられた。

――そこは捻じっちゃらめぇぇぇぇ!!

一夏ｖｓセシリア

――第三アリーナ・客席

亮斗とセシリアの戦いが終わり、次の試合までの１５分の休憩の中。観客席のあまり目立たなさそうな場所で、更識簪は先程の戦いを分析していた。

……彼のＩＳ、《黒式》だっけ……？　近距離戦闘寄りって織斑君から話しは聞いてたけど。

「あの武装……」

荷電粒子砲とは違ったけど威力は申し分なかった、と簪は考査する。ついでに織斑くんの嘘つき、と分割思考の一つで罵っておく。

取り敢えずあの武装だ。あれ一つで接近戦と遠距離攻撃の両方を兼ね揃えているのは、正直凄いと思う。攻撃の三大要素『斬って良し、刺して良し、撃って良し』の三拍子そろっているのだ。

……流石は篠ノ之博士、って言うべきなのかな……？

そんな事を考えていた簪は、自分に向かって足音が近づいて来るのを察知する。普段は立てない足音を発ている事に少しの嬉しさを感じながらも、一目散に逃げ出したくなりそうになる――が、

……今は、ダメ……！

今此処で逃げだせば、この先、何時機会が訪れるか分からなくなってしまうので必死に抑える。何より、

……お、織斑くんが作る、トマトカレーが食べられない……！

某ゲームで有名なアレだ。彼の料理の腕前はこの一週で十分知っている。ならば食べなければ損だ。――それに、盗って来てしまったモノは返さなきゃいけない。

「隣、良いかしら？」

「……どう、ぞ」

なんとか声を出す。

チラリと横目で見れば、隣に座るのは自分と同じ水色の髪の女性。おね――生徒会長さんだ。

会話は無い。ただ、無言の応酬が数秒ほど続き、

「……――っ、あ、あのっ！」
意外にも、先に動いたのは簪からの方だった。横に置いてあった鞄から小型のノートＰＣを取り出し、楯無に差し出す。
「も、持って行っちゃって、ごごごめんなさい……！」
……か、噛み噛みだぁ。
顔を伏せているのでバレて無いだろうけど、泣きそうなのを我慢。少しの間ビクビクしながら待っていると、
「ん。返してくれて、有難う」
手から重みが無くなった――受けとってくれたのだ。内心ほっとするが、
……盗って行っちゃったの、私なのに……。
礼を言われ、逆に居た堪れなくなった。このままだと、また心にも思っていない事を言ってしまいそうなるので、用件も済ませたので早急にこの場を去ろうと思い腰を上げる。
「そ、それでは私はこれで失礼」
「彼の試合を見ていかないの？」
最後まで言い切る前に、向こうから問われ、ハッとして目の前の人を見る。
会長は、私を見ていなかった。会長が見ている先は、試合会場のピット。其処から飛び立ったのは、純白の装甲を持つＩＳを身に纏った織斑くんだ。
……アレが白式。
スペックだけで言うなら、既存のＩＳ中最速の機体であり、武装が一つしかないピーキーな機体。
「簪ちゃん」
急に名を呼ばれ、反応せずに居ると、会長は更に言葉を続けてきた。
「これはＩＳ学園の生徒会長としてでもあるし、お姉ちゃんとしての言葉よ」
「え……」
話し方が、何時もの余裕のある話し方じゃなかった。その事実に、何故か耳を傾けてしまう。

「彼に深入りしない方がいいわ。表面上の付き合いだけにしなさい」
「ど、どう言う事……？」
この間訊いた自己破壊願望の事だろうか？でも、それだけで目の前のおねえ――会長さんが警告する事だろうか？
「解らなさそうね。――なら、この試合を見て行きなさい」
そう言ってお――会長は、私の事を一瞥もせず、試合会場の方を見ていた。
……なんか、悔しい。
その感情は、織斑くんへなのか、それとも目の前の人へなのかは分からない。だが、なんか悔しかった。
……こ、このまま逃げるのもイヤだから……！
再び腰を下ろした。

◆

ヨッシャキタァァァァァァ!!!クククッ、ハハハッ！久しぶりに嗅ぐ簪ちゃんの匂いは格別ゥゥゥゥ――ッ!?コレ、私と同じシャンプー使ってる！くぅ……！簪ちゃん最高！同じ製品なのに、簪ちゃんが使うと最高級の香水よりもイイ香りだわ!!クククッ、流石私！私流石！こういう時に誘導尋問系のスキルを持っていた良かったわッッ!!

◆

――戻って第3アリーナ上空
「ギャップがひでぇだろうな、アレ」
今俺は、ハイパーセンサーを使い、会場の何処かで妹ジャンル系ハメコンボ好きエロゲ会長に、ノーパソを返している筈の更識さんを探していたのだ。
で、見つけたシーンが一目散に立ち去ろうとしていていた更識さんを、あの会長は一言二言しゃべって、事もあろうか更識さんを隣の席に戻させた場面だった。
……俺をダシに、煽って反抗心を刺激。更識さんに見稽古を付けるついでに、自分の欲望も充たしやがったよあのエロゲ会長。

二人の心境が解るだけに、あのシーンを見て出てきた最初のセリフだ。
「？　何かおっしゃいました？」
「唯の独り言だよ。そう言えば、アイツとの試合は完勝？」
「いえ、良い所まで追い詰められましたわ」
と言う事は、デカイ口叩きながら亮斗は負けたのだ。
……からかうネタゲット。
「機体は大丈夫なのか？負けた言い訳は聞きたくないぞ」
「御心配無く。同じ候補生の先輩が、『こんな事もあろうかと』と言って予備パーツを幾つか取り寄せてありましたから」
オルコットの性格が慢心と高飛車な性格だから不安だったが、ちゃんと頭が回ってる人は居るようだ。しかも浪漫が分かる人。
……まあ、ＳＦの塊みたいな分野のＩＳ道に入る奴なんて、どう考えても〝そっち〟方面に両足どころか、全身浸って滲み込んでる様なヤツしか考えられんしなぁ。
取り敢えず向うの心配は要らないようなので、試合に集中する事にする。
ＩＳでの戦闘はコレで三回目。こっちは最強相手に受験試合一回、昨日のエロゲ好き会長と４時間ぶっ続けの訓練と、実機でのたった一時間の訓練だけ。対して、相手は月に数十回はこなし、数百時間以上は乗ってきた代表候補生。
……これ、どっちが凄いんだ……？
いや、向うだって国家代表辺りと数回は模擬戦をしてるはずだ、と考え、自分を否定する。
そしてすぐに意識を切り替え、目線は拡張領域内にある武装一覧に向けられる。其処に、この機体に搭載されている唯一の武装があった。
……恐れるな。
息を大きく吸いゆっくりと吐き出す。意識を少しずつ戦闘思考へと切り替え、――己の奥深くに閉じ込めた『俺』を解き放つ。
二日間の鍛錬の間に、エロゲ好き会長から指摘された事があった。

曰く、力の込め方も体捌きも十分に出来ているが、攻撃する瞬間だけ力任せになりがちだ、と。ついでに、それだと自分の拳も傷めるゾ☆、と言われ。後者の発言でイラッと来たので、乱取りしながら自分でもどうしようもない破滅思考の事を、説明ついでにお披露目した所、これまた力尽くの荒技でこの自己暗示を修得させられた。

だが、付け焼刃の技能だとしても、今までとは全く違う感覚に至った事は間違いなかった。

……ああ、良い気分だ。――良い気分で斬れそうだ。

なんか間違ってる気もするが、別に良いや、と思考を破棄。

「全力で来い、オルコット」

「ええ、亮斗さんとの一戦で分かりましたわ。貴方方は油断できない相手だと。故に、最初から本気で行きましょう。――この試合、亮斗さんも見て居られるのですから」

……見てねーって、入れ違いで更衣室だっつーの。

内心でツッコムが、それと同時、もう一つの事に気付く。

……落ちたか。まあ、俺に害がある訳じゃないから良いや。

と言うか寧ろもっとやれ、とエールを送っとく。それと同じ位に、無駄だと思うがな、とも否定する。だってアイツの本命は箒で、箒の本命も亮斗だし。

……さっさとくっ付け――いや、やっぱ卒業辺りまで待って欲しい。売れ残りの俺に卒倒するし。

『両者、準備は良いか？』

管制室に居る姉さんから通信が届く。

「私は何時でも」

「準備だけは良い」

後は本番だ。

『では二回戦目、織斑一夏対セシリア・オルコットの試合を行う！』

雪片弐式を抜き、顔の横に持って行く。切っ先を相手に向けた弐の太刀の構え。

対するオルコットは、左右の非固定浮遊武装の下方かから２つのパーツを分離させた。

……アレがＢＴ兵器。確か、自律行動じゃなく、使用者の思考伝達で動くんだっけ。
資料はエロゲ好き会長に、更識さんの『題・ＰＣの前でウトウト』の写真とマスターデータで手を打った。
……なら楽勝だな。
内心でそう言い聞かせ、一つのプログラムを起動。右の眼前に一つのモニターを表示させる。
『開始!!』
「――斬るか」
「撃ち抜きますわ」
直後、一夏がトップスピードで疾走するのと、ビット２つからの射撃は同時だった。
その攻撃を、一夏は、
「……!」
下半身を上に持ち上げ、反動で少し高い位置に身を置く事で避けた。
「貴方もですかッ!」
「軌道が見えるからな」
「ハッタリを……!」
一夏の目には、嘘やハッタリでは無く、しっかりとセシリアの攻撃の軌道が見えていた。
それを成しているのが、一夏が右の眼前に表示させた一つのモニターだ。
……プログラム正常稼働。バグも、今の所なしか。
二日間の間、エロゲ好き会長に鍛えられながらも、更識簪に好きなモノを作ると言う交換条件で《打鉄弐式》を借り、組み上げた『射線予想プログラム』だ。ハイパーセンサーとロックオン感知、熱源感知のシステムを連動させており、ロックオンされた瞬間ハイパーセンサーが銃口向きと射線を読み取り、〝撃たれた際の銃口の延長上のライン〟を教えてくれるのだ。
……更識さんには、感謝しなくちゃな。

エロゲ好き会長にはしない。なぜなら、彼女とは生徒会の雑務を引き受ける契約だからだ。
それに、と心で繋げ、
「見せる、って言っちまったからなっ……！」
水平状態のまま瞬時加速。その爆発的な加速を得たまま、
「――ッ！」
「きゃぁッ?!」
勢い良く、左肩からオルコットに激突。オルコットの胸が自分の左ほほに当たっているが、
……斬るのに邪魔だッ！
即断。体勢を立て直そうと離れようとするオルコットに対し、俺も左腕で払いつつ体を右にズラし、
「その足、貰ってくッ！」
「嫌ですわよ!!」
オルコットの左足のユニットを、ロールする勢いで下から斬り払った。
相手も危機を察したのか、左足を右に寄せ全力で横にズレた為、左足を斬り飛ばす事は無かったが、体勢が崩れた。
対する一夏は、横ロールしている状態。右手に持った雪片は、真上を指している。
「おお――！」
そこに更に捻りを加え、勢いを付けて、――右手を開く。
……雪片大車輪ってな……！
「非常識な――！」
オルコットの驚愕する声が聞こえる。
目に見える状況は。縦回転しながらオルコットに迫る雪片と、更に後ろに下がりながら、左右のどちらかに避けようとしているオルコットが見える。――が、
……距離が近いから無理だ。
後ろに向かって瞬時加速でも行えば避けられるだろうが、オルコットの戦闘データを見る限り、瞬時加速を用いた高機動戦闘は行った事

は無い。
故に、
「どう出る！セシリア・オルコット……！」
体勢を立て直す最中、幾つか自分でも候補を考えつつ向こうの動きを見続け、――候補の中の一つを、オルコットは選択した。
すなわち、両腕に寄る防御だ。
長銃を量子化し、インターセプターと声に出して近接用のショートブレードを横にして構えた。若干の違いはあるが、それでも想定内の動きだった。
……つまらん。
一気に心が冷めた。
体勢を戻し、すぐさまフルスロットルで加速。加速した瞬間すぐにスラスターを止め、機関内に圧が溜まったタイミングで再びの再点火――フルブーストの瞬時加速だ。ソレにより一瞬でオルコットに接近。
そのオルコットは、雪片が当たる瞬間、下から掬い上げる様に上にトスし、一つの動きを取った。
右腰のバインダーが動き、此方に銃口を向けたのだ。得た情報から察するに、追尾型のミサイルだったと思い出し。
……良いね！そうこなくちゃ!!
く、と口元に笑みが零れ、――真っ直ぐ突っ込む。そして、銃口に向かって左の貫手を突き出し、
「諸共に吹き飛べッ！」
直後、銃口から発射された瞬間のミサイルと左の貫手が衝突し、炸裂した。

◆

……なんて無茶苦茶……ッ！
爆煙が立ち込める中、全力で後退しながらセシリアは息を呑み、戦慄した。

普通なら、あの場面で取る行動は回避だ。実際、自分が戦った人達は誰もが回避を選択肢していた。中には迎撃する方々も居たが、間違っても突っ込んで来た存在は居ない。

……まして、負傷覚悟でなんてッ……！

まともな育ち方をしていない。まるで野生の獣だ。

そして、その獣はまだ戦いを止めていない。試合終了のブザーが鳴っていないからだ。即座に姿勢制御し、スターライトｍｋ―Ⅱを展開。最後に見た彼の位置を思い出し、

「――！」

一射。

〝敵〟を視認している暇など無い。そんな時間（隙）、相手が自分の懐に迫る時間を与えるだけだ。

撃ち出された光撃は、彼が居るであろう位置に向かって行き、――爆煙から光が一閃され、打ち消された。

……やはり、ただでは撃ち落とさせてはくれませんわね。

煙が晴れる。彼の姿が露わになり、ハイパーセンサーを通して観客の小さい悲鳴が聞こ――、

「イケメンを傷つけるなんてッ！」

「血だらけになっても戦う男――否、漢」「イケますねぇ、それ」

「前のヤツ邪魔よ！描けないじゃない……！」「はあー!?ポジション取りは基本よ!?」

「Ｍ？Ｍなの？」「違うわよ、オルコットさんがＳなのよ」「…攻め受け？」「「「「「それだ!!!」」」」」

えたくないが聞こえた。

……それだ！じゃありませんわよ！あと、だれがＳですか！私はどちらかと言えば、亮斗さんに攻められる――って違いますわよ私っ……!!

変な方向に思考がズレたので、急ぎ修正。改めて彼の姿を見る。

白い装甲は装着者共々煤に塗れ、見た感じ中破以上といった所だ。中でも酷いのが左腕。左腕の装甲は砕け、生身の左腕にも幾つもの裂傷があり血が流れている。

唯一無事な右腕には、先程何処かへ飛んでいった剣――ユキヒラニシキが握られている。恐らくは、自動返還機能だ。
ＩＳの武装は、必ずＩＳに登録する必要がある。と言うのも、持ち運びを便利にするだけでなく、登録された武装は、所持者から一定の距離が開くと自動で量子変換し、格納領域へと戻る事になっている。これは安全性や、回収し忘れた武装が万一盗まれたりしない為にする防犯機能でもあるのだ。
「本当、素人とは思えませんわ……」
代表候補生の上位に居る者たちはそういった機能を十全に使いこなすし、武装を手元に戻させない為に距離の把握すら行う。
……だから化け物揃いですのよ。
そして、目の前に居る彼もまた、その化け物連中の領域に片足突っ込んでいる。ライオンの姉の弟はやっぱりライオン、結局はそう言う事だ。
……ですが、
「もう負けられません!!」
「ん、じゃあ頑張ってくれ」
決意を新たにした所で、彼に軽く受け流された。心なしか、少し高度も下がった気がする。
「あの……、気の所為かと思いますがテンション下がってません……？」
そう言えば、先程から自分の剣――ユキヒラニシキをずっと見ていたのを思い出す。
「ん？ああ、なんつーか、俺はまだ姉さんに護れてばっかなんだな、って思い知ってな」
「それはそうでしょう。あの方はモンド＝グロッソの総合部門優勝者（ヴァルキリー）。私だって届くかも分からない高みに居るのですよ？」
今更な事だ。私程度に後れを取るようでは、到底辿りつけない頂きだ。
だが、私の言った事を否定するように首を横に振って、

「いや、そう事じゃないんだ。――俺は、まだまだ姉さんの手の届く範囲に居るんだなって事を痛感させられてな。そして、〝ソレ〟を利用してでしか勝ちも拾えないんだ、って」
言っている意味がよく分からなかったが、恐らくは、
……〝何か〟を掴みましたね。
そもそも亮斗さんの《黒式》に彼の天才、篠ノ之博士が関わっていると言うのなら、織斑一夏にも関わっていない筈が無いのだ。
……何かあるとしたら、あの近接武装。
あの時、自分が撃ったレーザーを打ち消した光刃。恐らくはアレだ。エネルギー系の武器は、実体剣や実体弾と違い、当たればシールドエネルギーをかなり削る。
「ですが、当たらなければどうという事はありませんッ！」
「いやお前、どっちにしろ近づかれたら終わりじゃん？」
うっ、と言葉を詰まらせた。
……な、何か最初の時と随分と性格が違いませんか?!
明らかに違うと思うが、今考える事は彼の性格のではなく、勝つ為の工程だ。残っている武装は、右のミサイル兵装以外は全て残っている。だが恐らく、相手は此方の性能を把握している。ついでに言うと、私が取る戦術も大体は知っているだろう。
……ど、どうしましょう……っ。
内心の動揺を押し殺し、スターライトを構えてみたが、対策が一向に思い付かない。ＢＴとの同時操作、もしくは偏光制御射撃が使えたらもっと幅が広がるのだろうが、出来ない事を願っても仕方ない。
……取り敢えず、撃って当てれば勝てますわね……！
漸く覚悟も決まり、相手に意識を集中する。

◆

構えは顔横に剣を置く、弐の太刀の構え。ただ今までと違い、左腕が負傷している為、右腕一本で支える。こういう時にアームが付いていた事を有難いと思った。

けど、正直言って邪魔だった。特に肩部の戦隊モノっぽい肩当て。
……なんだよコレ、当たり判定の箇所が増えるだけじゃねーか。
つまりは本気で束さんに言われたとおり〝自分好みのＩＳ〟の製作だ。別名『俺の考えた最強のＩＳ』である。
……まあ、今は勝ちに行くだけだ。
顔はオルコットに固定したまま、横目でチラリと一つの表示を見る。其処には一つのプログラム『零落白夜』と表示されていた。
……まさか、此処でその名前を目にする事になるとは……。
『零落白夜』
嘗て姉さんが発現させ、使用していた単一仕様能力（ワンオフアビリティ）。仕様は『シールドを斬り裂き、搭乗者本人への直接攻撃』。
要は、防御無視で本体に直接攻撃して、絶対防御を強制発動させエネルギーを消費させるのだ。
……けど、発動させた際の光刃のエネルギーは、こっちのシールドエネルギーを消費させる。
言わば諸刃の剣。さっきも一秒に満たない時間しか使ってないのに、一気に３０近く持ってかれた。
こんなにも扱い辛いスキルで姉さんは無双したのだ。　だが、今はそんな姉を持てた事を有難いと思う。そして、個人技能である単一仕様能力を、どうやってＩＳに組み込めたかと言う事も思考の隅っこにブン投げる。束さんの思惑とやらも放棄。
「――勝ちに行く」
もう迷わない。立ち塞がるなら斬る。邪魔するなら斬る。俺の想いや考えてる事も斬り捨てる。
……俺は、世界最強の一振りと、世界最強（ブリュンヒルデ）の力を持っている。
逆を言えば、それだけの重責を背負っているのだ。
……負けは赦さない。他の誰でも無く、俺が俺を赦さない。
コレが、本当の『覚悟』だ。最早、俺はこの剣と共に歩んでいくしかない道を選んだのだ。
「――忠、勝つ」
その為に、一夏は前へと出た。

◆

後退し、引き撃ちするセシリア。
セシリアを追い、接近戦へ持ち込もうとする一夏。
エネルギーを消費し、的確に狙撃する者。回避するも、次第にエネルギーを削られていく者。
会場を縦横無人に飛び回り、ただ相手を倒す為に動き続ける二人。戦況は一見互角。
だが次第に、会場に居る全員が分かるまでに流れが傾いていた。
その事実が一番知る事が出来たのは、指令所にいる山田真耶と篠ノ之箒だった。
「織斑君、凄いですね」
「これが、一夏……」
山田真耶はデータから導き出された統計から、一夏がこの短時間で白式の機動に〝合わせた〟事に。
篠ノ之箒は、幼馴染であり、自身の恋路を手助けし、また阻害する少年の技量と心の奥底にあった闘争心に。
「……」
その中で、ただ一人無言でモニターを見つめる千冬は、内心で安堵の息を吐いた。
一つは、一夏が雪片を持ってくれた事に。そしてもう一つは――、
「――フン」
其処まで考え、自分自身の愚かさに反吐が出そうになる。
「あの、どうしました？ちふ……織斑先生？」
「なんでもない篠ノ之。――それより、そろそろ片が付くぞ」
己の何もかも呑み込み、普段通りに振る舞う。
……まあ、一夏の勝ちだろうがな。
身内贔屓なのも入った予想だが、あながち外れていない。一夏は零落白夜の特性を、使用する際の条件も含め知っているのだ。
……さて、勝った後、アイツなら天狗になる事は無いと思うが、……

負けもまたアイツの為だ。
考えるのはこの後の段取り。この後戦う一人は怪我、ＩＳは共に中破という状況。教師としては止めに入らないといけないが、恐らく二人は決戦試合を望むだろう。下手したら土下座までして懇願して来る。
流石にそれは面倒だ。
やるべき事は搭乗者の応急処置と、ＩＳの応急処置・再調整だ。代用品で打鉄のパーツを使用すれば、時間は短縮できる。問題は搭乗者――一夏の方だ。
……２０分。それくらいあれば、止血と表面の傷を塞ぐ事は可能か。
今の医療技術の高さに感謝だ。
其処まで思案し、意識は再びモニターに向ける。
試合は既に、削り合いへと変わっている。一夏は相変わらずオルコットを追い、オルコットは――、
……狙撃銃をやられたか。
銃口部分が焼き切れていた。使えないと悟ったのか、格納領域へと戻さず、一夏に投げる事で一瞬の壁とし、ＢＴ兵器を１つ展開していた。
思わず感嘆の声を零す。
……オルコットは移動とＢＴ兵器の同時操作は出来ないと聞いていたのだがな。
恐らく極限まで高まった集中力だ、ソレを可能としたのだろう。
一つのＢＴ兵器を、前に突き出した右手で持つような位置に置いている。ＢＴを狙撃銃に見立てて、狙撃のイメージングを行っているのだろう。
……さあ、正念場だぞ？二人とも。

◆

……８０……ッ！

シールドエネルギー残量を尻目に、一夏はセシリアを追う。
ＩＳが動く毎にエネルギーを消費していく事を考えれば、あと数秒程で勝負を掛けなければ、零落白夜発動分のエネルギーすら使ってしまう。
……焦るな、嘆くな、諦めるな。
全て、今までの自分の事だ。生きる事に焦り、生き残ってしまった事に嘆き、未来なんてどうでも良いと諦めた。
だが、これからはもう、それじゃダメなのだ。
――顔面狙いのレーザーを最小限の動きで避ける。
その為に、この試合は勝たないといけない。勝って、終わらせる。
……今までの『自分』をッ……！
――胴狙いの一撃を、縦回転のロールで避した、
……マズイッ！
回転した分、距離が空く。致命的な〝間〟だ。
その間を更に開けるべく、オルコットが動きを見せる。左のバインダー――ＢＴミサイルが――放たれた。
極限まで高まった思考が、全ての動きをスローに見せる。その中で一夏は行動を起こす。
……やれる。
――１２メートル
ロールした勢いで、体は右へと向いている。其処から左へと体を回し、右手に持った雪片弐式を、縦回転で上向きに投げる。
……やってやる。
――９メートル
続く動きで、肩当てに手を置き外す。
……これから先を考えれば、この程度の無茶、平然とやってのけなきゃ駄目だ。
――５メートル
加速。
……もう逃げないって決めた。
――２メートル

……もう、戦うって、
「決めたッ!!」
ミサイルをギリギリまで引きつけて、その弾道を見切り、右の脇下へ通す様に体を動かす。その際、弾道上に手に持った肩当てを放り投げておけば、
「――ッ!!」
背後でミサイルと肩当てがぶつかる。音と衝撃が背後から届き、更なる加速を得る。
……届け……っ、
視界に映るのは、先程投げた雪片弐式。
「届けぇえ!!」
届く。指先が柄の先端に引っ掛かり、雪片が落下から一瞬停滞した。
その瞬間を逃さず、逆手状態で柄をしっかりと握り、――オルコットの下側へ向かって瞬時加速。胴体があった位置を、二条の光が通過。
「お」
オルコットの真下を通り、マニュアルによるＰＩＣ制御で１８０度反転。今度は真上へ向かって瞬時加速。
「おお……!」
通り過ぎ様、雪片で右の非固定浮遊武装を引き斬る。金属を裂く音を聴きながら、再度ＰＩＣ制御で急停止。オルコットに視線を向け、
「これでッ!」
「舐めないで頂きたいですわッ!」
１つのＢＴ兵器の銃口が此方に向いていた。
予想通りの動き。故に俺は、
「貫けぇぇッ!!」
「またですのッ?!」
雪片を投擲。
その後を追い、柄頭に足裏を乗せ更に加速。
「秘剣!―Ｇソードダイバーー!!」

「何処が秘剣ですの――――ッ!!」
オルコットが何やら叫ぶが無視。むしろ集中が途切れたのか、ＢＴ兵器の攻撃は来なかったので逆に好都合。
……零落白夜発動!!
距離が一瞬で縮まり、光刃が左の非固定浮遊武装を斬り裂き、オルコットの体を霞めるように過ぎる。
……獲ったッ!!
即座に零落白夜を停止。落ちていく雪片弐式を無視して、残りのエネルギーを視界に捉え――、
『勝者、織斑一夏!!』
勝利宣言を得た。

束の間の男女

――試合会場・観客席

誰もが予想だにしなかった結果に、観戦に来ていた女子生徒達はザワつき、興奮していた。当然、話題は二人の男子生徒。

一人は一次移行（ファーストシフト）前にも関わらず善戦し、最後まで喰らい付いた木場亮斗。

もう一人は、怪我をしながらも勝利を飾った織斑一夏。

「凄かったね！私、こんな凄い戦い、去年のキャノンボールフィストでの戦いを見て以来だよ！」

「うんうん分かるわー。負けちゃったけど終始余裕を見せてた木場君も良いし、傷だらけになっても勝ちに行く織斑君もカッコイイよね！」

「うーん、どっちも攻めなんだけど、何か受けっぽいのよねー」

「受け攻めって奴じゃないの？」

「それってMなの？Sなの？」

「Sじゃないの？自分からは手を出さないけど、寄ってきて巣に掛かった獲物にはガッツリ行く、みたいな？」

「「「「きゃー！」」」」

とにかく騒がしかった。

対して、一戦目はギリギリ勝利。二戦目は敗北といった戦果を得たセシリア・オルコットの評価と言うと、そんなに悪くなかったりする。

特に1年1組の生徒達には。

「オルコットさん、やっぱ凄かったんだねえ」

「そりゃあ代表候補生だもん。私達とはレベルが違うっしょ？」

「織斑君との戦いも連戦だったし、一戦目で受けたダメージと疲れもあったしね」

「あれ？パーツ交換したからISは万全じゃないの？」

「馬鹿ねぇ、幾らパーツ交換したからと言って万全とは行かないわよ、……でしょ？本音ちゃん」

「うん、そ～だね～。流石に専用機ともなると専用のパーツだし～、き

ちんと調整をしないと、ちょっとだけズレが出るんだよね～」
「「「「「布仏さんが真面目だ……」」」」」
「皆酷い～。でも、流石整備科の先輩たちだね。こんな短時間で、殆どのズレを修正するなんて凄いな～」
「ええ。皆さん基本祭り好きですから。テンションＭＡＸで作業してましたよ」
　行き成り話しに入りこんできた人物に、全員が顔を合わせ、一人の女子生徒が合図し、
「「「「「……どなたでしょう？」」」」」
　疑問を口に出した。
「お姉ちゃんだよ～」
「「「「「お姉さん?!」」」」」
「はい。ＩＳ学園３年、生徒会会計をしております布仏虚です。皆様には、本音が日頃から世話になっています。……この子、かなりペースが遅くて大変でしょう？」
「お姉ちゃん、ひど～い」
「い、いえ。本音ちゃんは癒し要素で１組のマスコットですよ！」
「そ、そうです！それに基本織斑君が世話係になっていますので！」
「やっぱりですか……――本音」
「ご、ごめんなさい～！」
　賑やかに時が流れて行く。

◆

――東ピット
　ピットの降り、白式を解除する。
「ッ、は……！」
　途端に襲ってくる激痛と疲労。左腕から、ズキズキと痛みが脳に届く。
　この後、亮斗との戦いもあるので、急ぎやる事を脳内でピックアップ。と言っても、やる事は単純で、

……治療と応急修理。
この二つしかない。休息も取る必要があるが、それは治療と同時に取れば良い。確か、どちらも人員を用意してある、とシスコン会長が言った。
そして、その通りに両方の担当者がやってきた。
空気が抜けるような音を鳴らしドアが開く。開いた入り口から二人の女性が入り、此方に駆け寄って来る。
一人は見覚えがあった。甘栗色の少しウェーブの掛かったロングヘアーの女性。遠見真矢の母親、遠見千鶴さんだ。
……そう言えばＩＳ学園で保険医を務めてたんだっけ。
スッパリと挨拶に行くのを忘れてた。
そしてもう一人は、ハーフアップのヘアースタイルのメガネを掛けた――恐らく女性。その女性は、鬼気迫る表情で此方に走り寄り、
「私の白式いいいいい!!!」
「なんだ、ただの奇行者か」

◆

――西ピット
観客の目に付かない奥まで移動し、慣れた動作で《ブルー・ティアーズ》を解除して床に降り立つ。
降り立った位置から一歩も動かず立ち尽くしていると、空気の抜ける音と共に、一人の女性生徒が入って来た。
「お疲れ様、セシリアさん」
「あ、……サラ先輩」
サラ・ウィルキン。ＩＳ学園２年生パイロット科を専攻する女性であり、自分と同じイギリスの代表候補生。そして、自分にＩＳの操縦技術を教えてくれた師でもある。
「負けてしまいました」
「だね。いやー、私から見てもありゃ怪物よ？素人とは思えないわ。……戦った事、後悔してる？」

「後悔はしていませんわ。ただ――」
「家の事？」
俯く事で、肯定とした。
隠そうと思ったが、今更隠そうとも、自分の事情を知っている目の前の先輩には意味のない事だからだ。
「代表候補の剥奪までは行かないかもしれませんが、恐らく――いえ、きっとオルコット家の相続権の保証などは放棄されますわね」
代表候補資格が取り上げられないのは、自分がＢＴ兵器のテストパイロットだからだ。だがそれも、適性が高かったからという理由なだけで、これから先『前』に押し出される事は少なくなるだろう。
……いっその事、私から相続を放棄するのもありかも知れませんわね……。
オルコット家の長女『セシリア・オルコット』から、ただの『セシリア』になる。何ともまあ、肩の荷が一気に無くなりそうだ。肩コリは無くならないだろうが。
「おーい、何か今、私に喧嘩売ってる思考してないかー？」
「ハッ!?い、いえ決してそんなっ！先輩はスレンダーでカッコイイと思いますわ！」
「おーし喧嘩売ってんな？取り敢えず――モグゾ」
数分ほど騒ぎながらピット内を逃げ回るが、
「獲った！」
「ひんっ!?」
身体能力の差から揉み拉かれた。
５分は揉まれ、満足したサラ先輩から解放された。
「うぅ、お嫁にいけませんわ……」
「女同士なんだからノーカンノーカン。話しは戻るけど、今回の負けでオルコット家がどうこうなる確率は低いと思うよ？」
「――――は？」
自分でも驚くくらい、間抜けな声が出たと思った。
「ど、どうしてそう思うんですか?!」
自分の疑問に、サラ先輩は小型パッドを取り出し、動画を見せてく

れた。
『控えー！控えー！』『この紋所が目に入らぬかぁ!!』
「おっと間違えた！」
慌てて引き戻し、再び此方に差し出して来た。今度は何だろうと思って画面を覗き、
……今日の戦闘記録……？
先程の織斑一夏との戦闘記録。その最後辺りの攻防だった。
「――分かる？　限定的とは言え、高機動時におけるＢＴ兵器の同時使用してたんだよ？」
「あ！」
言われ、改めて思い出した。
確かにあの時、私はブルー・ティアーズをスターライトＭｋ―Ⅱに見立て、動きながら迎撃していた。確かにＢＴ一基だけとはいえ、同時操作していたと言える。
「それに加え、この二戦でセシリアの実力が上がったんだ。彼等と同じクラスなら、これから先も一緒に訓練を行う機会は一杯あるさ。まあセシリアにとって、今日の試合は得るモノがあっただろ？腕もそうだし、――なによりも精神的に」
心当たりあるだろう、と言われ、確かに思う所があった。
入学早々に黒星は確かに痛い。だがソレを差し引いても、自分にとっては得るモノが大きい試合だった。
……亮斗さん。
ヘラヘラした顔をする軟弱な男。最初はそう思っていた。だがしかし、いざ戦いとなれば彼は荒削りながらも堂々と戦い、そして、真っ直ぐに自分に向き合ってくれた。
……織斑、一夏さん。
初日に顔を合わせた時から、笑みを絶やしてない男。だがその仮面の下には、灼熱のような荒々しい魂を持った男。一挙手一投足、一太刀ごとに洗練されていく動き。
二人の戦いの中で見せた動き、荒々しい気迫、此方の挙動一つ見逃さない視線、思い返すだけ顔が熱くなる。

「おやおやぁ～？オルコット家のセシリアさんは、何故顔が紅くなってるんでしょうか～？」
やっぱり目の前の人は喰いついてきた。
「い、良いでしょうッ!?個人の自由ですのよ!?」
「そりゃぁ、まあね。……で？どっちに惚れたの？」
「お二人と付き合えたら毎日楽しいですわよねぇ……」
「え？」
「はい？」

◆

――観客席・片隅
更識簪は、同居人に恐ろしさを感じていた。
勝った事に対しては喜ばしくはある――が、試合の経過を見ると、そんな事は吹き飛ぶほど衝撃的だ。
まず単一仕様能力の存在。一次形態での発現は、現在まで前例が無い。織斑君が見せてくれた資料に『零落白夜』の事には触れて無かったから、本当に一次形態での発現か、もしくは篠ノ之博士が〝何か〟したか、だ。
……後者だとすれば、雪片弐式が怪しい。
だってそうでなければ、かの篠ノ之博士が形状を似せた物に〝雪片〟の名を付ける筈が無い。
……でも、あの操縦技術は異常……！
だが、もし隣に座る人がソレを可能とさせたのなら、
……私、やっぱり出来損ない。
「何か勘違いしてるみたいだけど、私が彼に教えたのは、ＩＳの基本的な動かし方と、初歩の機動パターンだけよ？」
「え？……あっ」
考え事に没頭しすぎて、初めは何を言ってるのか分からなかったが、すぐに自分の考えている事がバレているのだと理解し体を縮こませる。

だが改めて考えれば、
……確かに。
彼が行ったのはマニュアル操作での機動、実弾系兵器の回避、瞬時加速。確かに初歩の技術。後は彼自身の身体能力と剣の腕前、そして私が協力した射線予想プログラム。
けど、と内心で続いた思考は、
「近接型と遠距離型の戦闘は、歯車の噛み合い、です」
「敬語は付けなくても良いわ」
断る。
「最初、有利だったオルコットさんですけど、噛み合い一つで、織斑君にも勝機があると思い、ます」
例えるならシーソー。公園にある、梃子の原理を用いたあの遊具。
実力が拮抗していれば勝負は千日手。だが、少しでもどちらかに傾けば、すぐに勝負は決まる。ソレが射撃型と近接型に特化した者達の戦い。
今回の試合は、最初こそオルコットさん側に『勝利』が傾いていたと思われていたが、実の所、最初は拮抗状態。勝敗が傾いた切欠は、織斑君が『零落白夜』を発現し始めてからだ。
……アレで、織斑君の思考が一度リセットされたから。
「そうね。それに、セシリア・オルコットは思考錯誤の段階であるＢＴ兵器を使用していた。彼女が純粋にスナイパーオンリーで戦っていたら、――まあ、８割って所ね」
当然、セシリア・オルコットさんの勝率が８だ。
けど、と内心で思った事を、隣の存在が口に出した。
「それでも異常でしょ？」
「っ……」
隣にいる人物と同じ考えらしかった。
「基礎中の基礎。たったそれだけを叩き込んだだけなのに、もう代表候補の一角と戦い、勝利をもぎ取れる段階にまで届いたわ」
それも、ＩＳを動かして間もない期間で。確かに、傍から見れば異常に映るだろう。

だが、と更識簪は最初とは違う意を唱える。ＩＳは空も飛べるし、音速を叩きだす移動速度を誇るし、量子化して多種多様の武装の携帯を可能とする――が、忘れてはいけないのは、ＩＳはパワードスーツでもあるのだ。

……あの戦闘能力は、まず間違いなく織斑君自身の力……ッ！

入学してから彼は毎朝ランニングに行くし、剣の型の反復もしていた。隣に居る人の厳しい訓練も行っていた。夜もギリギリまでプログラミングをして、あのシステムを構築した。

……織斑君は、努力してるっ……！

ソレを、隣に居る人も知っている筈なのだ。

なのに、

「天才ね」

隣の存在は、その一言で彼の努力を無いモノとした。

「ちが、う……ッ！」

立ち上がり、隣の存在に、――自らの姉の正面に立った。

何年か振りに姉の顔を正面から見る。外ハネした水色のショートヘアー、似通った顔立ち、そして自分とは正反対の、真っ直ぐで強い光を宿した朱色の瞳、大きく実った胸部。

……ま、負けないっ！

「織斑君は、天才なんかじゃ無いっ。プログラミングは、寝る時間を削ってまで、長年に渡って組み上げた幾つかのアルゴリズムを組み合わせて、何度も悩んで、思考錯誤を重ねていたのを知っている！彼の手に出来たタコは、ずっと剣を振り続けて出来たモノだって、私は知っている。　料理だって、上達するには長年の積み重ねが必要だ。全部、織斑君が血の滲む努力をして身につけたんだよっ!?――おねっ、お姉ちゃん、知ってるよねッ!?」

「ええ知ってるわ」

「え――」

「貴女と同じよね」

お姉ちゃんは、笑っていた。

「ふふ、結構久しぶりね。簪ちゃんがそんな風にハッキリと物事を言

うのって。――それが異性の男の子ってのはー、お姉ちゃん的に納得いかないけどっ、いかないけど……ッ！」
まあ、と言葉を繋げ、
「彼をダシにしちゃったけど、簪ちゃんの本音――ああ、本音ちゃんの方じゃないわよ？本心の方、ソレを聞けて良かったわ」
お姉ちゃんは立ち上がり、私の頭に手を置く。
「それで良いのよ」
「……良い？」
「良いの。簪ちゃんが私の真似をして、ＩＳを一人で組み上げようとしているのは知ってるわ。――でもね？もし心のどこかに認められたい、見返したい、追い越したいって想いがあるなら、真似だけじゃダメ」
頭から手が離れ、今度は両手で頬を抑えられ、強制的に真正面に向き合わされ、
「追い越す気で来なさい。貴女自身のやり方と〝力〟で」
「……ん。絶対」
「ええ、待っててあげるわ」
かなり上から目線の発言だが、これこそＩＳ学園生徒会長だろう。
「さて、やることやったし、私はもう行くわ」
「……二人のは、見て行かないの……？」
「ＩＳの情報は知ってるし、二人の戦いはもう見たわ。それに、ＩＳ学園の生徒会長はやるべき仕事が多いの」
背を向け、出入り口に向かって歩き出すお姉ちゃ――生徒会長。確かに私達一般生徒とは違って、生徒会の仕事は大変だろう。今年は二人の男子生徒が居るし。
……その割に、本音は結構暇そうにしてた……。
多分、戦力外認識。何故生徒会に入ってるのだろう。
それはともかくとして、最後に何か言おうとしたが、さっきまでとは打って変わって、何を言えばいいのか分からない。
「えっと、その、――お仕事、頑張って、下さい……」
「ふふ、有難う。貴方も頑張んなさい。――ああ、簪ちゃん。一夏君に

伝えといて、『しばらく訓練は中止、怪我が治るのを優先ダゾ☆』って」
そう言い残し、会長さんは歩き出す。
その後ろ姿を、見えなくなるまで見送る。
……だ、だぞ……？
取り敢えずその件は置いといて、織斑君の試合を見守ろうと思い椅子に座り直す。
「……だ、だぞ☆、――無理……ッ！」
顔から火が噴きそうだった。

◆

試合会場から出てしばらく歩き、辺りを見回し、誰も居ない事を確認。人気０なのを確信し、手を鼻に近づける。
「簪ちゃんの匂ぃ」
ああ、たぶん私、いま他人に見せられない顔してる……！　と自覚しつつも手の残り香と感触、脳裏に刻み込んだた彼女の声を反芻する。
一夏君の言っていた通り、簪ちゃんは私を真似ようとしていた――それは正直嬉しい。
真似ると言う事は、彼女の中の『私』は〝そう在りたい〟〝そう成りたい〟と言える存在だと言う事だ。
でも、
……私が歩きて来た道は孤独よ。
才があった為に、更識の次期当主として育てられた。それが苦痛とは思わない。
……私自身、そうなるのが当然って感覚だったしね。
そして、周りにいた子達は全て更識の系列の者。付き合いがあるのもすべて『更識』。故に、周りが友人だと思ってる子達は全て部下だった。
もちろん普通の子とも知り合いになるが、何でも話し合える仲などただ一人も居ない。

そんな中、唯一とも言っていい存在が更識簪だ。
〝知り過ぎた更識〟　とは対照的な　〝何も知らない更識〟
純粋に姉として慕ってくれたのが嬉しかった。無邪気に笑い掛けてくれるのが、どんなに癒されたか。私の身を、〝楯無〟としてではなく〝刀奈〟として心配してくれた事に、どんなに救われたか。自分が段飛ばしで得てきたモノを、努力して乗り越えて来る姿がどんなに羨ましかったか。
そして、
「簪ちゃんは、私に無いモノをもう得てるのよ……？」
友人と言う、他人同士が仲良くなった時に得られ、〝普通の人〟が持てる縁。
此処最近、簪ちゃんのクラスメイト達が良く話しかけているのを知っている。織斑君情報欲しさに近づいて来ている娘も居るが、彼女の趣味を知り仲良くなろうとしている娘も居る。純粋に仲良くなろうとしている娘も居る。――そして、そんな娘達に心を開こうとしている事も知っている。
「全く。お姉ちゃん、一夏君に嫉妬しちゃうわ」
切欠は織斑一夏と同室になってからだ。
おまけに、入学前の食事の不摂取や睡眠不足からくる髪や肌の荒れがあったのだが、先程触れた簪ちゃんの肌は綺麗になっており、目元に隈も無かった。
彼が食事の管理や精神のケアもしていたのだろう。恐らく、日常的にさりげなく。
……餌付けってやっぱり基本なのね。
私がしたいくらいだ。
でも、しばらくはその役目を一夏君に預けてあげる。その変わりに私には私の、簪ちゃんとの唯一無二の繋がりが出来た。
その事を思い出し、笑いが込み上げてくる。
「会長？」
「あら？虚ちゃん」
通路の対面から、虚ちゃんがやって来た。

「本音ちゃんの方に行ったんじゃなかったの？」
「もう終わりました。お嬢様と妹様と違って擦れ違ってませんから」
グサリと打鉄用近接ブレードが胸に刺さった気分になった。
「それで、どうしたのですか？そんな怪しい笑い声をお出しになられて」
「虚ちゃんの棘のあるツッコミを久しぶりに聞いた気がするわ。――ねえ、虚ちゃん。簪ちゃんがね、私を追って、倒す為に頑張ってくれるって」
「次期生徒会長の座は心配なさそうですね」
「あ、あら？何かあっさりしてないかしら？もっと、こう、私が負ける事に何かないの？」
「仕事が溜まってますよ、会長」
「あれぇ?!なし?!て言うか、虚ちゃんが全部処理してくれたんじゃないの?!」
「此方で処理できるモノはしておきました。ですが、会長直々の判断が必要なモノは分けてあります。……枚数にして段ボール2箱分はあるかと」
「多い……！」
確かに5日間放心状態、一夏君の扱きで2日の計7日、つまり一週間は仕事が手付かずだったとは言え、まさかそんなに溜まるとは思ってもいなかった。
……けど大丈夫！私には簪ちゃんの匂いと声と感触があるから！
それに、先程簪ちゃんの周りに散布したナノマシンが、簪ちゃんの画像と声を私に届けてくれている。
……そう、今も『試合を待ち遠しそうにしている簪ちゃん』の様子を送って――、
『……だ、だぞ☆、――無理……ッ！』
「っ！」
「会長?!行き成り鼻から血が出てッ！しっかりして下さい!?会ちょッ、お嬢様ぁぁああ!!」

一夏ｖｓ亮斗

カタパルトに足を固定。
「弟君」
傍らに居た坂地さんが声を掛けてくる。
「取り敢えずの応急処置として打鉄の腕を取り付けたんだが、動きに問題は無いかい？」
手を開閉し、調子を確かめる。
「ありません。感謝します、坂地さん」
少しぎこちないが、パーツの問題では無く、本体である俺の左腕だろう。血は止まり傷もある程度は塞いだが、激しい動きをすればすぐにまた開く、と診断されている。
……裂けるかもなあ。
更識さんとの約束は少しだけお預けだ。こんな手で料理なんざ衛生上悪いし、食材に対して申し訳が立たない。
「それで、勝機はあるのかい？」
「負けに行くつもりはありません」
「うん、良い返事だ。――キミとはまた話しをしたいね。設計力はまだまだまだまだけど」
まだ、言い過ぎです。
「キミが考えるアイディアは結構面白い。……タバネが興味を持つ訳だ」
「その所為で今、こんな苦労してますがね」
「良い事じゃないか！未知の体験は心が躍るよ?!」
否定できないから困る。
『無駄口はそれまでだ。準備は良いか？一夏。あと坂地、お前はさっさとこっちに来い。邪魔だ』
スピーカーから姉さんの催促が来た。
「相変わらず厳しいねぇ、……それがまた良いんだが」
今なんつった？この人。

「時間の様だね。健闘を祈るよ」
「……ええ」
坂地さんが退出するのを見届け、俺もピットから飛び立つ。
対面側のピットを見ると、亮斗も飛び立つ所だった。初戦と同じ場所まで移動し、静止。初めに口を開いたのは亮斗からだった。
「よう。ボロボロじゃねーか」
「どっかの誰かさんの所為でオルコットがマジでな」
そう言いつつ亮斗の纏う黒式を観察。
……全体的な感じは白式と似ているな。非固定浮遊武装は背中に、腰の両側面にあるアーマー、先っぽが尖ってるから、もしかしてスラッシュハーケンか？
俺が描いた穴だらけの設計図の中の内の一つ。ソードブレイカーの様な二又の鏃に有線式の武装だ。もし束さんが俺の描いた設計図の幾つかを採用して造ったのだとしたら、
……やっぱりか。
注意深く《黒式》を見ると、左右のアームの肘側が少し盛り上がっていた。恐らくは右に折り畳み式の『短剣』、左には伸縮式の『短槍』が収容されている筈だ。
……取り敢えずざっと見た感じ、
「お前、モルモット扱いだぞ？」
「やっぱ、そー思うか」
白式が『完成された機体』に対し、黒式は『取り敢えずオモシロソーだし積んでみた☆どお!?いっくん!?』と言った感じ。要は実験機。遊び半分で組んだ機体と言っても可。
「良かったな。束さん、お前の事はモルモット程度には認識してるらしいぜ」
なんとも言えない顔をされた。
『おいバカ二人。準備は良いな？』
「「バカは酷い」」
と言うか、教師としてその言葉遣いは良いんだろーか？
『良いようだな。――では3回戦目、試合開始!!』

合図が為された。
意識を日常から、戦闘へと切り替える。そして俺達が初めにした事は、
「は！やっぱりバカだな、一夏」
「お前ほどじゃない、バカ亮斗」
一足の距離まで近づき、お互いの武器を具現。正眼に構えで、武器を交叉。
剣道における試合開始の構えだ。
「ソレが雪片弐式か、――良い得物だな」
「俺が持つにはちょっと重いけどな。――それに、〝識って〟るんだろ？この武器の機能」
「まあな。それはお前だってそうだろ？俺のルガーランスⅢ。名前と云い、こんなの思い付くのはお前ぐらいなもんだ。……束さんにデータ渡したのか？」
「パクられたってのが正解だな」
「あっそ。……いい加減始めるか」
接触は一瞬。剣と槍の腹が接触し、
「オォォォッッ!!」
「ハァアアアッ!!」
一閃。お互いに放ったのは袈裟懸け。それが両者の間でぶつかり、火花が散る。
「「……っ！」」
剣を戻す。
「シッ――！」
二手目は亮斗の方が速かった。俺から見て、左からの胴薙ぎ。それを後ろに下がる事で避ける。

◆

……強い。
それが亮斗の、一夏に対する評価だ。今も踏み込んで放った胴薙ぎ

だが、アイツのエネルギーシールドを削れた手応えがしなかった。
ＩＳを扱う上で重要な事は、〝どれだけＩＳの事を理解しているか〟だ。つまりＩＳを乗りこなすには、搭乗時間の多さでは無く、ＩＳそのもの対する知識、つまりハード面だけでなくソフト面の知識も必要になってくる。
その点、一夏が持つ知識は馬鹿にならない。
武装や機体情報に関しては公開されている範囲でしか知らないと思うが、全てのＩＳ共通点であるＰＩＣやシールドエネルギー、ハイパーセンサー、コアネットワーク、絶対防御の発動条件などと言った基礎中の基礎の知識。そして、それ等を動かしていく為のプログラミング技能に関しては、専門職の人間と話しが出来るレベルだ。つまり、
……野郎、シールドの範囲を絞りやがった……！
シールドの展開範囲を体や機体ギリギリまで縮める事で、シールドエネルギーを削られる回数を減らしたのだ。
けれど弱点もある。
シールドの展開を判断するのはＩＳ側にあるので、人体に近ければ近い程、その分シールドの展開が急ぎの展開になる。ついでに言えば、此方の攻撃が強ければ絶対防御が発動する。
要は高火力の攻撃を当てるか、手数で押しきるかってとこだな。
……そういう戦い方は、黒式の得意とする戦術だ。

◆

薙ぎの一閃を避け後ろに下がる最中、亮斗が手にしていたランスを量子変換し、拡張領域へ戻したのを一夏は目にする。
……手数で攻める気か。
《白式》には出来ない戦術。ちょっとムカつく、自慢かコラ。
そう思っている間に《黒式》の左右のアームの外側が開き、右手に直剣、左に短槍を握る。そして、
「行くぜ！」

声と同時に加速。フェンシングの様に右の直剣を突き出して来る。
その刺突を後ろに下がりつつ、縦に構えた雪片でしのぎ――視界に鉄の鏃が視界に映る。
体ごと右に捻る。先程まで左目のあった場所を短槍が突きぬけた。
「避けやがった?!」
「避けるわーー!!」
引き戻そうとする槍の柄に向かって、下段からの振り上げの一閃を放ち、
……零落白夜！

◆

一瞬の交叉。
その一瞬で、短槍が柄から二つに断ち切られた結果だけが残った。
……展開が早え!!
『零落白夜』。作中で〝織斑一夏〟が駆る白式の、代名詞とも言える圧倒的攻撃力を誇る単一仕様能力。何物をも斬り裂く無双の一刀。ソレが今、目の前にあり、すぐに元の鋼のブレードに戻った。
覚えている〝知識〟では、発動したら単一仕様能力を切るまで発動し続ける能力だったので、多分自動で能力を強制停止するプログラムでも組んだのだろう。
……坂地さんも白式の応急措置をしてたみたいだしな。
まあそれはともかく、初めて見た零落白夜の感想と言うと、『美しい』の一言だ。
雪の様に白く、存在する事で、身を切る事さえ厭わない研ぎ澄まされた抜き身の刀。まさしく織斑千冬を現している。
その鍛えられた一刀が、最愛の弟である一夏と共に在る。
……羨ましいなチクショウ！
俺は前世も含めひとりっ子だ。兄弟・姉妹が居る感覚が分からないので、ソレを持っている一夏が羨ましい。ソレが例え、家事が駄目で身内には厳しい性格だろうと、綺麗なお姉さんとくれば尚更だ。

そんな想いを込め、隙を狙った一撃は見事に防がれた。
……相変わらずバカげたスペックだな、オイ。
本当に目立つのが面倒なら、その高スペックなステータスを隠せと言いたい。家事も出来て、頭の出来も良くて、容姿も整ってて、運動神経も良いから女子にかなりモテるのに、鈍感でも無いのに原作みたくとことんフラグを折っていくとかマジふざけてんのか!?
……ああ、思い出したらマジムカついてきたっ!!

◆

「ハ！　当たれば一撃必殺?!ガード不可?!要は当たらなきゃ良いんだろッ!!?」
「隠し武器満載?!手数で勝負!?全部叩き潰せば良いじゃねえかッ!!」
亮斗が断ち切られた柄を捨て、短剣を両手で持ち、脇構えで接近。
傷口が開いた左手を柄に添え剣を縦、八相の構えで一夏が迎え撃つ。
「「テメェ！斬るぞ!!」」
同時に言い、
「ハーケン!!」
牽制で亮斗が左のハーケンなアンカーを射出。レーザー有線式のソードブレイカーが一夏の胸部に向かって突き進む。
ソレに対し、一夏は構えを変える。右横に縦構えの雪片の刃先を、正面の左向きの水平持ちに変更。そしてタイミングを見計らい、
「ッ――！」
身体を左に移動させながら、柄尻で打撃。ソードブレイカーが一夏の右後ろへと飛んでいく。
対して、一夏は攻撃に移す。方法は刺突。狙いは一番早く届く顔面。
「クッ……！」
それを亮斗は右にズレ、さらに自身を縦軸にしてロール。短剣が一夏の左側をかすめる軌道をなぞる。

亮斗の狙いを察した一夏は、左腕を柄から離し、振り払いつつも自身の位置を微修正。左の非固定浮遊武装を、亮斗にぶち当てる軌道を取る。
そして、
「ぐ……ッ」
「ッ゛!!!」
激突。
亮斗は一夏の非固定浮遊武装に叩かれ、短剣は剣腹を叩かれたのか、半ばからたたき折られていた。
対する一夏は、折る為に強く叩いた衝撃で更に左腕が激痛に襲われ、思考がリセット。
両者とも行動が止まるが、ＩＳは止まらない。数コンマの間で既に2メートル程の距離が空く。
「ま、まだまだあ!!」
逸早く体勢を立て直したのは、亮斗だ。
身体を動かし一夏の方を向き直り、折れた短剣を投擲。
「――っ、あ、ああっ、まだだッ!!」
そこで一夏が復帰。
だが構わず左の腰部を外し手に持ち、右手にルガーランスを抜き一夏に向け、
「一夏ァァァァ!!!」
フルブースト。
その間、一夏はハイパーセンサーで捉えていた短剣をＰＩＣ操作で機体を動かし回避する。
「亮斗ォォォォ!!!」
後ろに下がりつつＰＩＣ操作で停止。弐の太刀に構え、前に向かって加速。
お互いの得物が型を変える。ルガーランスは剣先から二つに割れ、プラズマが発生。雪片は刀身が消え、鍔が上下に開放。
「――勝負ッ!!」
一夏が動きを止める。

ルガーランスからレーザー砲が放たれ、零落白夜の光刃がそれを打ち消しながら一夏が再加速。
お互いのシールドエネルギーがガリガリと削られていき、
「あ、やべ」
零落白夜の発動設定時間が過ぎ、光刃が消失。レーザー砲が一夏を呑みこんだ。

◆

亮斗は止まらない。
事、戦いにおいては冴える感が〝敵〟が居ると訴え、高まった集中力が思考を加速させ、ただ敵を打倒する為に身体が動く。
撃ち終わりと同時、腕を引く動きながら開いた砲塔を――、
……いや、このままだ。
――閉じず。そのまま二の太刀へと構える。
……来る……！
「――オオオオオ!!」
その通りに光を突きぬけ、一夏が吶喊して来る。すぐさま白式の状態を確認。
雪片は融解して使い物にならない。右のアームと両脚、非固定浮遊武装の装甲はボロボロ。一夏本人も額から血が流れている。結論として、
……よくもまあ、動いてられる……っ！
パイロット、ＩＳ共に限界に近いだろう。だがそれでも戦いを止めないのは、諦めが悪いのか、アイツの自壊願望か、それとも新しく〝芯〟を得たか。
だがそれでも、
……向かって来るなら倒す。
篠ノ之流。子供の頃からずっと続けてきた剣。
初める切欠は、強くなる為と、篠ノ之箒（ヒロイン）に近づくためだった。けど、続けていく内に篠ノ之箒との繋がりとなった。ＩＳが生まれ、篠ノ之

家と別れた後は、彼等と唯一繋がっているモノだった。
そして、１０年。研磨し続けた技は、黒式と言う剣を得、業へと至る入り口に辿りついた。
……だからよ一夏、
「男の一途を舐めんなッ!!」
身体を下へ。ルガーランスが拳の下を滑り通り、剣腹でかち上げる。上げた腕をそのまま振り回し、狙いは一夏の胴へ。
対する一夏も動く。避けられたと察するや否や、膝を動かすのを捉える。
その事に、やっぱりな、と内心で呟く。
あの時もそうだった。コイツのコレは、負けず嫌いなのではない。ただ単に〝身体が動くから〟という理由で動いている。だが、そんな死に体の動き、
……見えてんだよ
だからと言って、油断も慢心もしない。動けるから戦うのなら、動けなくさせるまでだ。
《黒式》が俺の思考を読み取り、ルガーランスに命令を送る。そして、開いたままの砲塔にプラズマが発生、
……やっぱり束さん、考え方がオカシイぜ!!
「シークレットモード」
その砲塔を閉じる。
プラズマが内部で膨れ上がり、刀身から光が溢れる。その光がルガーランスの周りを覆う様に形成。
待機中に思考を巡らせ、坂地さんにも考えを聞いて〝一度だけ〟ならと言われたオリジナルの技。
……その名も、
「月光!!」
プラズマで形成された光刃が白式の脚部を焼き斬り、そのまま振り抜く。剣の軌跡をなぞるように、その直線状にエネルギー波が放たれた。
黒式がルガーランスの状態を察し、再び砲塔が開口し、余剰熱を放

出。

『勝者！木場亮斗！』

彼女が選んだ道

「っ……！」

会場中から歓声が湧き、その音がやけに頭に響く。

試合中、何度も集中高まった時があったから、それの疲労だろう。あとちょっと気持ち悪い。三次元機動し過ぎた。

何度か頭を振ってると、墜落してく一夏を見つける。

……ああ、そう言えばＰＩＣ詰まってる脚部斬ったんだっけ。

痛む頭を堪えて反転、加速。墜落していく白式の脚部を掴む。一夏が逆さ吊りになってるが無視。だって勝者だし。

「俺の勝ちな」

「チッ、お前、ホントに初心者かよ？」

「鏡見て言え」

普通、ＩＳ動かして数時間の奴は代表候補生に勝てねぇっての。この逸般人め。

そんな感情を込めた目で見ていたら、一夏が腹筋だけで９０度程身体を曲げ、俺を見る。

「なんだよ、〝この逸般人め〟って言ってる様な目は？」

エスパーかコイツ。

「一夏こそ、今の状況分かってんのか？落とすぞ？」

「頼んでねぇし、落としても救命領域対応モードになるだけだ」

「人目がある場所で出来るかっ」

人目が無いなら良い、と言う問いは無い。だってヤる時はヤるのが俺達流。

お互いが悪態を吐きつつも、俺が発進したピットへ戻る――その寸前、俺から話しを振る。

「で、一夏、これからする事は分かってるか？」

「なんだ、お前も同じ考えか」

「付き合い長いからな。平常時なら大体予想が付く」

「いやな付き合いだ」

「乗らないのか？」

「面倒事は極力放り投げる主義だ」
ニヤリ、とお互いの頬がつり上がる。
ピットに入り、一夏を放す。白式ごと床に転がり、その後ＩＳを解除して――そのまま動かなくなる。
それを見つつ、俺も黒式を解除。気が抜けた瞬間、平衡感覚を失い、
「男は、倒れる時だって前のめり……っ」
宣言通り前のめりに倒れる。右腕だけ前に伸ばすのがポイントだ。
「オイ、アホな事やってないで、とっとと千鶴さん呼んでこいよ」
「お前が行けよ敗者」
「はあ？こっちは怪我人だぞ？お前こそ、なんで倒れてんだよ。無傷だろ？」
「うっせ、頭に響く」
「聞ーてんですかー！りょーうーとーくーんーー！」
「こ、この野郎……ッ」
罵り合ってると、ピットのドアが開く。
「りょ、亮斗!!一がぁッ!?」
「私の黒式と白式ィィィィィィ!!」
最初に箒が顔を見せ、続いて箒を押し退けるようにして奇人が突入して来た。一気にテンションが下がり、疲労がどっと押し寄せてきた。
当の坂地さんはと言うと、疲れきっている俺達の様子などお構いなしに近づき、あっという間に待機状態のＩＳを剥がし、手持ちのＰＣに繋げ空間投影モニターを表示。食い入る様に調べ始めた。
入ってから僅か1分の出来事である。
そして、開いたままのドアから白衣の女性――千鶴先生が入って来る。
「あっ！と、遠見先生！急患っ、急患です!!」
「あらあら、だから激しい運動すれば傷口が開くって言ったのに」
言いながら一夏を診始める。
その間、俺も自分なりの応急処置として仰向けになって目を瞑り、深呼吸繰り返す。

……ちょっとは楽になった、気がする。気がするだけだが。
「ちょっと傷口見るわよ」
「へぁッ?!」
横目で見れば、千鶴さんが一夏に悲鳴を上げさせながら診断してる。
……アレよりはマシだな。
「あー、坂地さん?」
「あぁ……、最高だなぁこの二機!まだ穢れも知らないまっさらな装甲も良かったけど、戦闘後のこの壊れっぷりもまたイイ!――ああ、解体したい……っ!っと、何か用かい?亮斗君」
「……ええ、俺達の機体ってどんな感じです?」
「そうだねぇ……、黒式は武装と非固定浮遊武装の損傷を考えるとダメージレベルBって所だね。白式は両腕、脚部がダメ。非固定浮遊武装も小破、主武装の雪片も破損。……うん、もしかしたらレベルDまで逝くかな?コレは」
うわぁ。俺自身も幾らかその要因だけど、搭乗初日で大破判定って多分新記録なんじゃないか?つーか原作よりもかなり酷い。
……当の本人は何でか知らんが満足気だし。
「あら何ドヤっとしてるのかしら?貴方、今の自分の状態分かってるのかしら?一夏君?」
「あっ、ちょッ!?千鶴さんっ?!あの、かなりっていうかめがっさ痛いんっすけどっ!」
「せ・ん・せ・い、よ。もう、ちょっと大人しくしなさい」
「こ、この痛みを我慢しろとぉおおおっ?!」
その態度を見た千鶴さんに腕を捻じられ、キモチワルイ喘ぎ声上げる。
「うわぁ……」
箒と二人で引いた。
「坂地、その二機はどんな状態だ?」
何時の間にか、千冬さんが真耶ちゃんを連れて入って来ていた。
その問いに坂地さんは肩をすくめ、

「自己修復よりパーツを交換した方が早い。あと、ここの設備じゃ時間が掛かる。倉研に搬送した方がもっと早い」
「時間は？」
「機体データはもう写してあるし、二機とも同系統の機体だ。打鉄の部品とも相互性があるし、細かい設定ならこっちでも出来るから……11日って所かな？」
「一週間で頼む」
「おおう、チフユの無茶な頼み事も久しぶりだ。ふむ……、工場フル稼働で何とかなるか」
「なら6日で頼んだ」
「こ、この鬼要求！国家代表時代を思い出すじゃないか！楽しかったね!!」
　楽しかったのか。っーか、ホントに知り合いなんっすね。
「千冬姉って、兎と弓子さん以外にも友達が居だはッ――」
「取り敢えず寝ろ一夏」
　一夏が自爆。頭を一蹴され気を失った。
「もう千冬ちゃんったら。恥ずかしいからって、怪我人を苛めちゃダメよ？」
「む、すみません千鶴さん。以後は場所と相手の状態に考慮します」
「よろし。一夏君も大人しくなったし、さっさと保健室に運びましょうか」
「「うわぁ……」」
「あはははっ!!」
　俺と箒は再度引いて、坂地さんは指を差して笑い、千鶴さんが気絶した一夏を運んでいく。
　……っておい、俺に丸投げかよ。
　一夏が居なくなった事で、これからしようとする事を俺一人でやる事になってしまった。
　一瞬、このまま原作通りにしようかと思ったが、後々の報復が面倒なので作戦通りにやる事にする。
　大分身体の感覚が戻って来たので、ゆっくりと体を起こし、立ち上

がる。
「だ、大丈夫なのか？亮斗？」
「――っ、あ、ああダイジョーブダヨ！」
その際、箒が身体を支えてくれてたが、右腕がそのたわわに実ったブツに挟まれ、役得だと思って放置。
「あーっと、織斑先生に山田先生。少々相談事があるんですか」
「何でしょう？木場君？」
「ふん、言ってみろ。どうせ外道な擦り付け合いだろうがな」
何の事か想像できない真耶ちゃんと、流石に付き合いが長いだけある千冬さん。二人の対応に苦笑しながら。内心、千冬さん厳しい、と思いつつ考えていた内容を話す。

◆

――保健室
全身の痛みを覚え、目を開ける。
まず目に入ったのは、白い天井と視界隅に映るカーテンだった。
……コ、コレはアレのセリフを言う絶好のチャンス……ッ！
「し、「知らない天井ね」らな……んん？」
セリフを取られ、聞き覚えのある声がした方に視線を向けると、隣のベッドに横になってるエロゲ好き生徒会長が居た。その鼻に、恐らくガーゼで作られた詰め物が見えたので、何が原因で此処に居るのか察した。
……まあそれはそれとして。
言いたい事を言われ、恨みがましい視線を向け口を開く。
「何で此処に居るんですか？会長？」
「あら……？一夏君こそ、何で此処に居るのかしら？ああ、負けたのね」
ぐ、と言葉に詰まる。その仕草に、エロゲ好き会長は結果がどうなったのか納得顔をした。
「へぇー負けたんだー。ねえ今どんな気持ち？2日間で出来る限り訓

練してコンディションバッチリな状態で挑んだのに才能差で負けた気持ちは？ねえ!?」
「鼻栓してるくせにマジうぜぇッ……!!」
「コレは簪ちゃんへの愛を洩らさない為の蓋よッ！」
「ヘコまねーなこの人……！」
　コレ以上の門答は流石に時間の無駄だと察し、話しを変える。
「真面目な話。更識さ――妹さんとは話しが出来たんですか？」
「ええ。パソも返してもらったし、ついでに宣戦布告もされちゃったわ」
「へぇ、中々に剛胆な発言じゃないですか。なんて言われたんです？」
「ああ、それは――」
　言う途中で何かに気付き、すぐさまベッドから降り掛け布団を整える。そして、
「一夏君！」
「はい？」
「私は此処に居なかった、良いわね?!」
　訳が分からないが、取り敢えず了承の返事を返すと、それじゃあ宜しく！と言って隠れた。
　その直後、ドアがノックされた。シスコン会長の行動の意味が何となく予想出来、入室を促す。
「えっと、し、失礼しますっ」
「おーりむー、だーいじょーぶー？」
　予想した通り、入って来たのは更識さんとのほほんさんの妹コンビだった。
　俺が寝ているベッドは入って手前のベッドなので、二人とも入室してすぐに俺を見つけ、更識さんは安堵の表情を浮かべ、のほほんさんは笑顔になって此方に来る。
　……癒されるわぁ。
「あの、織斑君。その傷……」
「痛そー」
「まあ、しばらくは使用不可だろうな。……その、悪い約束守れなく

て。この腕じゃしばらくご飯作れないわ」
流石にこんな手で料理をする訳にはいかない。一応、左手でも箸とかは使えるので日常生活の方は問題ないが。
「き、気にしなくて……良い、よ……」
「そん、な……おりむーのごはんが食べられないなんて……かんちゃん、私、夜はどうしたらいいの……？」
……そんなに楽しみだったか。
明らかに二人のテンションが下がった。
部屋の何処からか、刺すような視線。雰囲気で分かる。〝コレ以上悲しませたらどうなるか……分かってんだろな？あ〟？〟と言う圧を感じる。
「あー、取り敢えず座るか？」
「あ、うん」
勧められるまま、更識さんはベッド横に椅子を持って来て座り、のほほんさんは更識さんの後ろから抱きついた。物凄く自然な流れだった。
「もう、本音」
「えへへ～、かんちゃんいーにおーい」
しかもよくある行動の様で、更識さん自身も振り解こうともせず、のほほんさんのなすがままにしている。
……凄く……眼福です。
「そ、そう言えば、……お姉さんとは話せたのか？」
さっきダメ会長に自慢げに話されたが、今は〝更識楯無は保健室には居なかった〟という設定なのだ。
……だからうん、のほほんさん？さっきから部屋の隅っこ見ても誰も居ない事になってるからな……？
なんか、のほほんさんの凄い一面を見た気がする。
「うん。あのね、私、――お姉ちゃんに宣戦布告して来ちゃった」
可愛らしく宣言されても、言われた内容は改めて考えると凄い発言である。
……あんなのでも、実力で言えば世界トップレベルの実力者なんだ

よなぁ。
後、のほほんさん？更識さんの後ろに居るから気付かれてないけど、デスクの後ろには誰も居ない事になってるからな？
「そ、それでねっ、織斑君っ」
「ん？」
焦点を後ろに居るのほほんさんから、手前の更識さんに移す。
その更識さんは、顔を紅くしながら視線を合わせ、一度視線を外し深呼吸。再び視線を合わせ、大きく息を吐き。
「付き合って！」
「おお～、かんちゃんだいたーん！」
「――あ、ちがっ、えっと、その！あれっ！弐型の完成を手伝ってって言うつもりだったのッ！」
「ああうん、話しの流れから予想は出来たから大丈夫だ」
意外なのは、更識さんから言い出した事だ。
……正直言って、根詰まっても誰にも頼らない気がしてたんだが。
流石にそのレベルまで行ったら俺もさり気無く手伝うつもりだった。一体どんな話をしたんだか……。
「俺の知識で良ければ貸すけど、クラスの娘達は納得するのか？それとも手伝ってもらうのか？」
コレは重要な事だ。何せ更識さんは４組のクラス代表。他所のクラスが手を出していい問題じゃない。
……そう言えば、クラス代表の件はどうなった？亮斗の奴、目的通りに交渉出来たんだよな……？
「勿論、クラスの娘達にも手伝って貰えるかお願いしてみる。それも含めて、織斑君にもお願いしたいの」
「もっちろん私は協力する～。だって、かんちゃんのお願いだもん」
視線を此方に向けたのほほんさんが、先ほどよりも笑顔増しで言う。
……さっきから視線が感じられないんだが、シスコン駄会長生きてんのか……？
まあ生きているんだろう。

「一つ聞かせて貰って良いか？」
頷いたのを見て、言葉を続ける。コレが一番気になっていた事だ。
「それは、さっき聞いた宣戦布告の内容と被るのか？お姉さんと戦う日を決めたとか？」
首を横に振られた。
「違うのか。えっと、更識さんって確か、お姉さんを見返す為に１人で作り上げようとしてたんだよな？それが、何故に行き成りクラスメイトと俺に手伝いを頼みだしたんだ？」
「……最初は、そう思ってた。お姉ちゃんに認めて貰えるには、お姉ちゃんみたいに何でも出来るようにならないと、って」
不可能だ。完全無欠な人間なんて誰もなれない。姉さんや束さんだって欠点があるのだ。
……と言うか、その２人とも欠点だらけなんだが……。
そんな思考を余所に、でも、と更識さんが言葉を続ける。
「それは違うって言われたの。昔みたいに、まっすぐ、視線を合わせて『私を追い越す気で来なさい』って、『貴女自身のやり方と〝力〟で来なさい』って」
普段は行動とか発言がアレだが、ちゃんと締める時はきっちりしてんだな。
「それでね、考えたの。私が持ってる私自身のやり方を」
「それが、『手伝って貰う』か」
◆◆
織斑君の言葉に、首を縦に振って肯定する。戻した時に本音のむ、胸に優しく受け止められる。
……本音、何時まで抱きついてるんだろ……？
いや、振りほどかない自分も原因ではあると思う。だって、ちょっと自分には無いモノだけに、ウザいと思いつつも不思議な感触があって楽しい。
でも今は自分の事だ。
「最初っからね、気付いてたの。ＩＳ組み立てるのに、私一人じゃあ無理だって事は」

プログラミング能力では、納期ありみたいな期限付きの場合、焦ってミスるだろう。機体の製作能力は、本職からすればひよっこレベルかもしれない。

……そう言えば、さっき坂地さん居たから、ちょっとだけでも弐式を見て貰った方が良かったかも。

取りあえず置いとく。

まあ何が言いたいかと言うと、それを素直に認める事が出来なかったのだ。本当は大好きなお姉ちゃんに近づくためには、お姉ちゃんがやった事を自分も出来れば叶うんじゃないか、っと。

でも、

「お姉ちゃんは、〝それ〟だけが私に近づける方法じゃない、って言ってくれた」

まだ仲の良かった頃、私が駄目な事をしたら、目を合わせて叱ってくれた時の様に。

「私には、お姉ちゃんみたいに才能も技術力もコネだってない。顔だって、そんなに広くない」

それでも、

「私を応援してくれる一番の友だちが、どんな時も支えてくれるって言ってくれたから」

ソレを言われたのは、試合が終わり、織斑君のお見舞いに行こうとしてた時だ。

何処からともなく現れ、私の目を見たあとすぐに、

「私、かんちゃんのメイドさんだからー、かんちゃんと何処でも何時でもどんな時も一緒に居て、悩んで、支えるよー。あげちゃうよー？ホントだよー？」

と言われたのだ。

だから、

「私の周りにいる人たちを頼ってみよう、って考えるようになったの」

コレは、ある意味〝更識簪（わたし）〟にとっての始まりだ。本音が強めに抱きついて来る。

多分、今の私の顔は真っ赤になっているだろう。けど、後ろから物

理的に支えてくれる一番の友だちが居る。
羞恥に染まった顔を異性に見せるのはかなり恥ずかしいが、私が私自身の道を進む為に、織斑君の協力は必要だ。彼の独特な発想、プログラミング能力、新作の刀砲Ｐｒｏｊｅｃｔ情報、家事スキル、それ等に加えアニメやゲーム等の話題を共有できる人である事も大きい。
……ううん、ちがう、かな……。
一緒に居ると、凄く安心する。恋ではないと思う。コレは、マンガとかに居そうな〝優しいお兄ちゃん〟な感じだ。お父さんとも、お母さんとも、お姉ちゃんとも違う安心さ。
……あ、でもお義兄ちゃんってのもヤダ。
その呼び方をするという事はつまり、お姉ちゃんと籍を入れている事になる。二人が並んで居る光景を思い浮かべてみるが、「それはちょっと……」と否定と拒否の思いが来た。
どっちの何に対して、という疑問にも答えが無い。何せ、今だ目指(更)すべき場所(識刀奈)どころか、一歩を踏み出せても居ないのだ。
逆に言えば、進んで行く事が出来れば、〝どちらに対して〟〝どう思った〟のか分かるかもしれない。恐らく。多分。
……分からなくて良いかも。
でも取り敢えず今は彼の返事を聞く事だ。彼の返事はまあ予想出来るけど、それでも、やっぱりちゃんと答えを貰うべきだろう。
……だって、対等な関係で居たいから。
「私の進む道を、手伝って欲しいの」
言って、彼の顔を見る。
予想した通り、彼――織斑君は優しい笑みを浮かべながら、〝その一言〟を口にした。

クラスの代表

――試合の翌日

「――と言う事で、一年一組のクラス代表はセシリアさんに決まりました～、ハァ……」

山ちゃんがそう宣言して溜息を吐き、クラスの約全員が戸惑いの声を上げ、一夏がガッツポーズを取るのを、亮斗は苦笑しながら見ていた。

だが、一番困惑しているのは当のセシリア本人だった。

「あの、質問……と言いますか、疑問があるのですが？」

「はいー？何ですかぁ……？」

セシリアが手を上げ、山ちゃんが間延びした声で応じる。つーか、その態度は教師としては駄目じゃないだろうか……？

「何故私なのでしょう？確か、昨日の戦績は全員一勝一敗。こういった場合、今度はクラスでの投票ではないかと」

普通はそれが一番最初にくるのだが、ＩＳを扱うと言う特殊な学園事情と、セシリアが千冬の精神を煽った事による、えらく個人的な事な理由から来るものだったりする。

「説明しよう！」

セシリアの疑問に、眼鏡を掛けた一人の生徒が答えた。白の制服を着た男子生徒。つーか一夏だ。

「あの、一夏さん……？何故メガネを掛けているのでしょうか？」

「いやな？最近になって少し吹っ切れたんで、周りに居ない解説キャラでも目指そうかと思って」

ちなみにあの眼鏡、昨日売店で購入するのを見た。伊達メガネらしい。

……そう言えば、一夏のルームメイトって更識簪さんだっけ？なら仕方ないな。

アイツは『属性：妹』持ちの娘にはかなり弱い。どれくらい弱いかと言うと、友人である皆城総士（みなしろそうし）と蔵前果林（くらまえかりん）の妹、皆城乙姫（みなしろつばき）（現在中学二年）と蔵前乙姫（くらまえおとひめ）（同年）に結構な頻度で奢らされていたほどだ。い

や、むしろ自分から奢ってた気がする。
……つーか、日常的に節約を心がけてたみたいだから気付かなかったが、中学生にしてはかなり金持ってるよなアイツ。
それ以外にも、結構兄・姉持ちの娘（時々ショタ系の少年）には懐かれていた。
まあ、それが恋愛感情じゃなく、『頼れる兄』ポジションと言う所が〝原作一夏〟と同じようなフラグブレイカーっぷりだが。
「――と言う訳だ」
何時の間にか一夏の説明が終わったので話を纏めると。
一つ、俺と一夏は推薦組。対するセシリアは自分こそがクラス代表に相応しいと豪語した、言わば自薦組。
……言葉には気を付けようって事だな。
一つ、俺と一夏のＩＳは中破と大破。対するセシリアのＩＳはパーツを交換すれば早期復帰が可能な機体。
……こればかりは突如現れた機体と、国が関わった機体の差だ。図面が無い。
一つ、やっぱり強い人がなってくれた方が良いっしょ？
……学食の食券が手に入れられるチャンスが増すしな。
以上の３つ目の理由を千冬さんと山ちゃんに説明して、反対意見も出なかったようなので押しきった。唯一気がかりなのは、千冬さんが反論の一つも出さないで許可した事だ。
……なんかありそうだなぁ……。

◆

一夏の説明を聞き、セシリアは思案していた。
クラス代表。これになる事が出来れば、他の娘達と違い早い段階で試合に出場でき、『セシリア・オルコット』『イギリスの代表候補』『第三世代ＩＳブルー・ティアーズ』と言った〝名〟を売る事が出来る。
昨夜、本国に連絡を取った所、サラ先輩の言った通り代表候補生、相続権の保障と言った案件は〝一考の余地あり〟と言う沙汰を貰った。
従者であるチェルシー・ブランケットにも家の事を尋ねると、「企業や政府の方々から遠まわしに仕事が減りますと言われましたが、オル

コット家に関しては何も問題はありません。ええありませんでしたフフ……」との報告を貰った。最後の笑い声はなんですの。

つまりは評価が下がったが、現状に関しては変化なしだ。

……言い変えると、今後何もなければ〝そう言う事も在る〟と言う事ですわね。

政府の思惑は、コレを期に二人の内のどちらかと積極的に絡、――はしたないですわ！　取り敢えず親密な関係を結べ。あわよくば連れて帰って来い、と言ったところだろう。言われなくとも、お二方とは親密な関係を築かせて貰うつもりだ。

……ええ、出来れば親密！親密な関係が望ましいですわ！

取りあえず落ち着こう。

クラス代表をやる事には異存はない。寧ろ望む所だ。クラスの娘達からも、何でか知らないが受け入れられている。

ですが、

「その……私で宜しいのですか？私自身では亮斗さんか一夏さんのほうが良いのではないかと考えているのですが」

たった二人しかいない男性のＩＳ操縦者と言うこともあるが、好きな殿方にもっと輝いて欲しいと言う願いもある。それに同じ専用機持ちと言うことで、御二人の内どちらかと二人っきりの放課後授業の予定もあったがパーだ。

……まあ、輝きすぎて他の女性が惚れるかもしれませんが、お二人と結ばれるのは私です。今のところ敵は亮斗さん狙いの篠ノ之さんだけですし。

「「面倒だからパス」」

「あ、はい」

そう言えば、御二人ともご自身で代表になろうとした訳ではありませんでしたわねー。

「では反対意見も出ないようなので、改めまして一年一組のクラス代表はセシリア・オルコットさんと言うことで――――はぁぁぁ、良かったぁ。また揉め事とか起きなくて」

山田教員がなにかごにょごにょと言っていたが無視。ただお疲れ

さまでしたとだけ心の中で労っておく。
　周りからバラバラなタイミングで拍手が送られ、殿方二名がガッツポーズをし、
「よくやった亮斗!!」
「ったりめーだ！もっと褒めろ！」
　……そんなに面倒でしたか。
　嬉しさ半面、御二人が活躍できる場と二人っきりの放課後授業は諦めるしかない。別の方策を考えなければ。
「残念だがソレはない」
　織斑先生が入室早々、そんな事を言い出した。と言うかタイミング良すぎじゃありませんか……？
「千冬姉！頭がおか「それ以上言ったら縦だ」しくはないので黙りまーす」
　手慣れてますわねぇ。やはり織斑先生のような方でないと一夏さんはゲット出来ないと言う事ですか。見習わなければなりませんね。
「それで、先ほどの発言はどう言う事でしょうか？織斑先生」
「ああ、そうだったな」
　私の問いに、織斑先生は教壇に立つ。
「まあ簡単な話なんだが、ＩＳ委員会から今回の件を報告したら、『男性操縦者二名はなるべく多くＩＳに乗せて経過を報告するように』、との返答があった」
「えっと、つまりその……」
「ああ、ＩＳを使用する行事にはよっぽどの理由がない限り強制参加だ。ぶっちゃけ客寄せパンダとモルモットだな」
　お二人をちらっと見れば、何か悟ったような表情をしていた。

◆

　……ああ、うん。何かしてくるだろうなー、とは思ってたが。ＩＳ委員会かー。
「首尾よくいかなかったな」

「流石姉さん姉さん流石、としか言いようがない」
亮斗がこっそり話しかけてきたので言い返し、俺も愚痴る。
達観している俺たちを他所に、姉さんへの質疑応答は続く。
「先生！じゃあ来月のクラス対抗戦で、二人のうちどちらかが優勝した場合の食券はどうなるんですか?!」
「優勝は優勝。同じように扱うとのことだ」
ある者はガッツポーズをし、ある者は拳をグッと握り、ある者は声に出して喜んだ。
「頑張ってね！織斑君！」
「木場君も負けちゃ嫌だよ！」
「オルコットさん！イケるイケる！」
「「欲望に忠実だな！」」
『いやぁ……』
オイ、そこは照れる場面じゃないぞ。
「おりむーがんばって！」
「よぉし！お兄さん頑張っちゃうよっ！」
「お前は単純だな、一夏……！」
亮斗が何か言っているが、妹成分満載ののほほんさんに応援されたとなれば、もう優勝狙いしかない。
「さて連絡事項等言い終わった。授業を開始するぞ」
『はーい！』
姉さん改め織斑先生の号令に、全員が返事を返す。
そして始まる授業、――に意識を向けながらも頭の中では別の事を考えている。それは更識さんの事。
……一カ月ちょっと、か。専用武装は無いにしても、機体にだけ集中すれば間に合うか……？
ちょっとだけ想像してみる。
鋼の鎧を身に纏い、必死に戦いながらもどこか楽しそうな笑みを零し、アリーナの上空を舞う更識さんの姿。対戦相手は「簪ちゃんにヤられるのもまた至高!!」と笑顔全開で攻撃を当たりに行ってる我らのエロゲ好きシスコン生徒会長。

……うん、まあシスコン会長の事はともかく、良い笑顔の更識さんは見たいな。

クラス対抗戦までのスケジュールは大体埋まった。

凰来来

――四月中旬

朝、何時も通り教室に行くと、ちょっとだけ〝ざわ……、ざわ……〟としていた。席に着くと、待ってましたと言わんばかりに数人の女子が話しかけてくる。

「ねえねえ織斑君。二組に転校生が来たって情報知ってる？」

「は？」

間の抜けた声が出た。

……こんな中途半端な時に転校、ねぇ。なんて分かりやすい。

あきらかに狙いは俺たち男性ＩＳ乗り。しかもこの学園の中途入学者の試験は、入学試験時よりも実技の難易度が上がっていると聞く。それを突破したと言う事は、実力者だと言う事を周りに宣言しているものだ。

「ああ、そう言えば会長がボヤいてたな……」

「そうなの？」

実際はボヤいてではなく、転校生が来る事によって生じる諸処の関連事情に忙殺され更識さんをこっそり眺めてる暇が無い、と言った呪詛の念だったが。

……それでもキッチリ仕事はこなしてるあたり変に優秀だからなぁ……。

と言うか、こっそり眺める為の時間を作る為に自身のスペックをフルに使いすぎだ。さっさと仲直りすれば堂々とスキンシップとれるのに。

「おーっす」

「おはよう」

亮斗と箒も教室に入って来た。

「あ、亮斗君！聞いた聞いた?!転校生来るんだって！」

そして早速自称『情報通』の本条綾（ほんじょうあや）さんが亮斗に話題を振りに行く。

「あ？……あ、ああ、二組に来るんだっけ？」

……アイツの妙に歯切れの悪い返し。『転校生』は予定調和って事か。

「亮斗君も知ってたんだ……。あ、じゃあコレは知ってる!?その転校生、中華人民共和国の代表候補生なんだって!」

「綾?なんで正式名称で言ったの?」

「専門は何?総合?射撃?機動?」

「マジマジ。でも専門までは分からなかったわ」

「あ、あれー?私の疑問はー?」

「その話、本当ですの?」

一人の疑問をスルーして話しを進める女子達。そこにオルコットが混ざって来た。

「代表候補生と言う事は、もしや私の存在を今更ながらに危ぶんでの転入ですの……?」

「あー、それは別に関係ないんじゃないかなー?」

俺も同意だった。というか狙いは絶対俺たちだって。

つか、探せば代表候補生にスカウトされそうな娘は意外と居そうな気がする。

「でもウチだって負けてないっしょ。なんたって、一年では一組と四組にしか専用機持ちは居ないし」

胸が超痛い。

「そうそう!——頑張ってね織斑君!」

「私達に学食のデザートフリーパスを!木場君!」

「一緒に食べに行こうね!セシリアさん!」

「欲望に忠実だなぁ」

「「「「「「「「『女子って甘いモノ好きだなぁ』に修正して!」」」」」」」」

そんなハモんなくても。

「甘いわね!そのフリーパスは二組のモノよ!」

行き成り教室の前のドアが開き、大きな声で宣言した人物に全員の視線が向く。

肩だしスタイルに改造した制服の少女だ。勝気そうな碧の瞳に、心

なしか、それとも久しぶりに会ったからなのか、少し増量した胸部装甲にもかかわらず全く成長してない小柄な体格からは活発なオーラを出し、うなじ辺りに届くポニーテールの少女。髪型以外はめっちゃ見覚えのある顔だった。
「甘いって、デザートなだけにか？鈴」
その一言に、少女――凰（ファン）鈴音（インリン）は半眼のジト目を向けてきた。
「久しぶりに会ったのに、行き成り笑えないジョーク？アンタ、相変わらずねじ曲がった性格してるわね一夏」
「ツッコミ待ちかと思いまして」
「アタシが突っ込み役よ！」
「相変わらず毒されてんなぁ鈴」
「亮斗も久しぶりね。あと、この性格は付き合いが長かった所為よ」
「髪型変えたんだな」
前はツインテールだったのだが。
「解けばアンタ好みのセミロングよ？」
即座に復帰した数名がメモを取った。
……つーかなんで知ってるし……。
かなり混沌とした中で、二つの人物が此方に詰め寄って来る。
「りょ、亮斗？その……」「い、一夏さん？亮斗さん？その……」
箒とオルコットさんだ。だがしかし、残念ながら説明する時間がない。何故なら、
「そろそろ時間だ。席に着け」
時間に正確な姉さん先生が教室に入って来たからだ。それはつまり、後数秒でチャイムが鳴るのと同意。
そんな時報姉さんは、目の前に立つ鈴の存在に気付く。
「む？お前、鳳か……？もうすぐチャイムが鳴る。さっさと自分のクラスに戻れ」
「あ、はーい！あっ、昼休みにね一夏！亮斗！」
……相変わらず嵐みたいな奴。
「しかし昼か」
今日は坂地さんと話し合いがあるんだがなぁ。

◆

――昼

〝知識〟通りに箒とセシリアが千冬さん叩かれるのを見つつ、木場亮斗はもうそんな時期だったか、と内心で思う。

……原作とはだいぶ違うからなあ。

セシリアのクラス代表決定祝い会は一夏のケガが治ってすぐにやったし、この世界の一夏はＩＳに詳しいから地面にクレーターを作らなかったので、鈴の来るタイミングが分からなかったのだ。

……まあ、来なかったら来なかったでそういう歴史を歩んでんだって納得するしかないけどな。

仲のいい友人と再会できないのは少し悲しいが、今の俺の立場で中国に居る鈴に会いに行くのは無理な話だ。

……そもそも俺と鈴はそういった間柄じゃねーし、アイツの担当は一夏だ。

そう思いつつ授業内容をノートに書き込んでいると、授業終了のチャイムが鳴った。

「――ふむ、キリも良いので此処で終わろう。クラス委員、挨拶を」

「起立！――礼！」

『ありがとうございました！』

「ああ。次の授業も遅れるなよ？遅れたやつは放課後にアリーナの外周８周だ」

そう言って千冬さんはささっと教材を片づけ去っていった。ちなみにアリーナの外周は５ｋｍ、つまりは罰で４０ｋｍ。ほぼフルマラソンの距離だ。

「さあ亮斗！朝の女との関係を話してもらうぞ！」

「ですわね。私も気になっていましたの」

箒とセシリアが早速絡んできた。

「良いけど、取り敢えず本人もいた方が分かりやすいし食堂行こうぜ？」

「む？まあ、その方が分かりやすいか」

「それもそうですわね」
「決まりだな。じゃあいち――あ？アイツどこ行った？」
二人が提案を受け入れてくれたので、一夏を伴って食堂へ行こうとしたが、肝心の一夏がいつの間にか席からいなくなっていた。すぐに視線を教室の入り口に目を向けると、のほほんさんに弁当を渡して出ていく寸前の一夏と目が合う。
「亮斗！今日、ちょっと倉研の人と話し合いがあるから、鈴の対応宜しく！」
それだけ言うと、あっという間に出て行った。
……アイツ、逃げたな。
仕方ないので箒とセシリアを伴って食堂へ赴く。
「あ、木場君！鈴ちゃんきたんだって？」
「ああ。今から食堂で待ち合わせだけど来るか？」
「行く行く！」
その途中で、遠見と会ったのでついでに誘う。
「来たわね！ってあれ？亮斗だけ？」
予想通りの反応に、相変わらず素直だなーと内心で呟く。
……まあ、待ち人が来なかったらそんな反応にもなるわな。
自分の面倒を押し付けるとか、ホンっと原作とは大違いだ。その分の報いは受けてもらうが。
「やっほー鈴ちゃん」
「あ！真矢じゃない！久しぶりー！」
中学時代少しだったが親交があった二人が挨拶を交わす。
「二人から聞いてたけど、鈴ちゃんこっちに帰って来たんだね」
「友人ネットワークの伝達速度も変わってないわねぇ。となると、弾達にも伝わってるっぽい？」
「ぽいぽい。俺と一夏で回しといた。――それよりも鈴。券売機の前に居たら俺らが飯にありつけないんだが……」
「あ」
そこまで歴史再現しなくても良いのに。いや、食券だけでまだ昼飯を貰ってないところは違うか。

鈴が退いたので、それぞれ食券を買う。俺は箒製の弁当だが、最近はそれにプラスして吸い物系だ。今日は豚汁うどんにしよう。
早速注文し、お馴染みになりつつある窓際のテーブルに座る。
「んじゃあ改めて、久しぶ鈴」
「再会の言葉と私の名前を混ぜないでよ!!」
「懐かしいだろ？」
「ええ嫌ってくらいにね」
「ねえ、それより早く食べよー」
俺らの会話をまるっきり無視して、遠見が催促してきた。そしてその通りなので、全員して飯を食べ始める。
「――で、亮斗？その、この女とはいったいどのような関係と言うか繋がりなのだ？」
そして開始早々、箒が突っ込んできた。
「どんな関係と言われると、……箒が小４年の時に引っ越した後、５年になってから転校してきた同級生、だな」
原作では一夏の奴がセカンド幼馴染とか訳の分からない単語を使ってたが、俺の考え方で言えば幼馴染と言えば箒と一夏だけだし。
「で、中三になる前に親の都合で中国に引っ越すまで俺らとつるんで、色々やらかした女傑の一人でもある」
「ちょっと、変なこと言わないでよ！アレはアンタらが変なこと企てて私らに迷惑が掛かったからでしょっ！そうよね真矢?!」
「え？私!?……いやいや私は翔子と一緒に見守ってただけだし、笑いながら木場君たちを鎮圧してたのって凰さんと咲良じゃなかった？」
遠見の言葉に対し、鈴は少しの間　考え――、
「思い出の美化ってよくある事よね」
「それはあるかもしれねーが、改ざんは良くねーだろ」
「うっ！わ、分かってるわよ?!それより！一夏の奴はどこ行ったのよ！」
「さてな、妹属性持ちの娘のところじゃねーの？」
「あんの野郎っ相変わらずか……ッ！」
適当に言ってみたら鈴の怒りゲージを貯めただけだった。

……普段の行動が行動だし仕方ないか。

◆

「ッ!?」

背筋に悪寒が走った。

『おや？どうしたんだい？』

ソレを、通信先の相手――坂地添さんは目敏く気づいた。

場所はＩＳ学園内のセキュリティの高い通信室。その十の小部屋に区切られた一つ。

……でもさっきの嫌な感じ。選択ミスったか？でも坂地さんとの話し合いは前々から決まってたことだしなぁ。

ちなみに、普段は整備室で更識さんとのほほんさんと一緒に昼を取っている。

「それで、今日はいったいどんな用件で？」

『まず初めに、――ありがとう』

画面越しに頭を下げられた。

何事かと思う前に、頭を上げた坂地さんが言葉を繋ぐ。

『弐式の事、感謝しているよ。彼女の件は私もどうにもできなくてね、心苦しく思ってたんだ』

……この人、行動はアレなことが多いけど良いヒトだ……！

「気にしないで下さい。俺が好きにやってる事ですから」

『――そっか。いやーやっぱりキミもそう思ってたんだね！未完成のままじゃ弐式ちゃんも辛いよね!!』

「彼女ってＩＳの方かよ!!」

もちろん簪君の事も気にかけてるさー、なんて結構棒読みで言ってやがるが。前言撤回。やっぱりこの人はオカシイ。

『弟君は簪君のＩＳが完成して嬉しい、私は弐式が完成して日の目を見せる事ができるのが嬉しい。簪君はＩＳが完成して嬉しい。つまりｗｉｎ―ｗｉｎ―ｗｉｎの関係って事で納得しようじゃないか』

間違っちゃいないけど無理やり纏めやがった。

「……良いですけど、装備に関しては？」
『専用装備に関しても開発凍結にはなってないから、少人数ではあるけど開発を進めている。――それで本題なんだけど。白式の改修案の事だよ』
「――何か問題がありました？」
腹が減ったので、自作サンドウィッチに伸ばしかけていた手を止めた。昼メシにありつけるのは少し先になりそうだった。
『理論、技術的、ウチの予算的にも問題はないけど、ただ弟君が扱えるのか、と言うのが問題だね』
「つまり実力を示せと」
『そういう事。――できるかい？』
「やります」
いい返事だ、と坂地さんが笑う。
『そういう真っすぐな所、チフユとそっくりだよ』
「姉弟ですから」
さらに大きな声で坂地さんが笑い、
『――イチカならやりそうな気がしてくるね』
……あ、名前。
『こっちの企画も少しずつだが進めておくよ。上にバレない様こっそりとだけどね』
「感謝します――けど、大丈夫なんですか？主にスタッフの負担とか休みとか」
坂地さんフッ、と笑みを零すと。
『ＩＳに尽くし、ＩＳの為に倒れる。ＩＳに人生を捧げた者にとって最高の人生だと思わないかい？私の人生』
「自分だけに負担を強いてるのを褒めるべきか、倒れたら周りが迷惑するからと怒ればいいのか……」
この人なら本当にサービス残業して寝ずにＩＳイジってそうで怖い。
『そっちでも出来る部分は進めてても良いけど、その際は事前にレポートを送って欲しい。許可を出すかは上の判断が必須なんでね』

「じゃあまずは両肩のアーマー取っていいですか？」
『いいよ？』
案を出したら即座に許可された。
そもそも何故あんな戦隊ものっぽい肩アーマーが付いてるのだろうか？オルコットさんや打鉄、さらに弐型やラファールを見るに全機肩むき出しなのに。あれか、男の子だから戦隊ものに憧れてると思ったのだろうか？
『それで？他には何かあるかい』
「それじゃあ――」
その後、色々と話し合い、気づいた時には５時限目が始まるチャイムの音。
話の切り上げタイミングをミスった、と内心で後悔してもすでに遅く。昼飯を食べ損ねたのに加え授業の遅刻、初犯と言う事で放課後にグラウンド４周――　一周５ｋｍなので２０ｋｍ――の罰を受けることになった。

◆

時は進み放課後。時刻は七時近く。
「だいぶ遅くなったな」
既にグラウンドには人影はなく、漸くハーフマラソン越えの距離を終わらせたところだ。
これからはなるべく無断欠席は避けよう、と内心で誓う。なんせ更識さん達と過ごす時間が減るからな。
その更識さんと言えば、特殊武装系を除く弐式のプログラムが漸く完成した。あとはインストールと機体の組み立て、実際に動かし各種テストをクリアすれば完成となる――特殊武装なしだが。
「ＩＳ作るのって大変なんだな」
俺の知ってるＩＳの製作過程は白騎士だけ。しかも束さんが担当しており、俺が参加した時にはもうパーツやら何やらが全て揃った状況。俺がやったことと言えば、デバックやデザインのみだ。

……むしろ俺必要？っていう段階だったな。
それでＩＳの製作に携わったなんて言われても肩書負けする。
「なに辛気臭い雰囲気出してんのよ？」
「ん？よお、鈴」
昇降口の扉に寄り掛かる鈴に、手を挙げて答える。
その鈴は、ん、と軽く返事しつつこちらに近づき、手に持っていたスポーツドリンク缶とタオルを差し出してきた。
「お、さんきゅー」
受け取ったタオルで汗を拭き、プルタブを開け喉を潤す。キンキンに冷えたやつではなく、買ってから時間が経っているのか若干冷たさが和らいでいて飲みやすかった。
……一年経つのによく覚えてるな。
「ふう、生き返る。――さてと、改めて久しぶ鈴」
「だから再会の挨拶と私の名前を掛けないでよ」
むう、流石にもう二度ネタだったか。
「お約束だろ？」
「嫌なお約束ね！」
不機嫌に顔をそむける鈴。だがすぐに顔を赤くしてこちらに向き直った。
「一夏っ！」
「何？」
「こ、この後アンタの部屋に遊びに行っても良い？！良いわよね？！」
「いや俺の部屋はちょっと……」
「べ、別に亮斗が一緒だって構わないわよ？中学の時だって誰かの家に集合とか良くしてたんだし」
「いや、まあその通りなんだけど」
「なんか歯切れが悪いわね……、まさかっ」
……バレたかっ。
「一夏。まさかのまさかとは思って聞くけど、――ルームメイトは亮斗よね」
これが答えだ、と言わんばかりに顔を逸らす。

「ふ、ふふふっ」
「り、鈴、さん？」
妖しい笑い声につられ鈴を見ると、
「――　一夏」
「はひっ！」
綺麗な笑顔でほほ笑む魔王様が居ました。
「案内しなさい」
「い、いやでも」
「し　な　さ　い」
「さ、ｓｉｒ，Ｙｅｓ，ｓｉｒ!!」
「マムよ」
確かに鈴の反応は正しい。むしろコレが普通の反応だ。現に入学初日に更識さんと初対面の時だって厳重ロックの上　バリケード付きの対応だったしな。
だがそれ以前に、
……さっきから鈴の態度。焦燥か？確かに異性と同室ってのは色々マズいのってのは分かるけど、どーもそれ以外の理由がある気がする。
分からない。分からない、がどうやら国元に帰った後に色々あったみたいだな。
……まあ取り敢えず。
「鈴。部屋に案内するのは良いが、まずは着替えさせてくれ」
「四十秒で終わらせなさい」
「ついでに夕飯の買い物―」
「三分待ってあげるわ」
「……バルス」
「はっ、ワロス」
……此奴っ、突っ込みの切れ味が上がってやがるッッッ!!